岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第101集

岩手県埋蔵文化財発掘調査略報

（昭和60年度分）

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

岩手県埋蔵文化財発掘調査略報

（昭和60年度分）

(財)岩手県文化振興事業団
埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

序

昭和60年度の発掘調査事業は、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、岩手県・建設省・日本道路公団から委託をうけた17遺跡、98,000m²余りの調査を実施してまいりました。

調査遺跡からは、縄文時代の集落跡や狩猟場跡、奈良時代の集落跡や古墳、平安時代の集落跡、室町時代から江戸時代にかけての建物跡、江戸時代の墓跡や漆工房跡など、各時代に及ぶ遺構や遺物が発見されております。ことにも飛鳥台地Ⅰ遺跡や大久保遺跡の縄文時代早期の住居跡、沼久保遺跡や安比内Ⅰ遺跡、大久保遺跡などの連続する陥し穴状遺構、古館Ⅱ遺跡の奈良・平安時代及び中世の住居跡と赤彩の土師器、安比川東岸段丘上に連なる各遺跡から発見された平安時代の集落、そのなかでも飛鳥台地Ⅰ遺跡では、昨年度分をあわせて90棟以上の住居跡と多数の鉄器類が発見されたことなどが注目されます。

発掘調査略報は、各遺跡の調査報告書刊行に先だち、これら17遺跡の調査結果の概要を収録したものであります。本書が研究者のみならず、多くのかたがたに活用され、埋蔵文化財への御理解を一層深めていただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査事業をすすめるにあたり、御援助と御協力を賜わりました委託者をはじめ、地元教育委員会等関係各位に対し、心から感謝申しあげます。

昭和60年12月

財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　　中　村　　直

目　　次

I　岩手県関係

(1)　古館II遺跡(花巻市) …… 5

(2)　万丁目遺跡(花巻市) …… 13

(3)　境橋遺跡(盛岡市) …… 21

II　建設省関係

(1)　狄森古墳群遺跡(矢巾町) …… 31

III　日本道路公団関係

(1)　田余内I遺跡(浄法寺町) …… 41

(2)　田余内II遺跡(浄法寺町) …… 49

(3)　五庵III遺跡(浄法寺町) …… 53

(4)　沼久保遺跡(浄法寺町) …… 61

(5)　桂平遺跡(浄法寺町) …… 69

(6)　安比内遺跡(浄法寺町) …… 77

(7)　飛鳥台地I遺跡(浄法寺町) …… 85

(8)　広沖遺跡(浄法寺町) …… 93

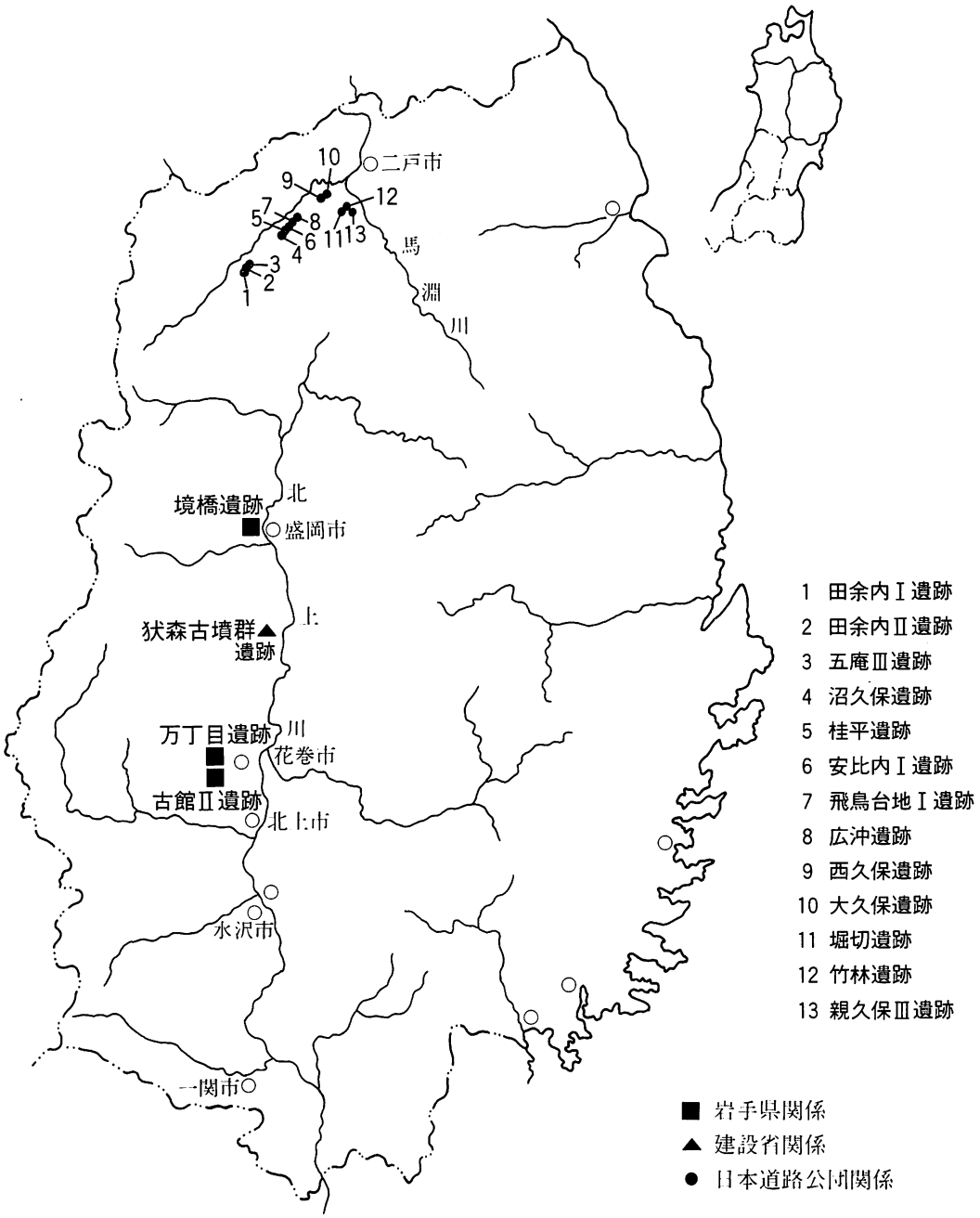
(9)　西久保遺跡(二戸市) ……101

(10)　大久保遺跡(二戸市) ……107

(11)　堀切遺跡(一戸町) ……115

(12)　竹林遺跡(一戸町) ……123

(13)　親久保III遺跡(一戸町) ……129

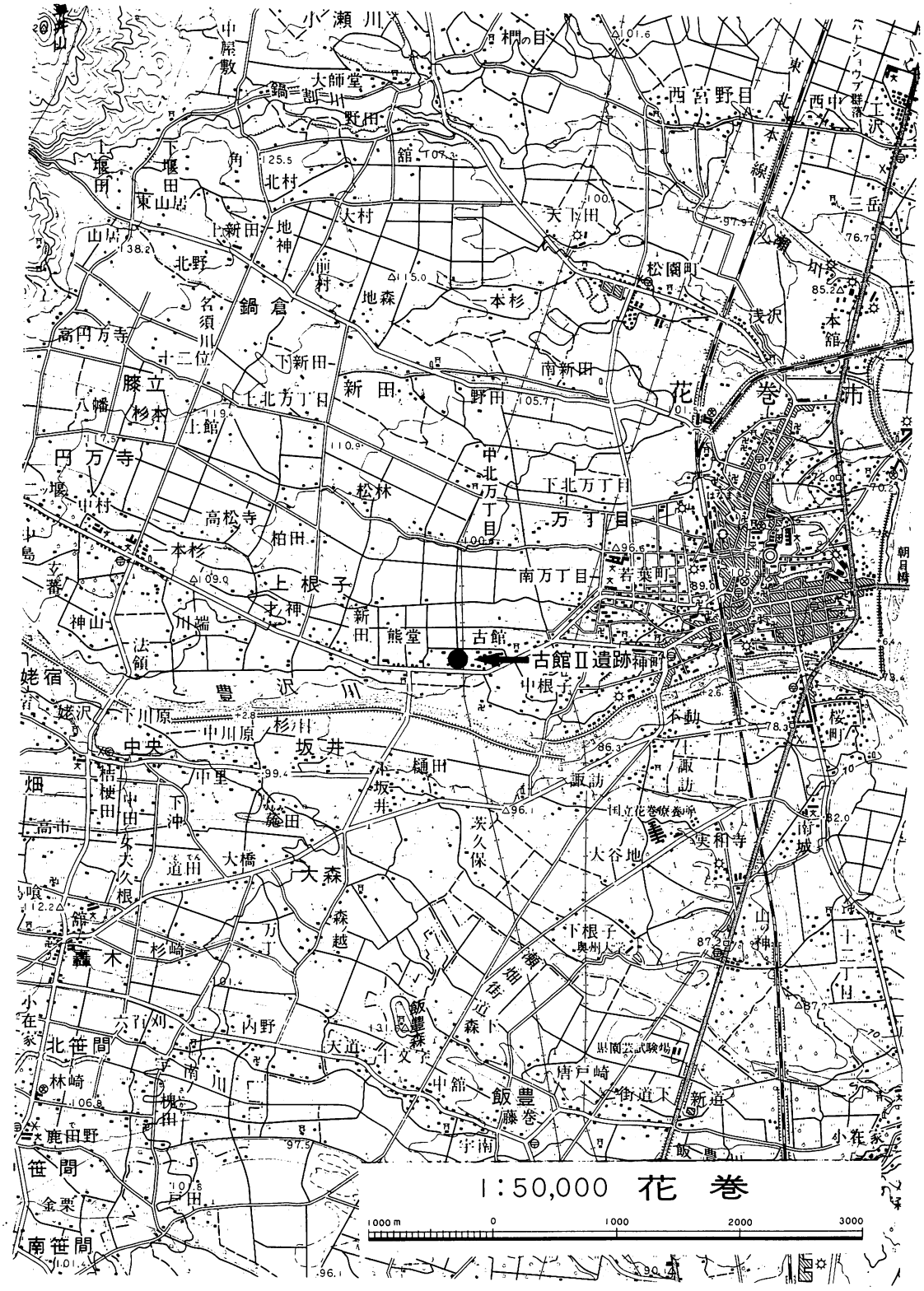


昭和60年度調査遺跡位置図

I　岩手県関係

（1） 古館（ふるだて） II 遺跡

所在地	花巻市中根子字古館１の１ほか
	花巻市上根子字米倉231ほか
委託者	岩手県土木部
発掘調査期間	昭和60年４月11日～８月13日
	昭和60年10月15日～10月31日
調査対象面積	3,651m²
発掘調査面積	3,651m²
遺跡番号・略号	ＭＥ25―2282・ＦＤII―85
調査担当者	菊池利和・光井文行・中川重紀・高橋義介
協力機関	花巻市教育委員会



古館Ⅱ遺跡位置図

1．遺跡の立地

古館II遺跡は、国鉄東北本線花巻駅の南西約2.5kmにあり、市街地から志戸平・鉛温泉方面へ向かう県道花巻・大曲線の北側に位置する。遺跡は豊沢川の左岸の段丘縁辺部に立地しており、現在段丘面は宅地、畑、水田として利用されている。標高は90～92m、豊沢川との比高は約10mである。

2．調査の概要

発掘調査は、東北縦貫自動車道花巻南インターチェンジに関連する道路建設に伴う緊急調査であり、調査区域は東西30m、南北120mの範囲である。

検出された遺構は、古代の竪穴住居跡29(奈良時代15、平安時代14)、中世の竪穴住居跡13、時期不明の住居跡状遺構3、掘立柱建物跡2、井戸跡1、土坑3、墓壙4、焼土遺構8、溝跡2、柱穴群7などである。遺物は土師器、須恵器が主体で、他に陶磁器、鉄製品、石器、炭化穀類等がある。

〈竪穴住居跡・住居跡状遺構〉

奈良時代の住居跡15棟は調査区域のほぼ全域に分布し、平面形は方形を基調とし、1辺3.5～4.5mのものと一辺6.5～7.5mのやや大型のものがある。カマドの位置は、7棟が北壁に、1棟が東壁に構築されている。カマドをもたないものも1棟あるが、6棟は他遺構との重複又は調査区域外に及ぶため不明である。多くは掘り方をもち、貼床がなされている。

平安時代の住居跡は、調査区域の中央部に多く分布し、平面形はほぼ方形となっている。規模は一辺が3.5～4m程である。カマドの位置は、4棟が東壁中央南寄りに、1棟は南壁中央東寄りに構築されている。カマドをもたないものが1棟あるが、他の8棟については不明である。南カマドをもつ住居跡は他と比較し壁高60cm位と高く、埋土から灰黄色細粒浮石が検出されている。

中世の住居跡は、ほぼ全域に分布しており、規模が3.5×5m程の長方形を呈するものと一辺が3～3.5m程の方形に近い形態のものに分けられる。10棟が張出し状の出入口施設をもち、6棟が東向きに、4棟が南向きにある。古代の住居跡に比較し壁高が高く、床面は礫層上面ないしは礫層中にあり、壁際に柱穴が配置される。貨幣、釘、炭化穀類が出土している。

住居跡状遺構は、一辺2.5～3mの方形のもの又は方形と思われるもの及び南側に大きな張り出しをもつ遺構であるが、時期は不明である。

〈掘立柱建物跡〉

建物跡と確認されたものは、4間×5間と1間×2間の2棟である。いずれも東側に土間をもつものと思われる。4間×5間の建物跡は柱穴の埋土の状況から江戸末期ごろと思われる。

〈井戸・土坑・墓壙・その他〉

井戸は中世のもので、平面形は約0.7×1mの長方形で、地表面からの深さは約2.5mある。埋土下位から貼付花文の青磁片、木製品が出土している。土坑は径1m前後の楕円形や方形を呈するもので、時期は不明である。墓壙は、一カ所に集中しており、火葬墓2基、土葬墓2基である。副葬品がなく時期不明である。溝跡2条のうち、奈良時代の住居跡の北側にある溝跡は、幅0.5m深さ30cmで緩く湾曲し、底面の壁際に多くの副穴をもつ。埋土の状況から古代に属するものと思われる。

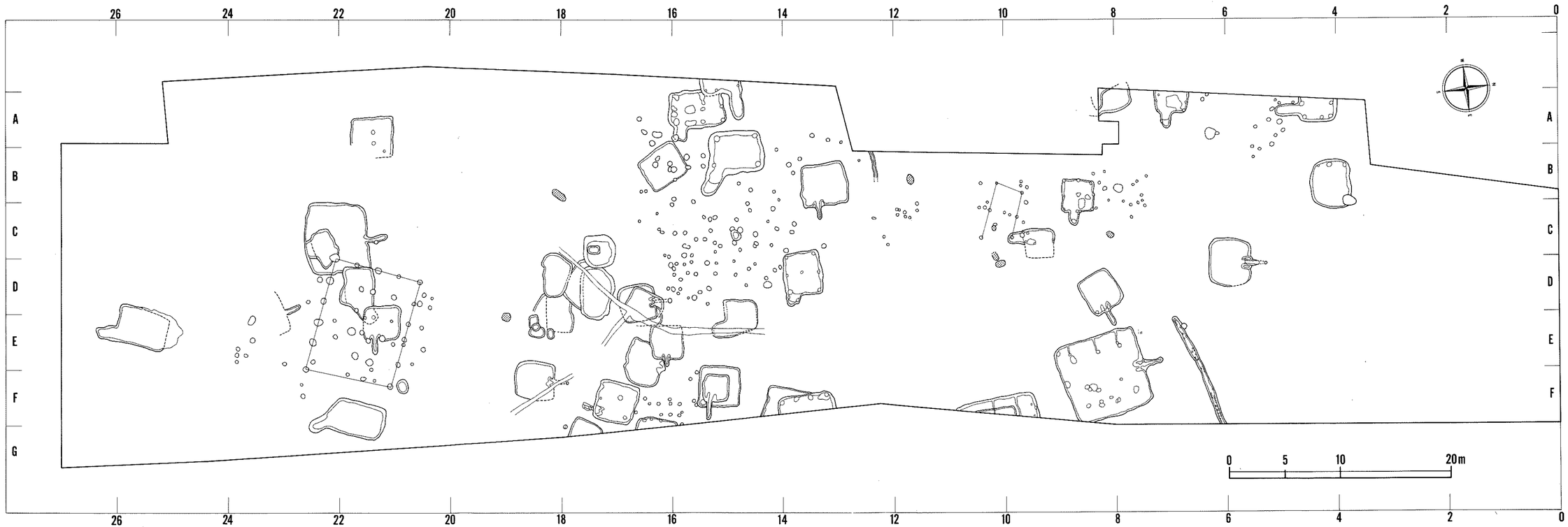
〈出土遺物〉

土師器、須恵器は坏、高坏、甕、壺等である。これらの中には赤彩の坏・高坏・壺と格子状沈線文をもつ甕、墨書のある杯がある。石器・石製品では砥石、磨石、円盤状石製品、黒曜石の削器様石器などがある。他に奈良時代の刀子、鉄滓、土製勾玉、土製紡錘車、中世の舶載の青磁・白磁、美濃・瀬戸の陶器、カンザシ、釘、炭化穀類、開元通寶・永楽通寶・寛永通寶・文久永寶などの貨弊がある。

3．まとめ

奈良時代、平安時代及び中世の遺構が、調査区域のほぼ全域から検出され、遺構がさらに調査区域外に延びることから、相当規模の集落が、この一帯に形成されていたと思われる。今次の調査では、奈良時代の住居跡には7世紀に属するものは検出されていないが、赤彩土器が非常に多く出土しており、熊堂古墳群とのかかわりがあるものか、他遺跡とも比較しながら究明して行きたい。平安時代の住居跡から墨書土器が3点、遺構外から1点出土しており遺跡の性格を考える上で貴重な資料であると思われる。

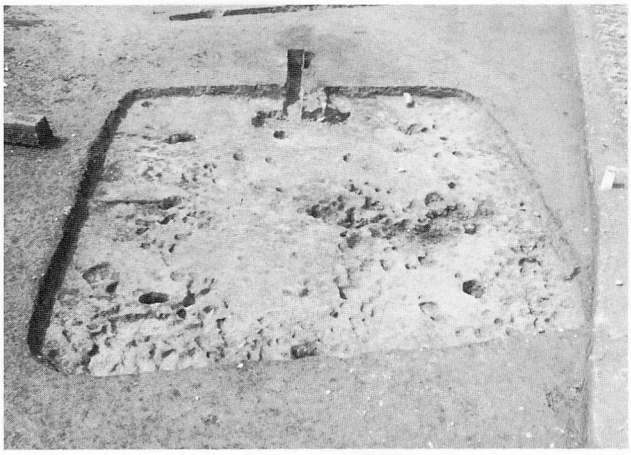
中世の住居跡が多く検出されたこと、出土した陶磁器は15世紀末から16世紀にかけてのものであることから、当遺跡は根子館の一部である可能性もある。



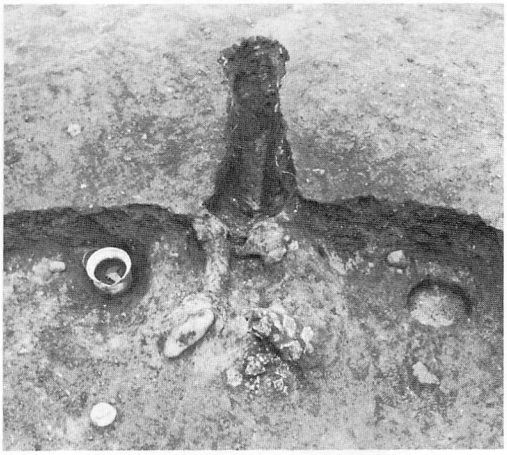
古館Ⅱ遺跡遺構配置図

空中写真（南から）

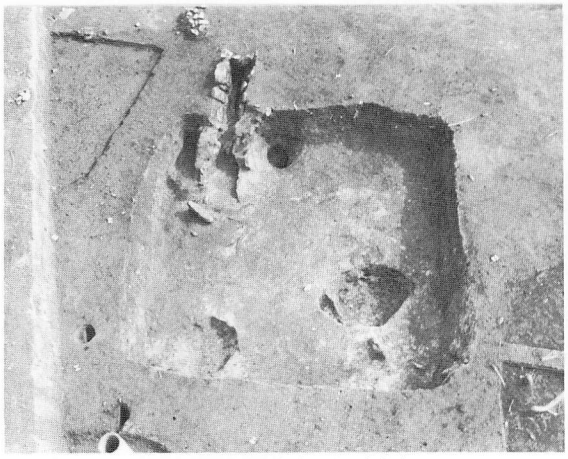
C17井戸（中世）



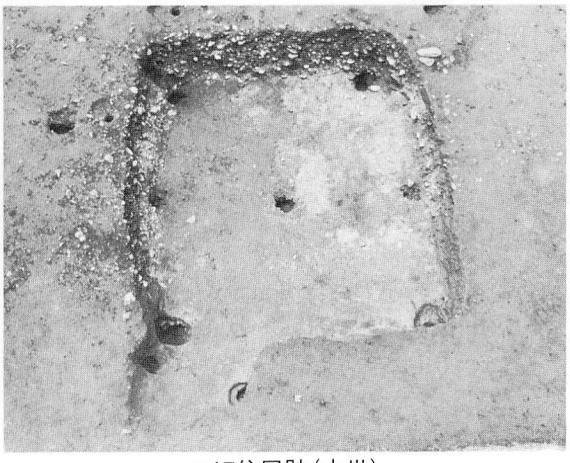
E07住居跡（奈良時代）



D07住居跡カマド（奈良時代）



E16住居跡（平安時代）



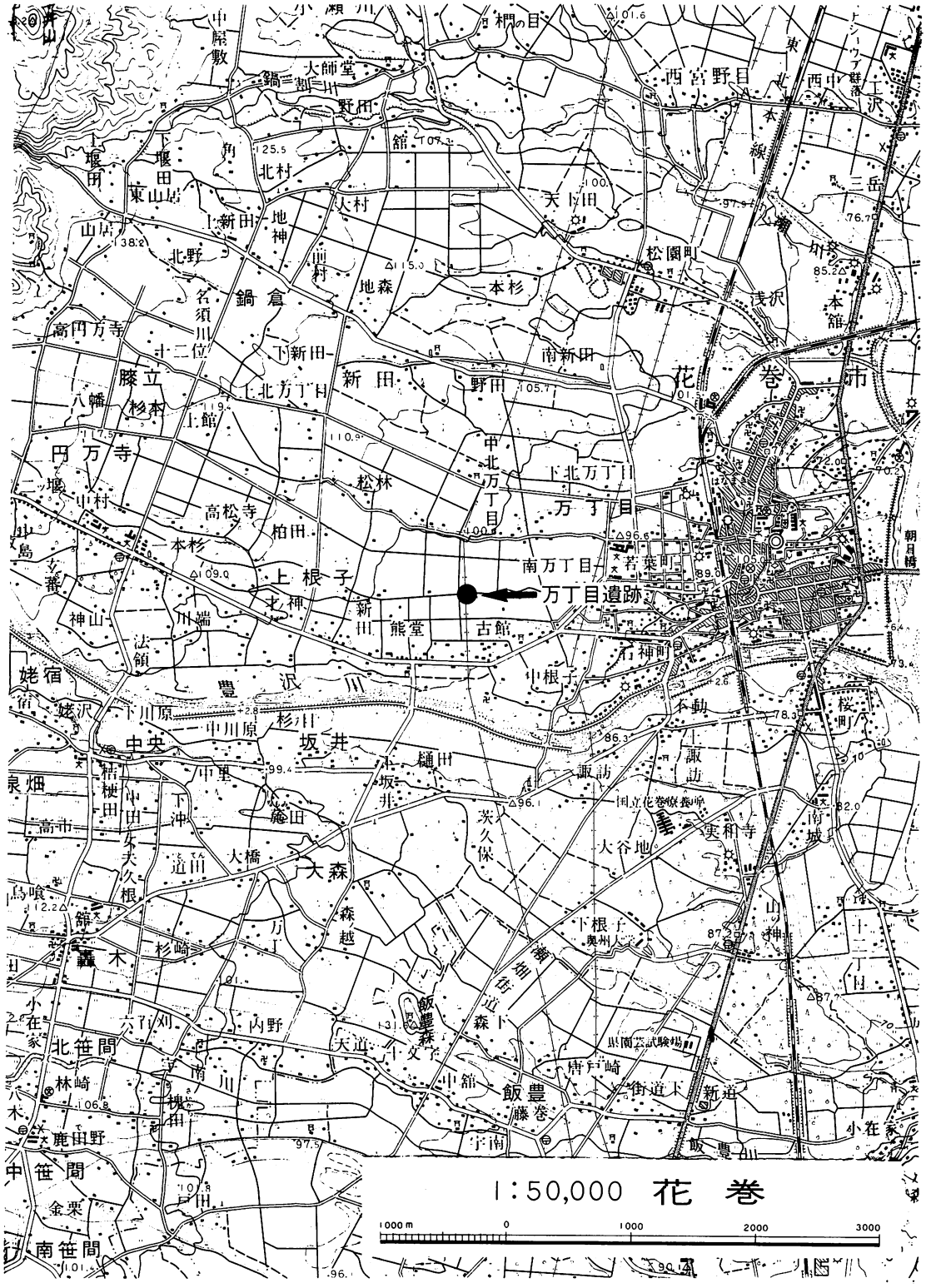
D17住居跡（中世）

古館Ⅱ遺跡遺構

古館Ⅱ遺跡出土遺物

（2） 万丁目遺跡

所　在　地	花巻市南万丁目851ほか
委　託　者	岩手県土木部
発掘調査期間	昭和60年４月11日～７月13日
調査対象面積	2,614m²
発掘調査面積	2,614m²
遺跡番号・略号	ＭＥ25―2255・ＭＴ―85
調査担当者	片方宗明・中川重紀
協力機関	花巻市教育委員会


万丁目遺跡
1:50,000 花巻
1000m 0 1000 2000 3000
花巻市
西宮野目
松園町
若葉町
石神町
本町
桜町
実相寺
大谷地
大森
坂井
中央
豊沢川
上根子
中根子
下根子
新田
南新田
万丁目
南万丁目
北万丁目
下北万丁目
中北万丁目
円万寺
高松寺
柏田
松林
上館
古館
熊堂
北神
法領
神山
川端
姥宿
姥沢
下川原
中川原
杉田
中里
下沖
大橋
森越
飯豊森
飯豊
藤巻
唐戸崎
街道下
新道
宇南
内野
北笹間
中笹間
南笹間
鹿田野
金栗
小在家
黒澤
天満
天王田
本杉
地森
浅沢
本舘
三岳
鍋倉
名須川
十二位
滝立
八幡
杉本
上館
中村
高市
泉畑
烏喰
轟木
杉崎
六月刈
林崎
槐田
戸田
国立花巻療養所
南城
山神
十二丁目
諏訪
茨久保
大谷地
下根子
奥州街道
黒澤芸試験場

万丁目遺跡位置図

1．遺跡の立地

万丁目遺跡は、国鉄東北本線花巻駅の南西2.1kmにあり、東北縦貫自動車道の西約250m、市街地から志戸平・鉛温泉方面へ向う県道花巻・大曲線の北約600mにある。

遺跡の標高は96mで、北西から南東に緩やかに傾斜する低位段丘縁の平坦地に立地している。遺跡の現状は、水田が主で一部畑地として利用されている。周辺には、熊堂古墳群、古館遺跡群などがある。

2．調査の概要

本遺跡の発掘調査は、東北縦貫自動車道花巻南インターチェンジ建設に伴う緊急調査である。調査区は道路を挟んで2地区に分かれ、幅9～14m、長さ38mのA～B地区と幅17～26m、長さ100mほどのC～H区である。

調査の結果、遺構はC～H区に多く、ほぼ全域に検出された。検出遺構は、竪穴住居跡8（奈良時代3、平安時代3、中世2）、縄文時代の炉跡5（石囲炉2、土器埋設炉3）、陥し穴状遺構3、土坑25（縄文時代4、平安時代1、現代9、時期不明11）、カマド状焼土遺構13（時期不明）、掘立柱建物跡4、溝跡10、柱穴約500、屋敷跡と考えられる遺構1である。

〈竪穴住居跡〉

奈良時代の住居跡は3棟である。全体の形状を把握できるのは1棟であり、3.80×3.55mの方形を呈し、北壁中央に石を芯材としたカマドが付設されている。出土遺物は、土師器の内黒坏、甕、土製の紡錘車、玉及び鉄鏃（？）である。

平安時代の住居跡は3棟であり、うち上下に切り合う2棟は方形を呈する。他の1棟は、長方形をしているようであるがすでに床面近くまで削られており、全体の形状等については不明である。カマドは、2棟が東側につくられており、他の1棟が北側中央付近にある。出土遺物は、ロクロ使用の土師器、坏(内黒土器、赤焼土器)、甕、須恵器の坏、などであり、特異なものでは、埋土中や床面近くから陶器片(灰釉、緑釉)が3片ほど検出されている。この他には、鉄製品として刀子や釘が僅かにある。

中世の住居跡は2棟である。平面形は方形を呈し、規模は3mほどで、出入口は南側ないし東側の中央部にありスロープ状となっている。カマドや炉は検出されていない。1棟の埋土中から永楽通寶が1枚出土している。

〈炉跡〉

いずれも縄文時代のもので、石囲炉2基、土器埋設炉3基の計5基が検出された。住居跡の炉とも考えられたが現在の段階では裏づける資料を欠くものである。土器埋設炉のうち、2基は深鉢形土器を西向き斜位に埋設し、他の1基は斜位と直立に組み合わせた土器を埋設したも

のである。時期は、中期末葉頃から後期初頭ごろと考えられる。

〈陥し穴状遺構〉

溝状のものが3基、各々単独で検出された。長軸方向はいずれも南北方向にあり、開口部での規模は、長径2.3～3.1m、短径0.26～0.35m、深さ62～75cmである。縄文時代のものと思われるが詳細は不明である。

〈土坑〉

縄文時代の土坑は、フラスコ形2基、皿形2基の計4基が検出されている。出土遺物に土器片がある。また、平安時代の土坑は、IIIE01住居跡の南側に1基と住居跡を切る1基、単独に検出された土坑1基の計3基がある。出土遺物は、土師器、須恵器である。

〈カマド状焼土遺構〉

カマド状焼土遺構としたものは、その形態がカマドの形状をしている13基である。12基は調査区東側のG区に集中して等間隔に検出された。上部は既に削平され底面しか残っていないが、いずれも燃焼部が北側、焚口部は南側にある。しかしD区で検出された他の1基はその関係が逆転している。出土遺物はなく、時期は不明である。

〈掘立柱建物跡〉

柱穴は、ほぼ調査区の全域で500個ほど検出されている。その中で掘立柱建物跡として確認できたものは、平面形が方形の掘り方をもつものが3棟、円形のものが1棟である。時期は平安時代以降と考えられ、大半の柱穴は中世に属するものと考えられる。

〈屋敷跡〉

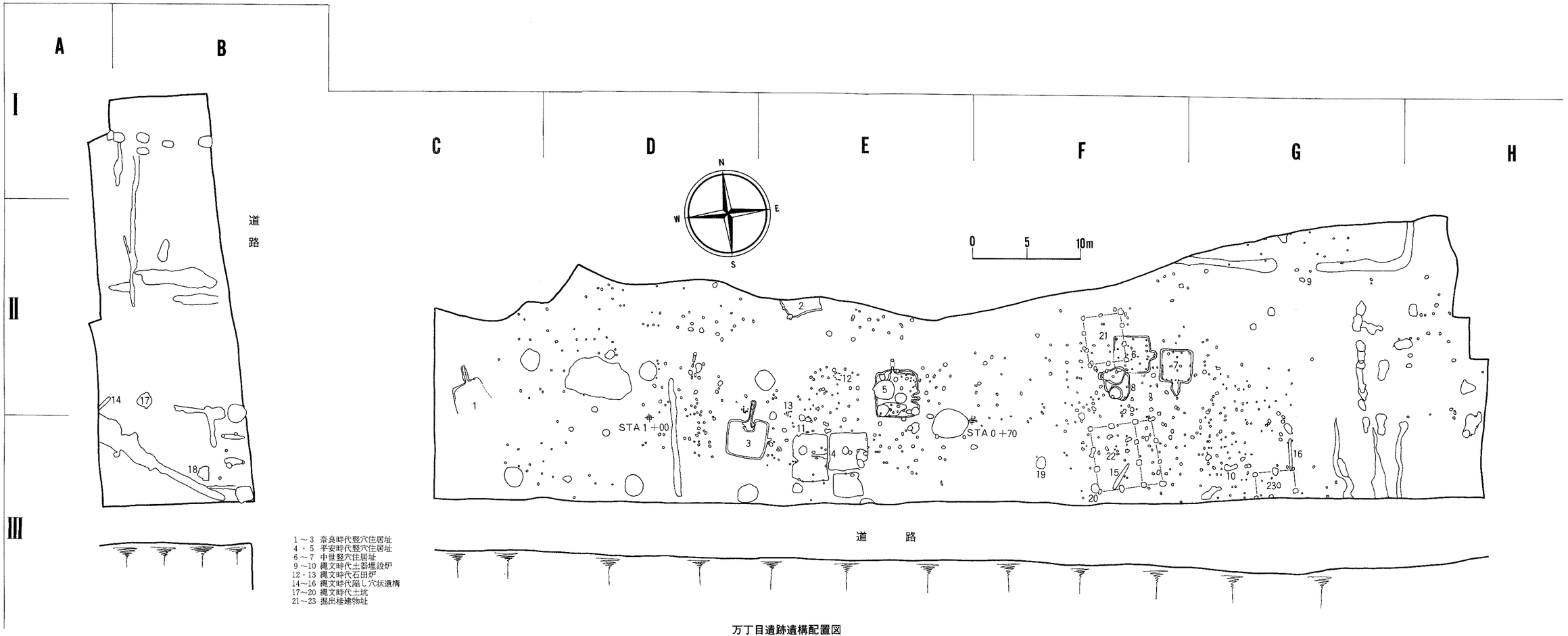
調査区東側のIIG区北端部で、東西方向に延びる溝が検出された。溝の東端は北に屈曲し西端は調査区外に続き、溝の中央付近は約3.6mに渡って跡切れている。この溝は一辺約25mの区画を構成し、中世～近世頃の屋敷跡であった可能性もある。

〈出土遺物〉

上述の遺構内出土遺物のほかに遺構外からは、縄文土器片、剝片石器類及びフレーク、チップ、コアが出土している。奈良・平安時代の遺物では、土師器・須恵器の坏、甕等、中世～近世の遺物には陶磁器片がある。

3．まとめ

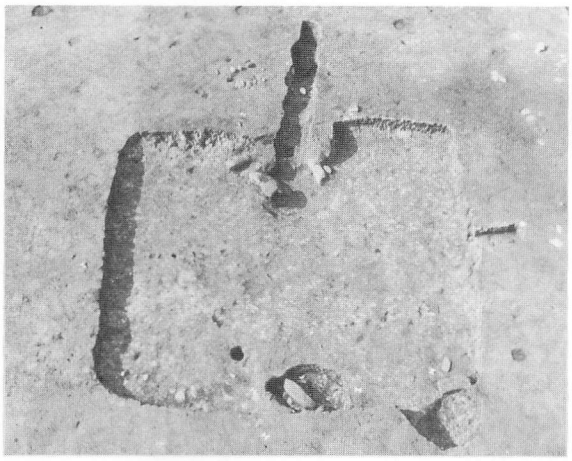
本遺跡は縄文時代から中世以降までにまたがる複合遺跡である。縄文時代の遺構は調査区域全面で検出されたが、古代・中世の遺構は調査区域中央に集中している。柱穴は多数検出され、遺跡全体に分布している。カマド状焼土遺構は東側に集中している。なお、遺跡の広がりは北側や西側に考えられる。



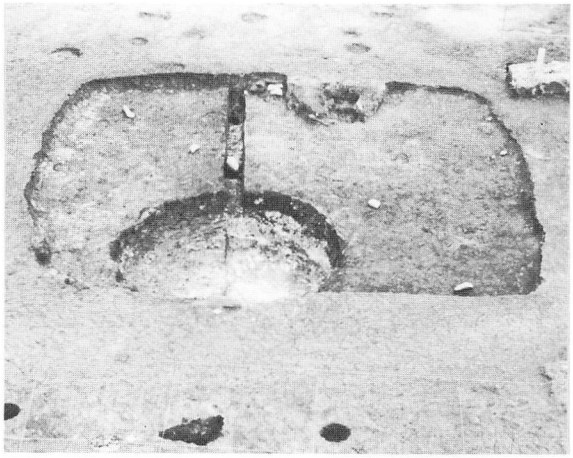
1～3　奈良時代竪穴住居址
4・5　平安時代竪穴住居址
6～7　中世竪穴住居址
9～10　縄文時代土器埋設炉
12・13　縄文時代石田炉
14～16　縄文時代陥し穴状遺構
17～20　縄文時代土坑
21～23　掘出柱建物址

万丁目遺跡遺構配置図

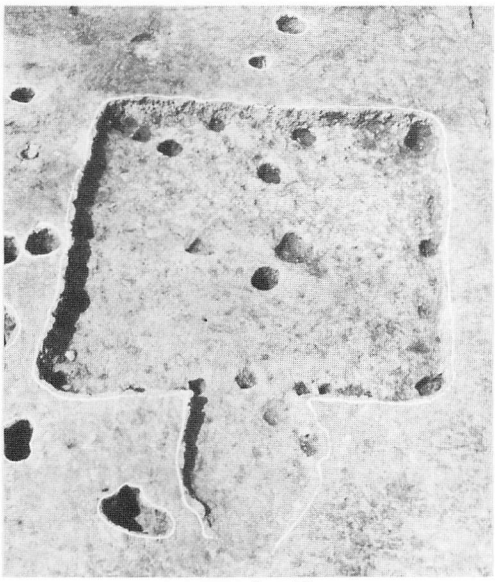
遺跡全景



ⅢD01住居跡

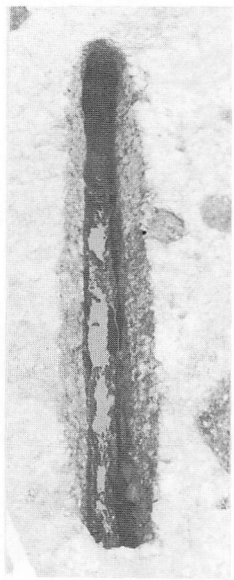


ⅡE01住居跡



ⅡF01住居跡

ⅡE02石囲炉



ⅢF01陥し穴状遺構

万丁目遺跡遺構

万丁目遺跡出土遺物

（3） 境（さかい） 橋（ばし） 遺 跡

所　　在　　地　盛岡市西青山三丁目30―1ほか
委　　託　　者　岩手県土木部（盛岡土木事務所）
発掘調査期間　昭和60年４月11日～５月31日
調査対象面積　2,858㎡
発掘調査面積　2,858㎡
遺跡番号・略号　ＬＥ05―0341・ＳＢ―85
調査担当者　昆野　靖・長沼　彬
協力機関　盛岡市教育委員会

境橋遺跡位置図

1．遺跡の立地

境橋遺跡は国鉄東北本線盛岡駅から北西へ4.5km、盛岡市・滝沢村境の境橋から南0.2kmの諸葛川左岸に位置する。

遺跡の北西は山地に続く低平な丘陵性台地が広がり、これより南方では段丘面が連なり東流する雫石川に限られている。遺跡は段丘の北東端にあたり、南側を小さい沢に画されるほかは三方を諸葛川と旧河道によって境されている。標高は135～136m、現状は畑地・宅地等である。

周辺の遺跡には、縄文時代の高柳遺跡や大緩遺跡等がある。

2．調査の概要

諸葛川中小河川改修事業によって河川敷となる諸葛川左岸の調査であり、調査対象区域は南北に二分される。北側は遺跡の北西端にあたり、東西18m、南北143m、南側は遺跡の南西端であり、東西18m、南北106mの範囲である。

調査の結果、北調査区からは陥し穴状遺構２、環状の溝１、東西・南北各方向の溝２、南調査区からは南北方向に走る溝３が検出された。

〈陥し穴状遺構〉

北調査区の北側に検出された２基のうち、完掘できた１基は、長さ3.9m、上幅0.3m、下幅0.1m、深さ0.8mほどの溝状を呈している。他の１基は調査区域外に続いているが、同様の形状を示している。遺物は共に出土していない。

〈溝〉

北調査区の北側に湾曲する一対の溝があり、東端は調査区域外に続く。２条の溝中央部の間隔は５mほどであり、溝幅0.3m、深さ0.2m、断面形はＶ字形に近い。埋土に火山灰が小さいブロック状をなして混在する。他の溝２条のうち、東西方向の溝は幅2.84m、深さ0.29～0.42m、低部は緩やかに西方へ下降している。南北方向の溝は、長さ43.08m、幅1.76m、深さ0.40m、断面形はＶ字状に近い。埋土下層には砂の堆積がみられ、酸化鉄分の集積がある。

南調査区の溝３条は、いずれも南北方向に走る。調査区の北側と西側の２条は、東西の調査区域外に続く。北側の溝は、長さ26.0m、幅1.06m、深さ0.40m、断面形はＶ字形をなし南へ傾斜する。上部はいずれも削平をうけて浅くなるが、直線状に延びる溝では長さ約65mまで確認される。埋土下部に砂粒の堆積がみられる。しかし、共伴する遺物は皆無である。

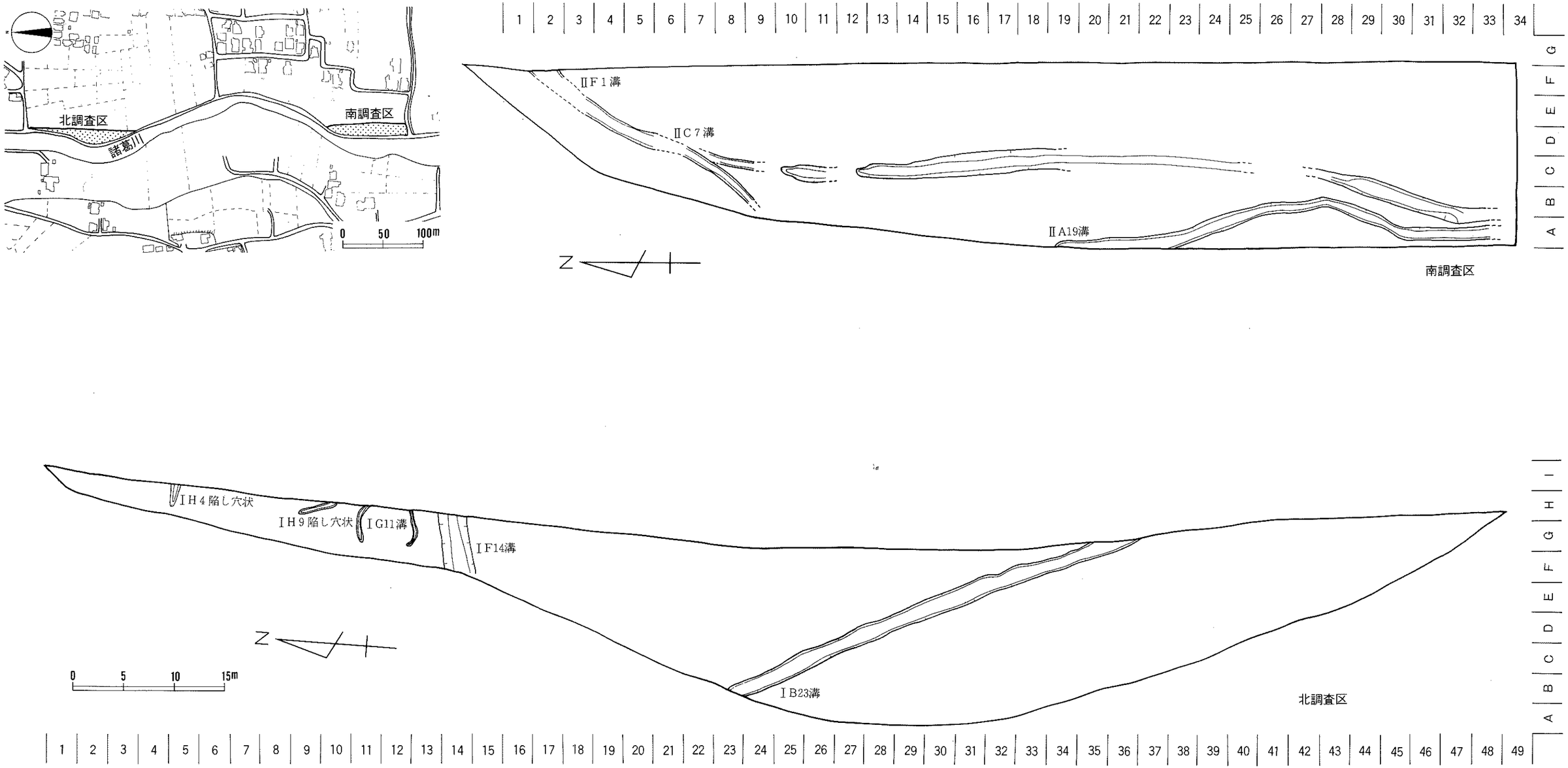
〈出土遺物〉

土師器坏・甕と須恵器甕の破片若干である。土師器の坏には内面黒色処埋されるものが含まれ、甕はロクロ使用の成形である。そのほか、擂鉢片や鉄銭がある。北調査区に多いが、いずれも耕作土中から出土する遺物である。

3．まとめ

北調査区では、縄文時代の陥し穴状遺構、平安時代以降の溝3条が検出された。また、南調査区には南北方向に走る溝3条があり、近世以降の用水路等が考えられる。

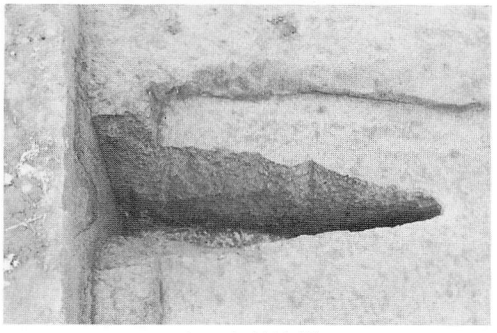
遺物は全体に少ないが同一面をなす東側の調査区域外には土師器片が比較的多く分布しており、この点では平安時代の遺構は主として東方に存在していることが予測される。


北調査区
南調査区
諸葛川
0 50 100m
ⅡF1溝
ⅡC7溝
ⅡA19溝
南調査区
ⅠH4陥し穴状
ⅠH9陥し穴状
ⅠG11溝
ⅠF14溝
ⅠB23溝
北調査区
0 5 10 15m

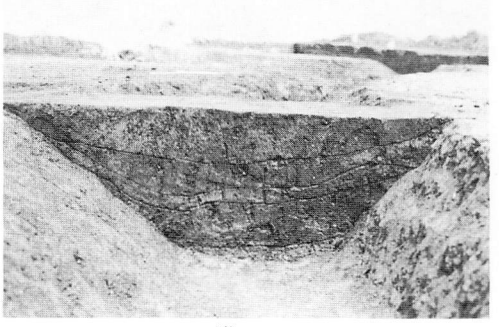
境橋遺跡遺構配置図

北調査区全景空中写真

南調査区全景空中写真



陥し穴状遺構

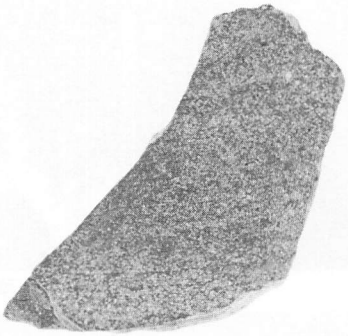


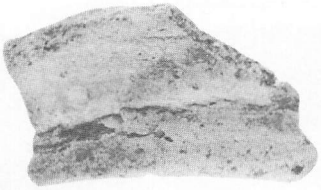
溝断面

境橋遺跡遺構

溝跡

溝跡



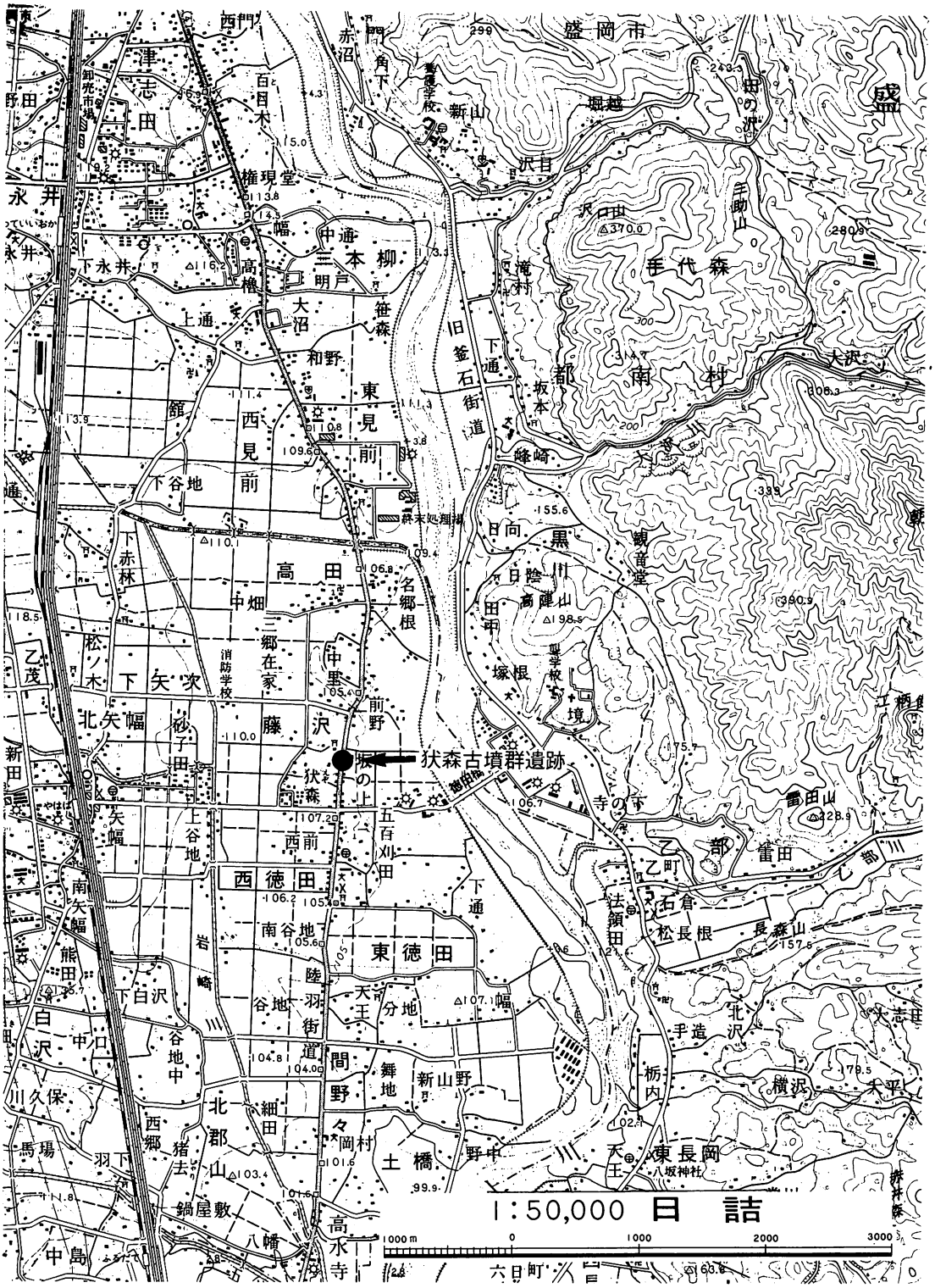


境橋遺跡遺構と出土遺物

II 建設省関係

（1） 狄森古墳群遺跡

所　在　地	紫波郡矢巾町大字藤沢第７地割字狄森58－２ほか
委　託　者	建設省（岩手工事事務所）
発掘調査期間	昭和60年８月19日～10月31日
調査対象面積	2,200㎡
発掘調査面積	1,500㎡
遺跡番号・略号	ＬＥ47－0183・ＥＭ－85
調査担当者	菊池利和・光井文行
協力機関	矢巾町教育委員会



狄森古墳群遺跡位置図

1．遺跡の位置

狄森古墳群遺跡は、国鉄東北本線矢巾駅の東方約2㎞に位置している。盛岡市の南約8㎞にあり、国道4号線が遺跡内を南北に貫通している。

遺跡は北上川西岸の標高105～107mの都南段丘上に立地する。

本遺跡の南約0.7㎞には、平安時代初期の「徳丹城跡」があり、周辺には矢巾口遺跡、白山堂遺跡、田郷遺跡、西前遺跡、館畑遺跡など、古代の遺跡が分布する。

2．調査の概要

今回の調査の対象となった部分は、国道4号拡幅工事に伴なう発掘調査である。調査範囲は国道の両側約300mで、国道の両端から3～5m幅と狭いため、遺構全体を調査できたものはほとんどない。

検出された遺構は古墳15（奈良時代またはそれ以前）、溝跡17（うち奈良・平安時代9）、ピット7、墓壙3（奈良時代と推定）、平安時代の竪穴住居跡2である。遺物は墓壙内から直刀、住居跡内から土師器・須恵器、遺構外から勾玉・切子玉の装飾品が出土している。

〈古墳〉

古墳は西側調査区南北両端を除いて、全体に分布している。古墳の全体を調査することはできなかったが、検出された周湟の部分から古墳と推定される。古墳の墳丘はすべて削平されている。

外径の規模を推定できた12基のうち、最大は13～14m、最小は5～6mである。外径が10m以上のものは4基である。周湟の幅は最大が2.4m、最小が0.6mで、1.5～2m前後のものがもっとも多い。周湟の深さは6～60cmで、40～50cm前後のものが多い。

周湟外側の壁はゆるく立ち上がるのに対し、主体部のある内側の壁はかなり急な角度で立ち上がっている。周湟の埋土の上位に、褐色の細粒浮石がブロック状に観察されるものがある。死者を埋葬した古墳の主体部（土壙）はすべて調査区外にあり、今回の調査では検出されていない。主体部が国道4号線及び歩道下にあると推定されるものは7基である。

〈土壙〉

奈良時代と思われるものが3基検出されている。形状は隅丸の長方形を呈する。規模は、長さ1.8～2m、幅75～95cm、検出面からの深さ20～26cmである。長軸は北西―南東である。底面はやや舟底形のものと平坦なものとがある。そのうち、1基の南西寄りの底面直上から現存長約36cmの直刀が検出されている。また、他の1基からは埋土下部から多くの炭化物が検出されている。

〈竪穴住居跡〉

平安時代の竪穴住居跡２棟が、西側調査区南端に南北に並んで検出されている。２棟とも西側半分が調査区外にあるため詳細は不明である。検出されている壁の輪郭線から規模、形状を推定すると、１棟は一辺が３ｍ前後、他の１棟は一辺が４ｍ前後の方形を呈しているものと思われる。カマドの位置は前者が東壁中央部南寄り、後者が東壁中央部北寄りに設けられている。前者のカマドは袖部の最下部と燃焼部の使用面のみが残存していた。カマドの北側に壁から連続するスロープ状の施設が検出され、出入口の施設に関係あるものと思われる。後者のカマドは袖部が扁平で細長い亜円礫を芯に暗褐色土でまいて構築されている。煙道は半地下式のものである。２棟とも平安時代の前期に属するものと考えられる。

〈溝跡・ピット〉

溝跡17条のうち古代に位置づけられる溝は９条検出されている。そのうち６条は幅45～70cm、深さ９～34cmと小さいものである。他の３条は幅1.6～2.5m、深さ14～42cmと幅の広い溝である。これらの溝跡のうち孤状を呈するもののいくつかは古墳周湟の可能性のあるものが含まれている。

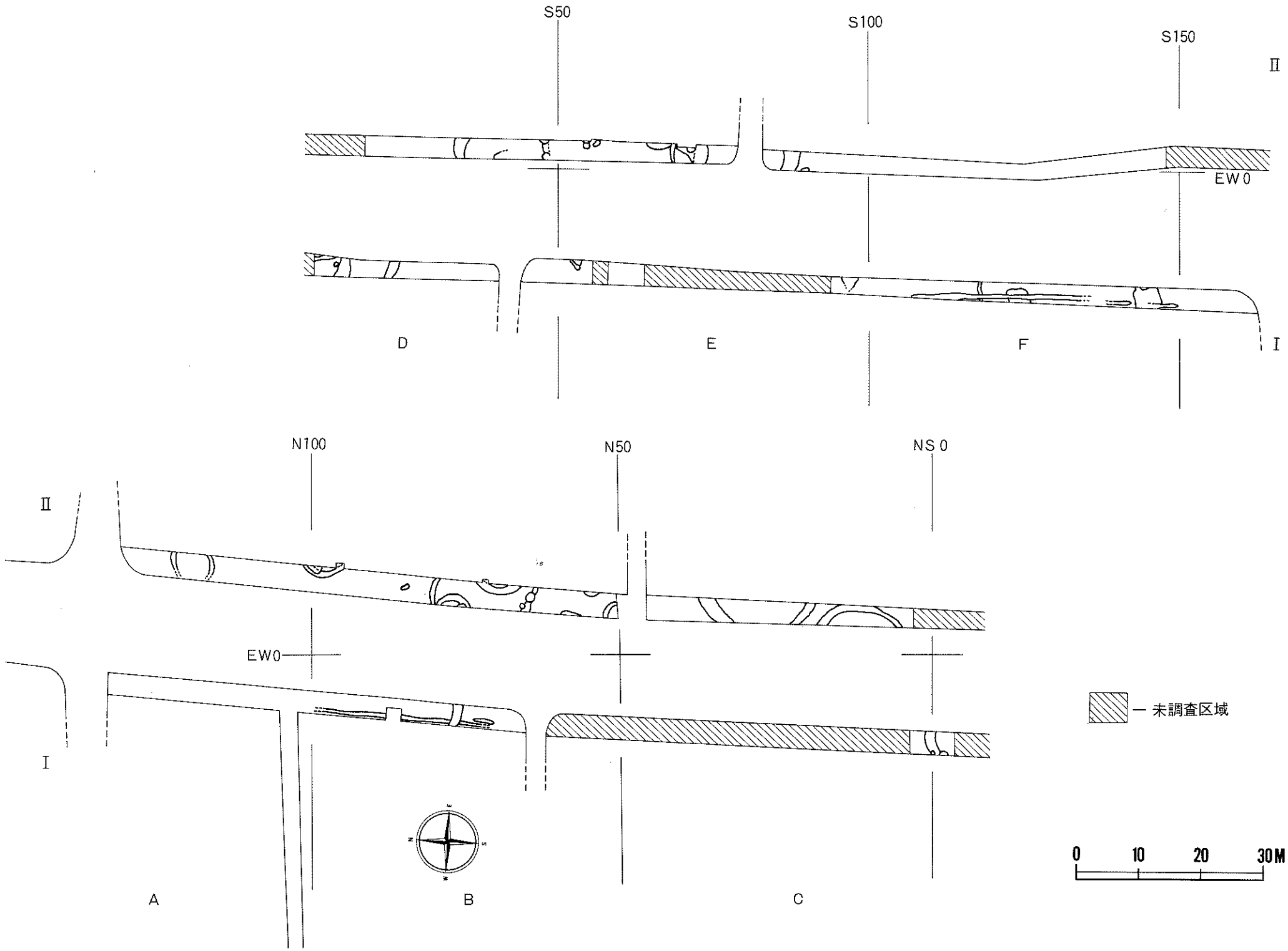
ピットは７基検出されている。うち完全に検出されているものは３基である。形状は円形、方形、溝状、不整方形と様々である。これらの規模は長軸径（口径）0.7～２ｍ、深さ22～73cmである。ピットはいずれも近世以降のものと思われる。

〈出土遺物〉

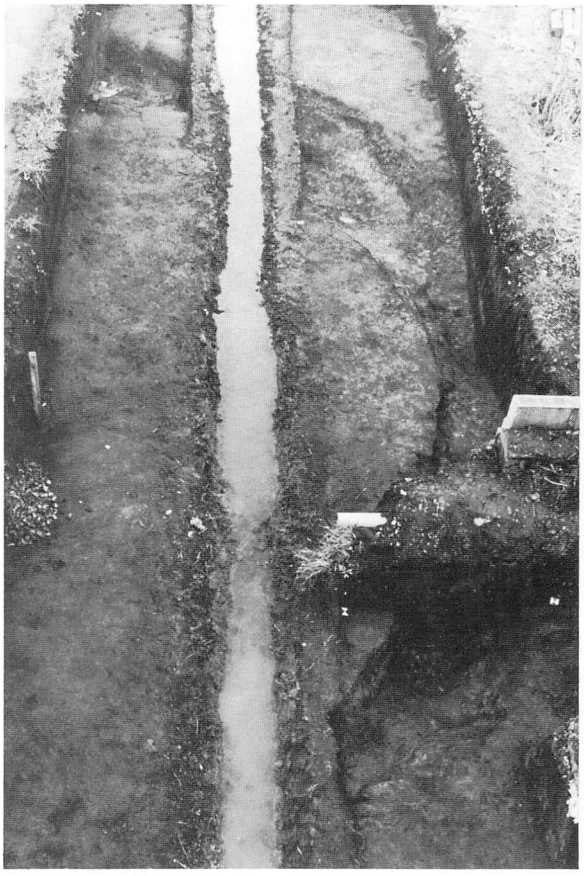
古墳に関係する遺物としては調査区南半の東側で勾玉１点、切子玉１点が出土している。墓壙からは直刀が１点出土している。刀の先が北西方向に向いて南西寄りで検出されたものである。住居跡からロクロ使用の土師器坏・甕、酸化炎焼成の須恵器坏、叩き目痕を内外面にもつ須恵器甕が出土している。土師器坏は底部切り離しが回転糸切りで無調整のものである。

３．まとめ

今回の調査で古墳が15基も検出された。調査区の東側では矢巾町教育委員会の調査によって古墳が確認されており、狄森古墳群は段丘の北東側全体に広がっていることがわかった。また、調査区西側南端で平安時代の竪穴住居跡が検出されたことから、国道沿いの古墳の分布はここで跡切れ、岩手県教育委員会が古墳を確認した南西側に更に広がるものと思われる。また国道及び歩道下にもかなりの遺構、遺物の存在が考えられる。

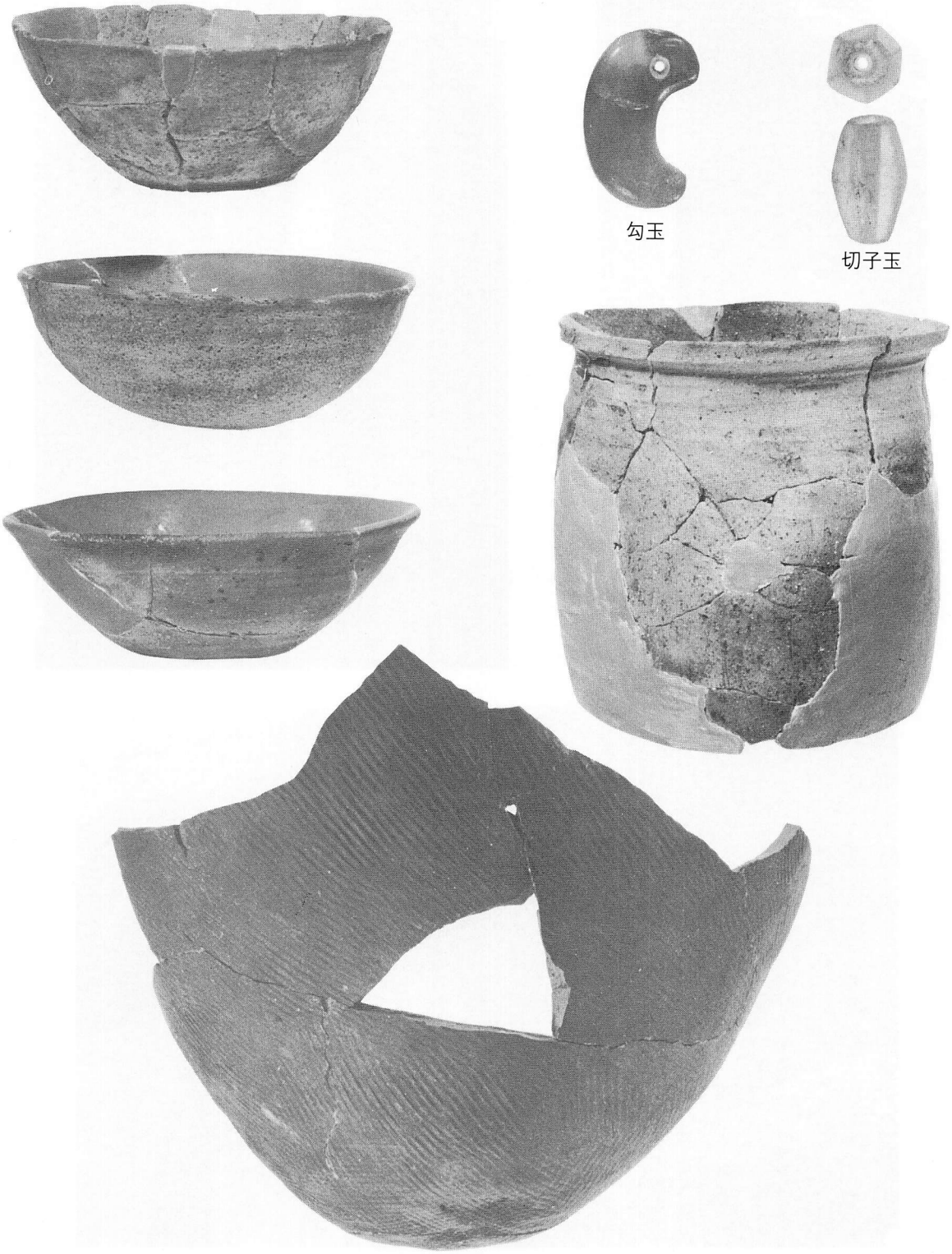

S50
S100
S150
Ⅱ
EW 0
D
E
F
Ⅰ
N100
N50
NS 0
Ⅱ
EW0
Ⅰ
A
B
C
未調査区域
0
10
20
30M

狄森古墳群遺構配置図



左上・土壙（直刀出土）
右上・古墳の周湟
下　・竪穴住居跡
（上・奈良時代、下・平安時代）

狄森古墳群遺跡遺構

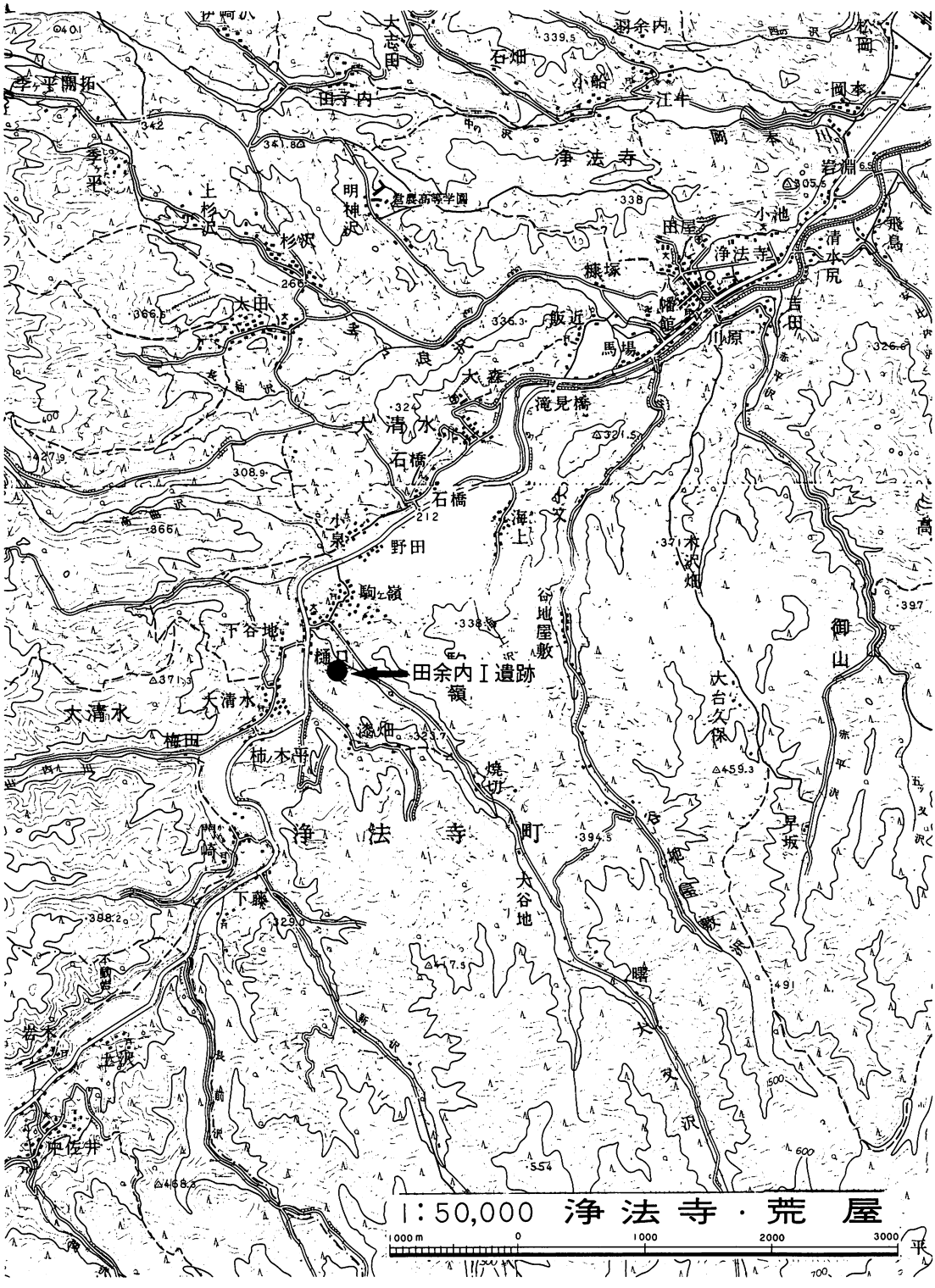


狄森古墳群遺跡出土遺物

III　日本道路公団関係

（1） 田余内（たよない）Ⅰ遺跡

所　　在　　地　二戸郡浄法寺町大字駒ケ嶺字田余内32－1ほか
委　　託　　者　日本道路公団仙台建設局（一戸工事事務所）
発掘調査期間　昭和60年8月5日～10月11日
調査対象面積　2,090㎡
発掘調査面積　2,090㎡
遺跡番号・略号　ＪＥ46－0087・ＴＹＩ－85
調査担当者　渡辺洋一・石川長喜
協力機関　浄法寺町教育委員会


田余内Ⅰ遺跡
1:50,000 浄法寺・荒屋
1000m 0 1000 2000 3000
浄法寺
大清水
石橋
野田
駒ヶ嶺
下谷地
梅田
柿本寺
荒屋敷
大谷地
御山
大台久保
早坂
岩手
佐井

田余内Ⅰ遺跡位置図

1．遺跡の立地

田余内Ⅰ遺跡は浄法寺町役場の南西4km、大嶺小中学校の南0.5kmに位置している。遺跡は安比川支流の大又沢左岸にあたり、一段高い丘陵縁辺部に立地している。標高は250～255mで、大又沢との比高は15～20mである。調査区域の中央部には南に沢頭をもつ浅い埋没谷(凹地)があり、遺跡を二分している。

周辺の遺跡には、隣接する田余内II遺跡のほか田余内III・駒ケ嶺館・五庵Ⅰ・II・III遺跡などがある。

2．調査の概要

調査区域は東西69m・南北35mの東斜面と北東緩斜面にあり、畑地と山林を対象として実施したものである。発掘調査の結果、平安時代の竪穴住居跡3・土壙1・陥し穴状遺構15・炭窯1などの遺構を検出し、住居跡出土の土師器・鉄器・砥石の他は、縄文土器・石器・古銭等の遺物を発見した。

〈竪穴住居跡〉

3棟のうち2棟は東端の平坦地に占地し、他の1棟は西側の斜面に位置している。東側のＩＪ7住居跡は、6.3×6.1mの方形の焼失住居跡である。床は全面貼床され、床面に上屋構造材と推定される炭化材が放射状に広がっている。柱穴は4個で対角線上にあり、浅い壁溝が巡っている。カマドは南壁西寄りに構築され、煙道はトンネル式である。

西壁寄りには隅丸方形の土壙が2基南北に連なっている。規模は1.2×0.8mである。このうち1基は住居跡の廃棄時に、掘り上げられた明褐色土を周辺に盛り上げたまま放置された状態を示していた。壁際には幅10数cmに暗褐色混土が認められ、土止めなどのはたらきが考えられる。

ＩＨ8住居跡はＩＪ7住居跡の南西隣り2mに位置している。2.6×2.6mの比較的小規模な竪穴住居跡である。柱穴は発見されず、カマドは南壁西寄りに構築され、トンネル式煙道である。土壙は3基あり、いずれも北半に寄っている。特に東側の1基は隅丸方形で深く、ＩＪ7住居跡の土壙に酷似している。

西側に位置するＩＣ3住居跡は斜面下位を欠失するが、3.5mの方形と推定される。床面に焼けたシルト質土とともに炭化材が散乱している。柱穴は2個検出された。カマドは南壁西寄りに構築されている。袖部は左右とも芯材として扁平な円礫を埋設し、シルト質土を貼り付けて固定している。幅は40cmである。煙道は両側に扁平な円礫を4個連らねて埋設し、その上に扁平な円礫4個の天井石を置き、さらに灰白質シルト質土で入念に固定している。煙道部の内側幅は10cm強である。煙道底部は先端に向い緩やかに傾斜して上がる。袖の部分から煙出し部分まで全長190cmである。

遺物は、ＩＪ７住居跡から甕・内黒の台付坏・砥石・鉄器・鉄滓、ＩＨ８住居跡から甕・鉄器、ＩＣ３住居跡から甕などが出土している。

〈土壙〉

平面形が開口部径90cmの円形・断面形が皿形の土壙である。埋土に十和田ａ降下火山灰と思われる火山灰が混入している。出土遺物には土師器片がある。

〈陥し穴状遺構〉

円筒状に掘り込んだタイプの３基と溝状に掘り込んだタイプの12基がある。円筒状陥し穴状遺構は開口部径1.3～1.4m、深さ1.6～2.1mである。そのうち、２基には底部に径３～４cm、深さ20～30cmの杭痕がある。逆茂木状の施設があったと推定される。

溝状陥し穴状遺構は長さ2.5～3.5m、深さ1.3～1.6mである。比較的大型のものが多い。長軸断面形はオーバーハングする形である。時期を決定する遺物はないが、円筒状陥し穴状遺構を溝状陥し穴状遺構が切っていることから、前者が先行すると考えられる。またＩＣ３・ＩＨ９両溝状陥し穴状遺構が平安時代住居跡によって切られている。配置については、円筒状陥し穴状遺構が斜面部に、溝状陥し穴状遺構は全域に分布するが、顕著な規則性はみられない。

〈出土遺物〉

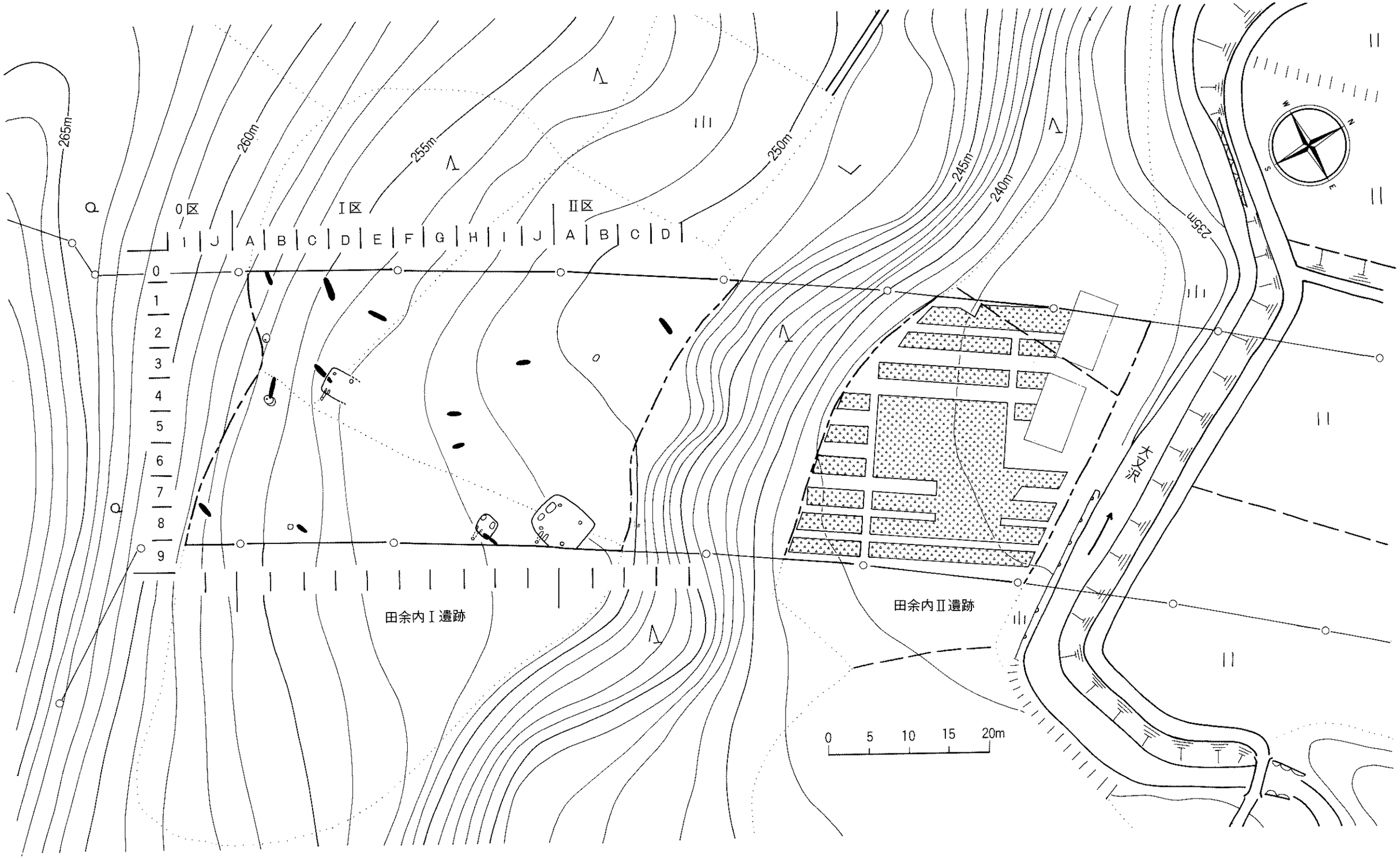
既述した住居跡出土遺物以外に縄文土器・石器・少量の土師器・古銭等がある。縄文土器は早期～晩期のもので前期の深鉢形土器が主体をなす。石器は石鏃・石匙・箆状石器・凹石・特殊磨石・石皿・石棒などである。

３．まとめ

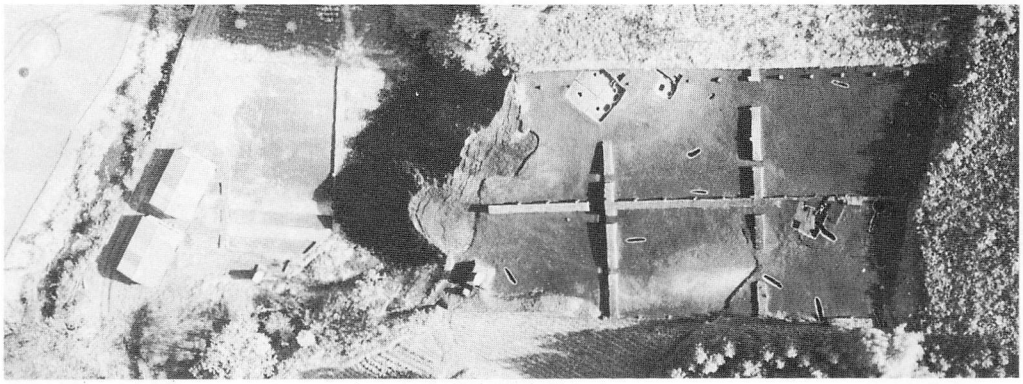
縄文時代と考えられる陥し穴状遺構群、平安時代の竪穴住居跡が検出され、縄文時代には狩猟の場として、平安時代には生活の根拠地として複合する遺跡である。

円筒状陥し穴状遺構から逆茂木を推定させる杭痕が確認されたことは、最近県内で円筒形の陥し穴状遺構の検出が増大しているなかで、形態・機能を考えるうえでの好資料となろう。

平安時代竪穴住居跡は、３棟ともカマドの位置・向きが南壁西寄りであること、埋土下部まで十和田ａ降下火山灰が混入することなどから、同時期に存在したと考えられる。

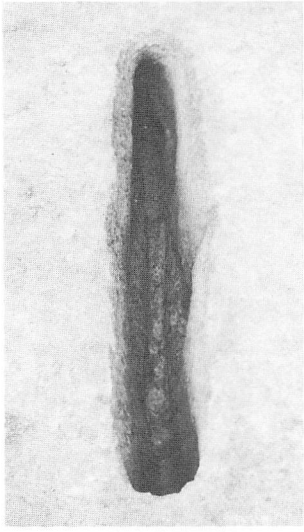


田余内Ⅰ遺跡遺構配置図

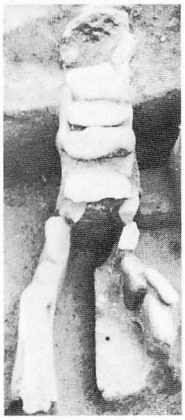


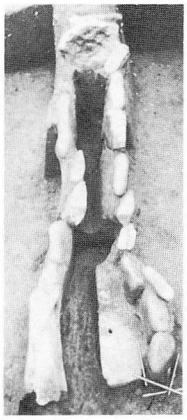
調査区全景空中写真

ＩＪ７竪穴住居跡遺物出土状況



陥し穴状遺構（溝状）

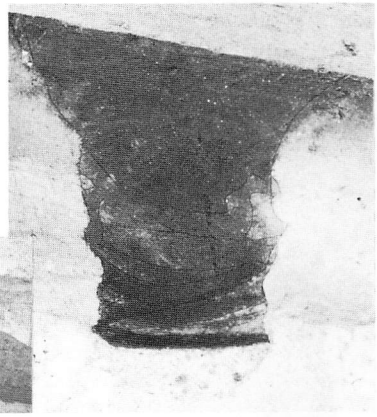




（天井石をはずして）

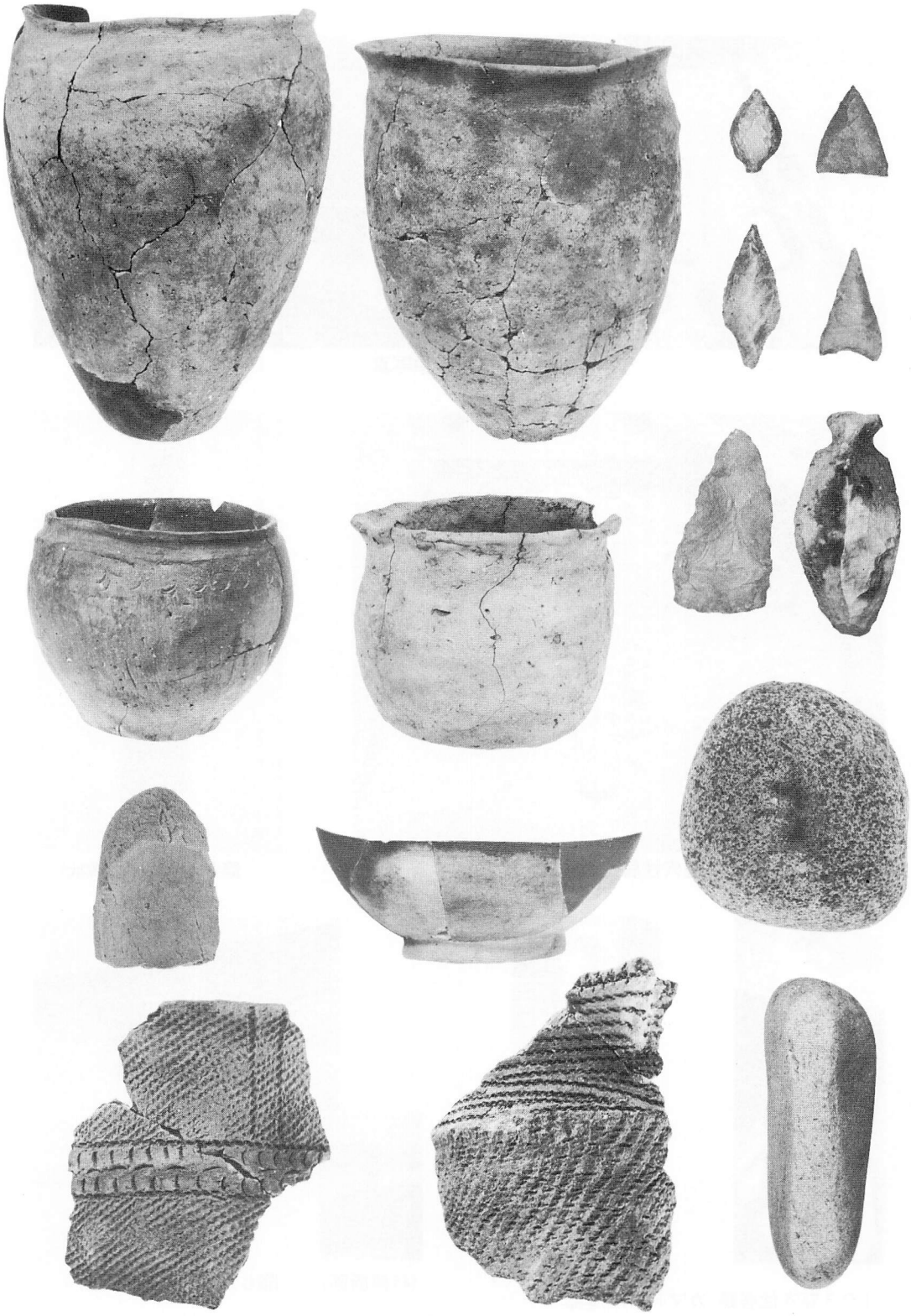
ＩＣ３竪穴住居跡　カマド～煙道部

（杭痕断面）



陥し穴状遺構（円筒状）

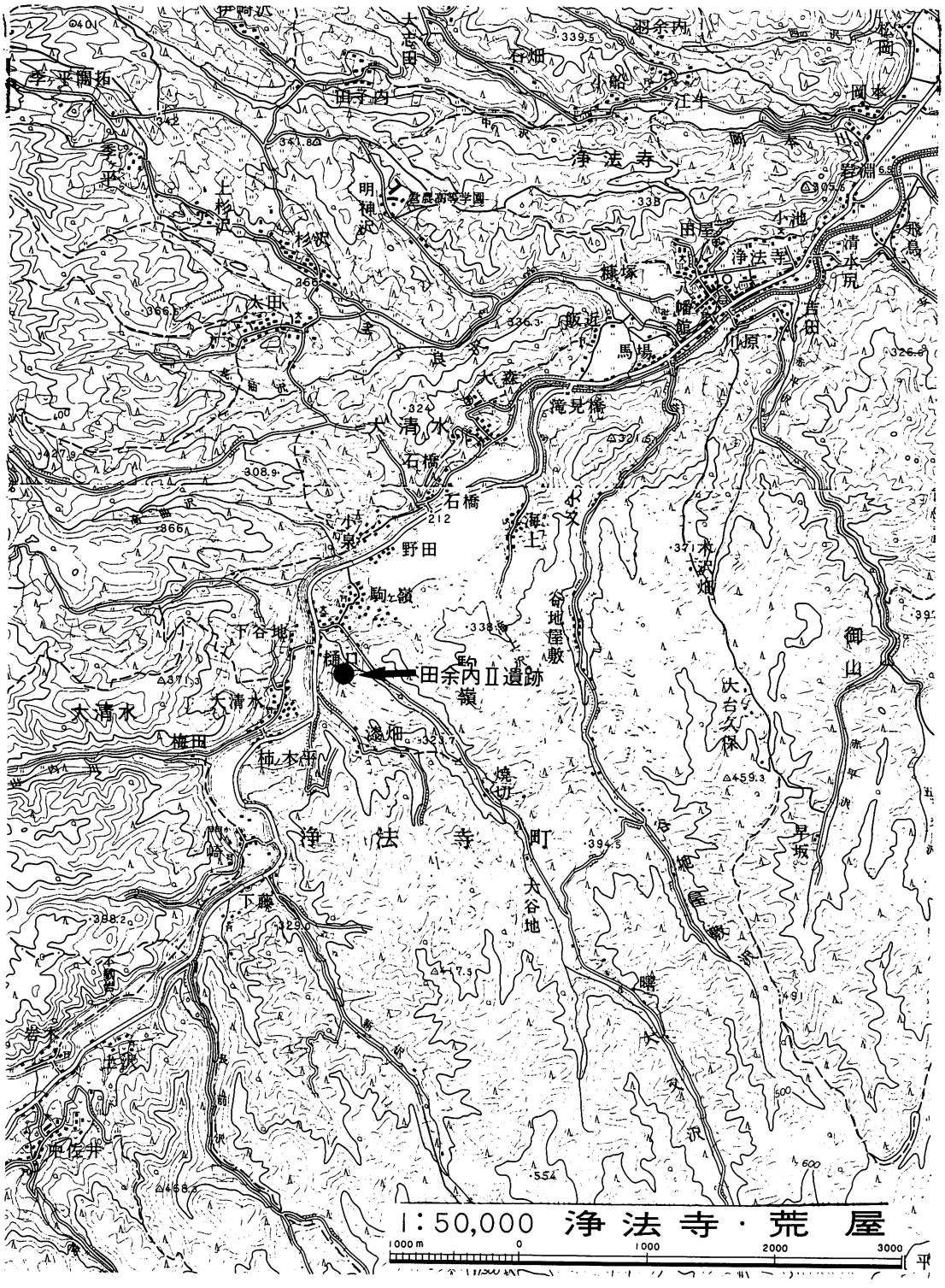
田余内Ｉ遺跡遺構



田余内Ⅰ遺跡出土遺物

（2） 田余内（たよない）II 遺跡

所　　在　　地　二戸郡浄法寺町大字駒ケ嶺字田余内36－1
委　　託　　者　日本道路公団仙台建設局（一戸工事事務所）
発掘調査期間　昭和60年7月22日～8月3日
調査対象面積　1,150㎡
発掘調査面積　1,150㎡
遺跡番号・略号　ＪＥ46－0099・ＴＹII－85
調査担当者　渡辺洋一・石川長喜
協力機関　浄法寺町教育委員会



田余内Ⅱ遺跡位置図

1．遺跡の立地

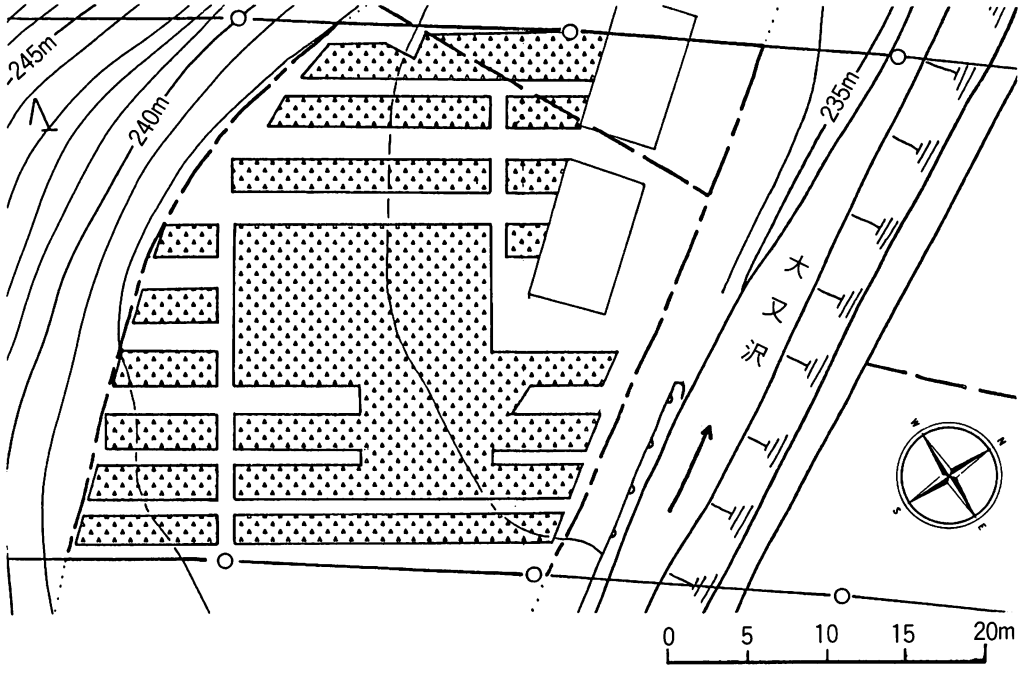
田余内II遺跡は浄法寺町役場の南西４km、大嶺小中学校の南0.5kmに位置している。遺跡は安比川支流の大又沢の左岸にあり、大又沢が形成した谷底平野の一画に立地している。標高は235～237mで、大又沢との比高は１～２mである。

周辺には、隣接して田余内Ⅰ遺跡がある。この他には田余内III・駒ケ嶺館・五庵Ⅰ・II・III遺跡などがある。

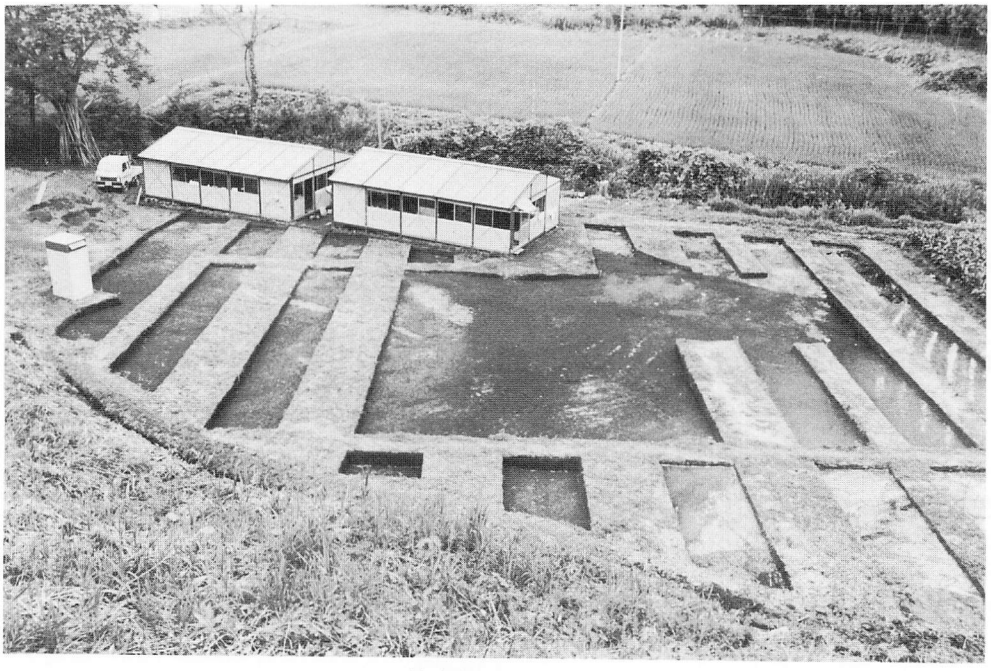
2．調査の概要

調査区域は東西34m・南北35mあり、畑地を対象として実施したものである。

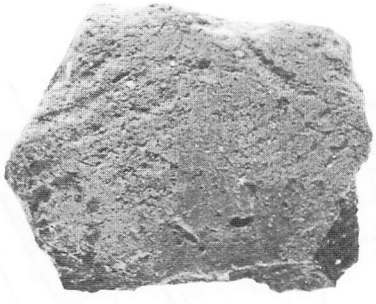
トレンチを全面に入れて調査した結果、遺構の検出はなく、土師器、縄文土器、石器を８点発見したのみである。



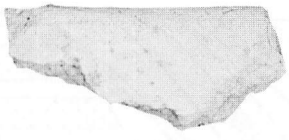
田余内Ⅱ遺跡調査範囲図



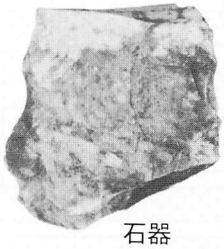
検出作業終了後



縄文土器



土師器



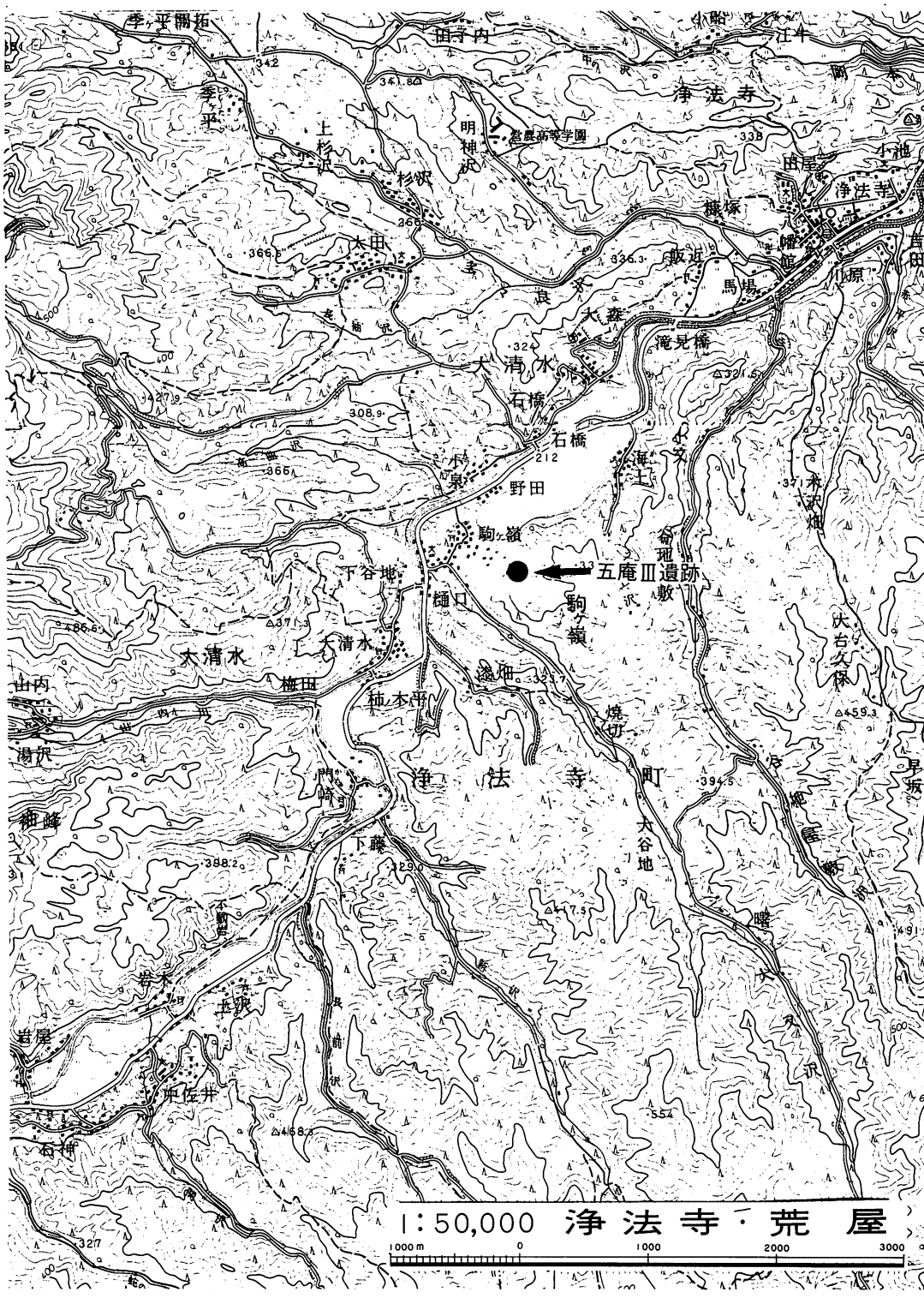
石器

出土遺物

田余内Ⅱ遺跡遺構と遺物

（3） 五庵（ごあん） III 遺 跡

所　　在　　地　二戸郡浄法寺町大字駒ケ嶺字五庵38ほか
委　　託　　者　日本道路公団仙台建設局（一戸工事事務所）
発掘調査期間　昭和60年４月16日～７月20日
調査対象面積　4,040㎡
発掘調査面積　4,040㎡
遺跡番号・略号　ＪＥ46―0142・ＧＡIII―85
調査担当者　渡辺洋一・石川長喜
協力機関　浄法寺町教育委員会


浄法寺
明神沢
蒼鹿高等学園
上杉沢
杉沢
大田
清水
大清水
石橋
野田
駒ヶ嶺
下谷地
樋口
五庵Ⅲ遺跡
駒ヶ嶺
柿本平
浄法寺町
大谷地
下藤
荒屋
1:50,000 浄法寺・荒屋
1000m 0 1000 2000 3000

五庵Ⅲ遺跡位置図

1．遺跡の立地

五庵III遺跡は浄法寺町役場の南西3.5km、大嶺小中学校の東1kmに位置している。遺跡は安比川右岸の崖錐性扇状地に立地し、標高は235～249m、沖積平野との比高は20～30mである。

当遺跡は五庵I遺跡と五庵II遺跡の中間にあって、周辺には駒ケ嶺館、海上I・II、田余内I・II遺跡などがある。

2．調査の概要

調査区域は東西90m、南北70mの西緩斜面と北緩斜面であり、調査は畑地と山林を対象として実施したものである。発掘調査の結果、竪穴住居跡4、住居跡状遺構2、焼土遺構9、土壙9、陥し穴状遺構3、それに近世の土葬墓5、炭窯3などの遺構が検出され、縄文土器、石器を主体とする遺物が発見された。

〈竪穴住居跡・住居跡状遺構〉

検出された住居跡4棟は、いずれも縄文時代に属し、斜面下位の下半が削平されたものである。時期別では後期後葉3棟、晩期中葉1棟に分けられる。

後期後葉の住居跡は北流する沢に面した縁辺部、段丘崖に占地している。直径4.0～5.6mの円形か楕円形で、中央に炉を伴っている。このうちの1棟は重複する炉を2基もち、柱穴18個からなり、少なくとも3回以上の建て替えが想定される。炉には地床炉2基、土器埋設石囲い炉2基があり、柱穴は4本を基本とするもののようである。伴出遺物には鉢形土器、注口土器、小型壺形土器（図版、土器出土状況）などがある。

晩期中葉の1棟は段丘崖上位の急斜面に構築されている。直径2.5mほどの小さなもので、炉は土器埋設石囲い炉である。図版1～3の鉢形土器、深鉢形土器、小型土器などが発見されている。

住居跡状遺構のうち1棟は2.5×1.5mの隅丸長方形を呈し、深さが40cmの小型の竪穴住居跡状をなしている。炉やカマドなどの施設をもたず、柱穴もはっきりしない。埋土の中に十和田a降下火山灰が薄い層をなしており、古代に属する小屋跡とも考えられる。

〈土壙〉

形状から皿形土壙3基、フラスコ形土壙4基、長方形土壙1基に分けられる。皿形土壙には一辺1.5mの方形のものが含まれている。フラスコ形土壙は開口部より底部が大きく、縄文時代に属するとみられる。直径が1～1.5m、深さは50cmほどであり、比較的小規模なものである。

長方形土壙は1.7m×75cm、深さが20cmである。中から底面より上がって、しかも立てられた状態で鉄斧（図版②）、鑿（のみ）とみられる鉄製品（図版①）が出土している。遺物の出土状況から人為的に埋められたもののようであり、土葬墓の副葬品の可能性がある。

〈陥し穴状遺構〉

3基とも溝状を呈する。調査区東側の尾根状の高まりから並んで検出された。長軸方向は等高線に平行し、各々の間隔は1.5mほどである。長さは3.0mほどであり、両端がオーバーハングして底部が若干長くなっている。埋土は自然堆積である。

〈土葬墓〉

直径1.0m、深さ58～130cmの土壙に木棺を用いて埋葬した墓である。5基とも重複することがなく、沢に面した崖上にまとまって発見されている。人骨は腐蝕して歯牙のみが遺存していた。遺物には木棺に使われた和釘、副葬品としての古銭(寛永通寶)、煙管、タバコ入れ、鋏、漆器などがある。

〈その他〉

調査地の中央部に土器の集中して発見される地域がある。全体が凹地となっており、遺物包含層と考えられる。同一個体が破片となって散在しており、投棄されたもののようである。斜面下位には縄文時代早期から前期初頭のものが出土しており、古くから形成された遺物包含層である。また、地点は異なるが、楔形石器を含む剝片57点がまとまって発見されている。剝片貯蔵施設があったものと思われる。

〈出土遺物〉

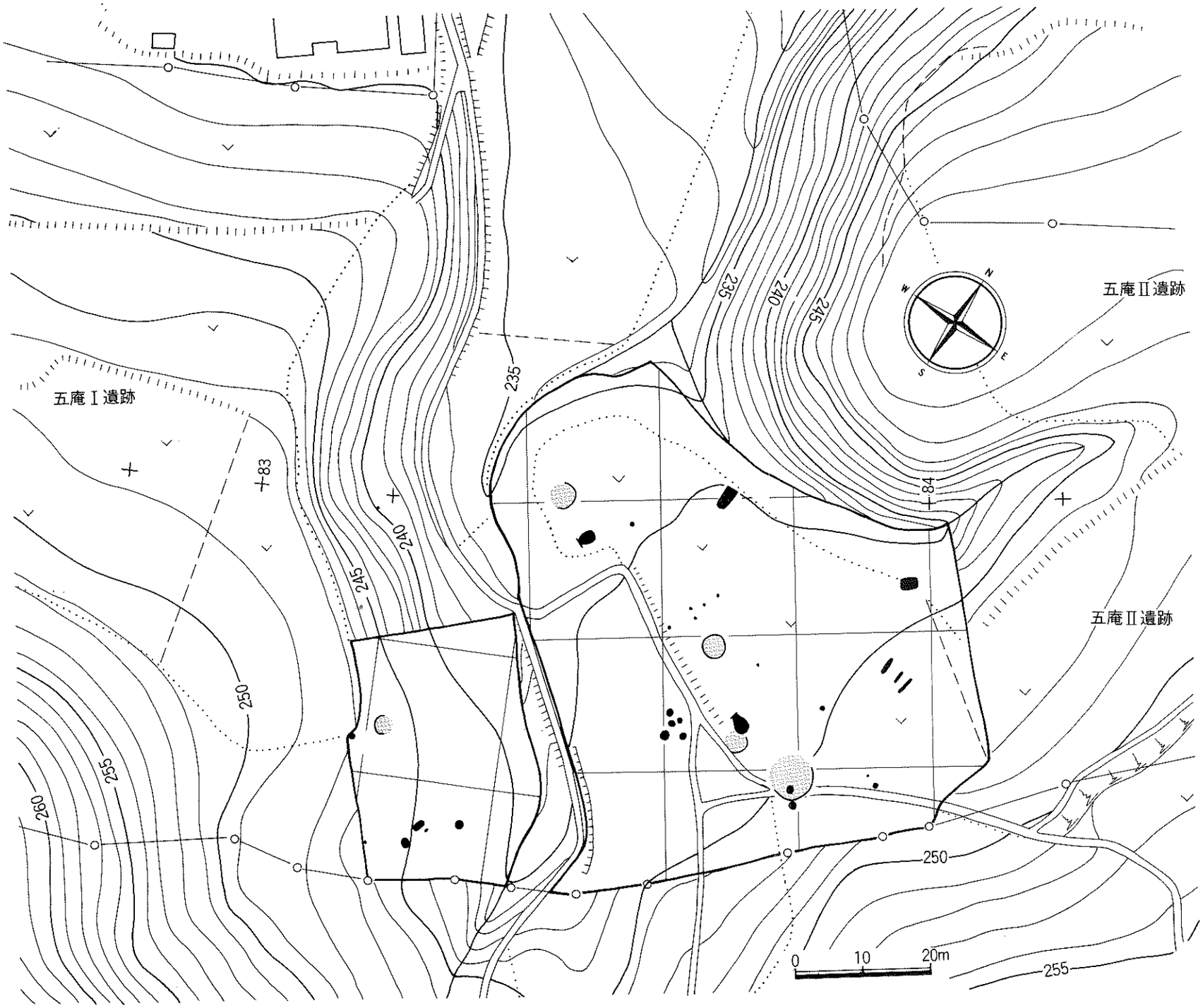
遺構外から発見された遺物は縄文土器、石器と若干の弥生土器である。大多数のものは破片であるが、ミニチュア土器、尖底土器、赤色顔料の塗布されたもの、補修孔をもつものなどが含まれている。時期別では早期中・後葉、前期前葉、後期初・後葉、晩期中・後葉など各時代にわたっている。また、特異なものとしては底部に穿孔された貫通孔を3個以上もつものがある。石器には石鏃、石錐、石匙、掻器、楔形石器、箆状石器、磨製石斧、凹石、棒状擦石、石皿などのほか、土偶、砥石、鉄滓、羽口、漆の漉紙などがある。

3．まとめ

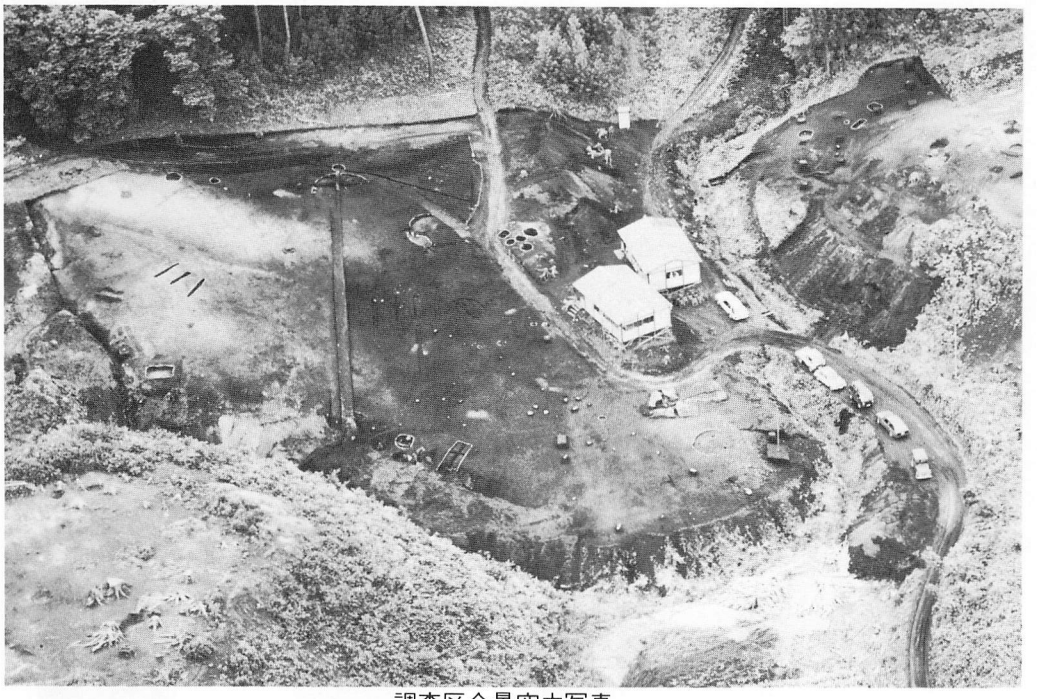
縄文時代の竪穴住居跡、土壙と陥し穴状遺構、古代の小屋跡、それに近世の土葬墓などの遺構が検出された。

縄文時代後期の集落は、沢に面した縁辺部に営まれ、その東側の凹地には遺物包含層が形成されている。遺物は縄文時代早期中葉から弥生時代前期にわたるもので、何らかの生活の痕跡を残している。なお、調査地の東方には緩斜面が続いており、その最奥部には湧水が存在する。集落の主体はその湧水周辺が想定され、今回の調査地域は集落の縁辺部とみられる。

また、縄文時代のある時期には狩猟の場となり、その後、古代に一部使われ、近世には埋葬地として利用されている。

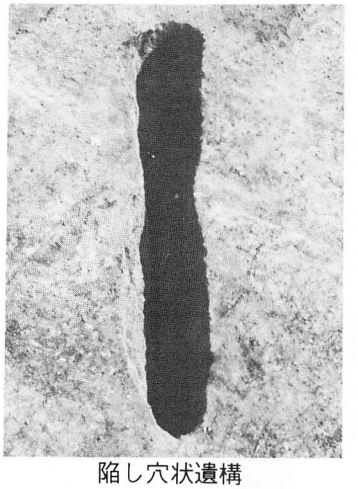


五庵Ⅲ遺跡遺構配置図



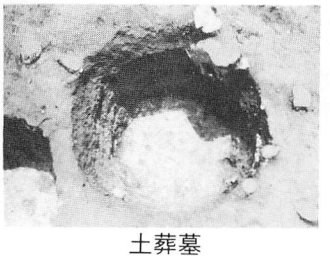
調査区全景空中写真

竪穴住居跡

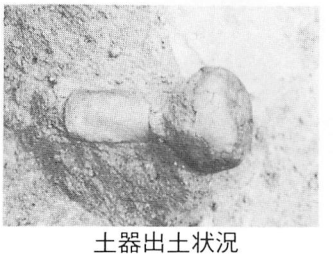


陥し穴状遺構

土器埋設石囲い炉

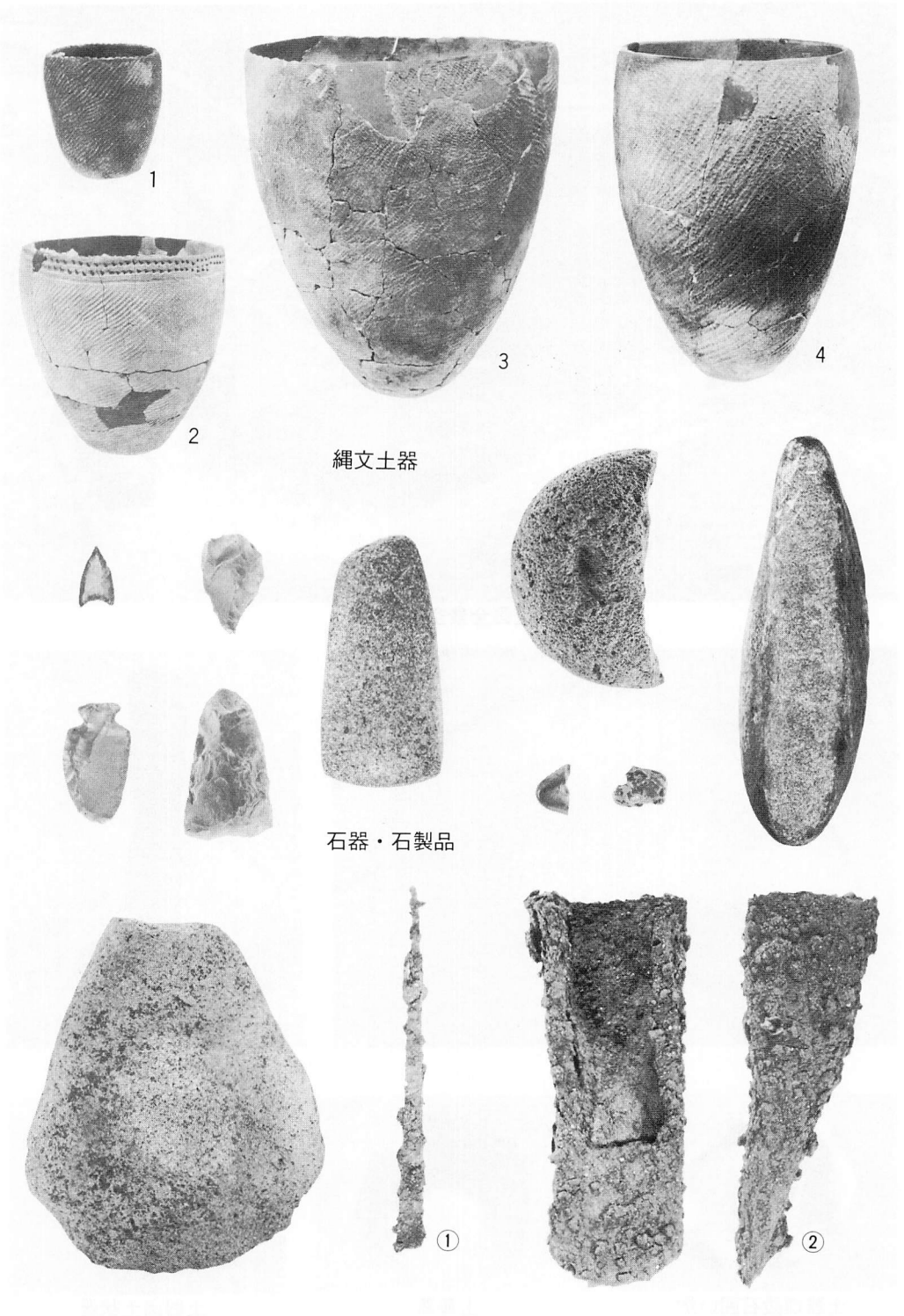


土葬墓



土器出土状況

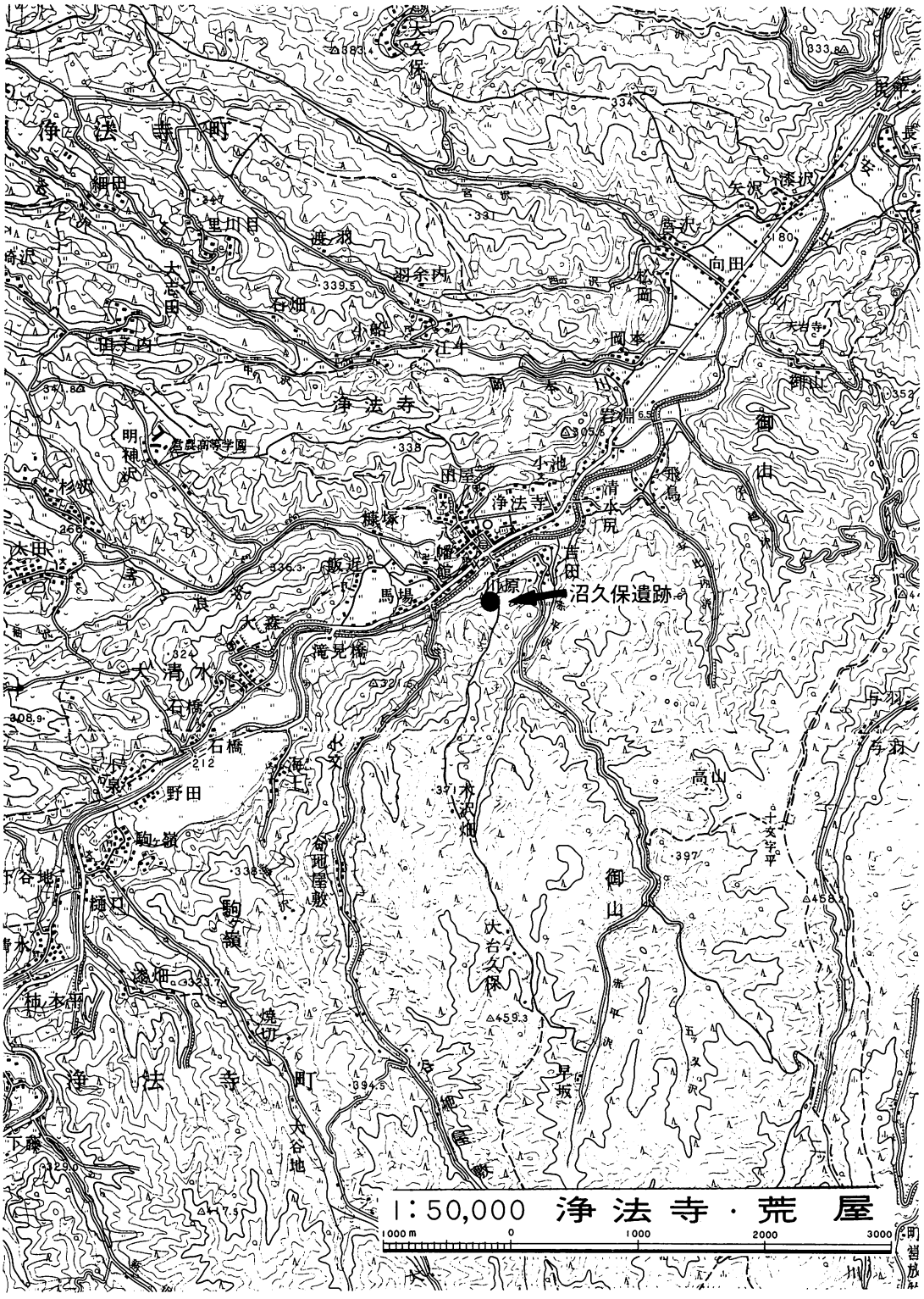
五庵Ⅲ遺跡遺構



五庵Ⅲ遺跡出土遺物

（4） 沼久保遺跡

所在地	二戸郡浄法寺町大字御山字沼久保15－1ほか
委託者	日本道路公団仙台建設局（一戸工事事務所）
発掘調査期間	昭和60年4月15日～10月31日
調査対象面積	4,930m²
発掘調査面積	4,930m²
遺跡番号・略号	ＪＥ46－1279・ＮＫ－85
調査担当者	平井　進・酒井宗孝
協力機関	浄法寺町教育委員会


沼久保遺跡
1:50,000 浄法寺・荒屋
1000m 0 1000 2000 3000
浄法寺町
浄法寺
御山
高山
向田
岡本
岩畑
飛鳥
清水原
馬場
大森
滝見橋
石橋
野田
駒ヶ嶺
樋口
遠畑
焼切
太谷地
早坂
荒屋敷
大清水
小泉
杉沢
明神沢
農業高等学園
羽余内
石畑
小船
江平
渡羽
里川目
細田
大谷田
矢沢
漆沢
宮沢
大久保
十文字平
五ヶ沢
赤平沢
木沢畑
小池
清水原
馬場
滝見橋
大岩久保
早坂
荒屋敷

沼久保遺跡位置図

1．遺跡の立地

沼久保遺跡は、浄法寺町役場の南西約1.5kmに位置する。遺跡は、安比川東岸標高240m前後の段丘面に立地する。調査区域の中央部は、埋没谷地形を呈し、現在はこれに続く沢が深く段丘面を抉っている。なお、当遺跡の東端は町道を挟んで、桂平遺跡と隣接する。

2．調査の概要

調査は、昭和59･60年の２カ年にわたり実施した。昨年度は、工事用道路分1,000㎡、今年度は残り4,930㎡を対象に行った。

調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡８、弥生時代の竪穴住居跡１、平安時代の竪穴住居跡６、小屋跡１、中世の竪穴住居跡１、掘立柱建物跡２、ピット11、陥し穴状遺構23、配石遺構１、埋設土器１、焼土遺構２、近世の貯水槽跡１及びこれに伴う暗渠２が検出された。また、調査区域の西端部は、遺物包含層であり、縄文時代～弥生時代の土器・石器が多量に出土した。

〈竪穴住居跡〉

竪穴住居跡は、山地から埋没谷に続く北東斜面の下部及び段丘縁辺に占地する。特に斜面部分には遺構が集中し、縄文時代・平安時代の住居跡が重複して検出された。

縄文時代の住居跡８棟は、時期別には前期２棟、後期６棟となる。前期の住居跡は、円形および卵形を呈し、床面の中央に地床炉をもち、主柱穴４本で構成される。円形のものは2～3回、卵形を呈する住居跡は３～４回の建て替えが行われており、壁溝やこれに沿った小柱穴が多数検出された。後期の住居跡６棟は、いずれも円形を呈し、炉は地床炉である。柱穴の構成ははっきりしないが、主柱穴の他に、壁に沿った小柱穴をもつものが１棟ある。また、これらのうち２棟は建て替えが行われており、先行する住居跡の上に貼り床が施されている。貼り床の下からは、地床炉や壁に沿った小柱穴が検出された。

平安時代の住居跡６棟のうち、段丘縁辺部に検出された２棟が完掘できた。１棟は一辺約3.5ｍの隅丸方形を呈し、南東壁の南寄りにトンネル式の煙道部をもつカマドが設けられている。柱穴は検出されなかったが、床面に２個の不整形ピットをもつ。もう１棟は、約5.0×4.8mの長方形を呈し、南壁の東寄りにカマドをもつ。カマドの煙道部は極端に短かく、壁際で斜めに立ち上がっている。主柱穴は４本で構成されるが、２個はカマドが設けられている南壁際から検出された。斜面部から検出された４棟は、重複や削平により明確にプランを把握できたものはない。またカマドについても不明な点が多い。このうち１棟は、長軸約７ｍの長方形を呈するものと推定され、中軸線に沿って２基の地床炉が検出された。詳細は不明であるが、プランや地床炉設備など他の住居跡とは異なる形態をもっており工房跡など特殊な機能をもつ遺構ではないかと考えられる。遺物としては、床面から刀子と多量の炭化した栃の実が出土している。

〈ピット〉

時期的には、縄文時代７基、平安時代３基、不明１基となる。縄文時代のピットにはフラスコ形ピットと皿形のピットがあるが、時期の詳細については不明である。平安時代の３基のピットはそれぞれ形態が異なる。１基は楕円形のプランを呈し、底面から籾や草の種子を含む炭化植物遺体が出土している。１基は、浅皿状の形態をもち、底面に現地性焼土が分布している。他の１基は皿状を呈する。これらのピットの埋土には、十和田ａ降下火山灰と考えられる灰白色の粉状パミスがブロックとして含まれる。

〈陥し穴状遺構〉

平面形により、溝状21基、小判状２基に大別される。溝状のものはさらに長軸の長さにより細分される。これらは、斜面部分及び埋没谷の下位、沢の東岸の段丘面に分布している。この分布は、規則的な配置がうかがえ、長軸の方向からみれば２基１対の構成が考えられる。特に埋没谷の下位に分布するものは、８基が同一線状に配置されている。小判状を呈するもののうち、１基の埋土最上部には、十和田ａ降下火山灰と考えられる灰白色パミスがレンズ状に堆積する。また検出される層位も高く、これらのうち小判状を呈する遺構が時期的にも新しいものと考えられる。

〈その他の遺構〉

配石遺構と埋設土器は、検出状況から一体のものと考えられ、時期は縄文時代前期である。

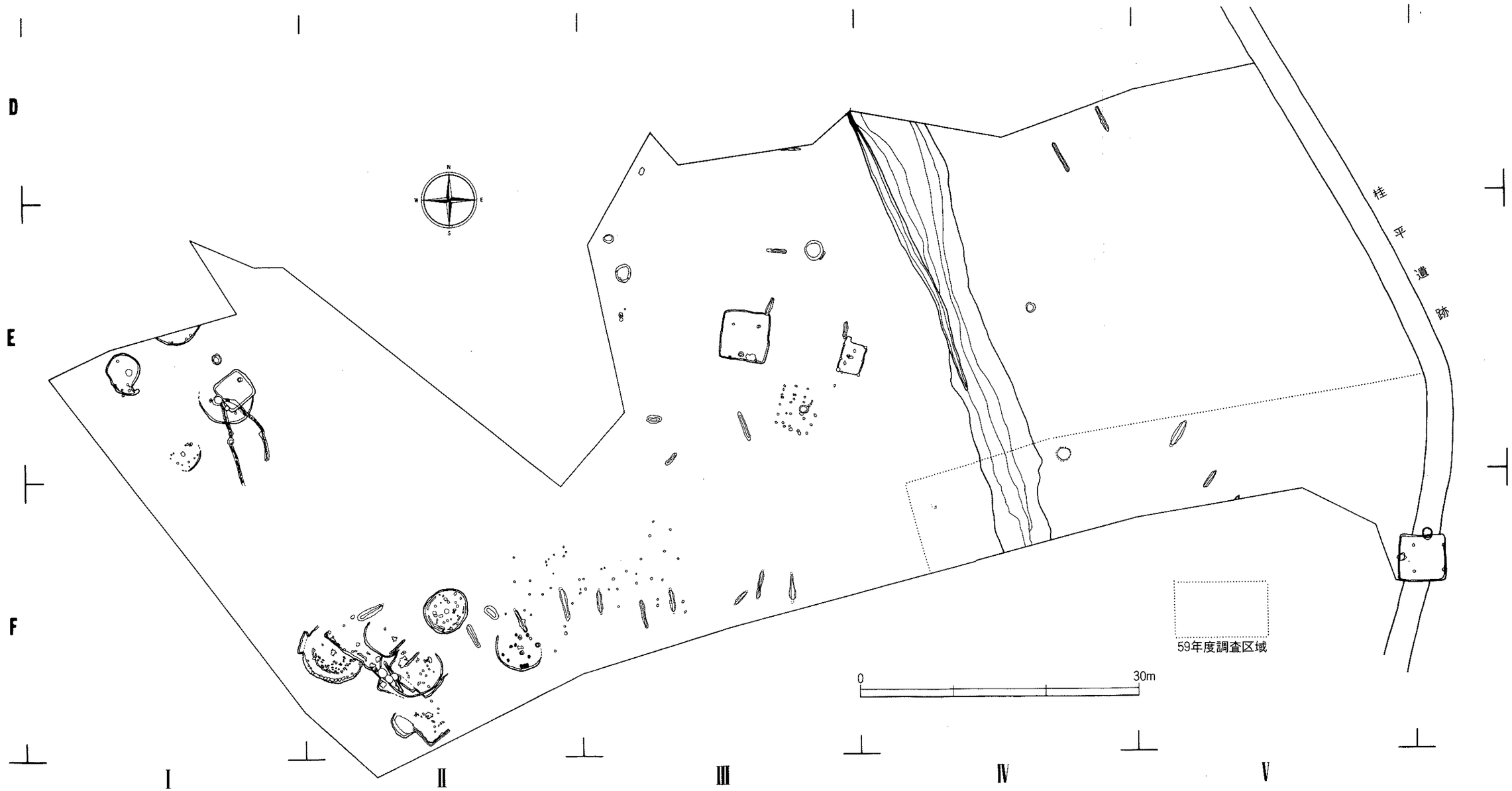
近世の貯水槽跡及び暗渠は、沢の西岸の段丘面から検出された。貯水槽跡は、径85cm、深さ１ｍの円筒状を呈し、樽状の容器を粘土で埋設したものである。周囲の粘土には箍の痕跡が観察される。２条の暗渠は、給水・排水用に使われたと考えられ、いずれも石組みを粘土で覆って構築されている。井戸跡の底面より鉄銭２枚が出土しており、これらは江戸時代の遺構であると考えられる。

〈遺構外出土遺物〉

埋没谷の埋土・西端の包含層から多量の土器・石器が出土した。そのほとんどは縄文時代の遺物であり、時期的には前期・後期の土器が卓越する。また、弥生時代の遺物も若干出土している。土器には甕・壺・蓋があり、石器ではアメリカ式石鏃・太型蛤刃石斧が出土している。

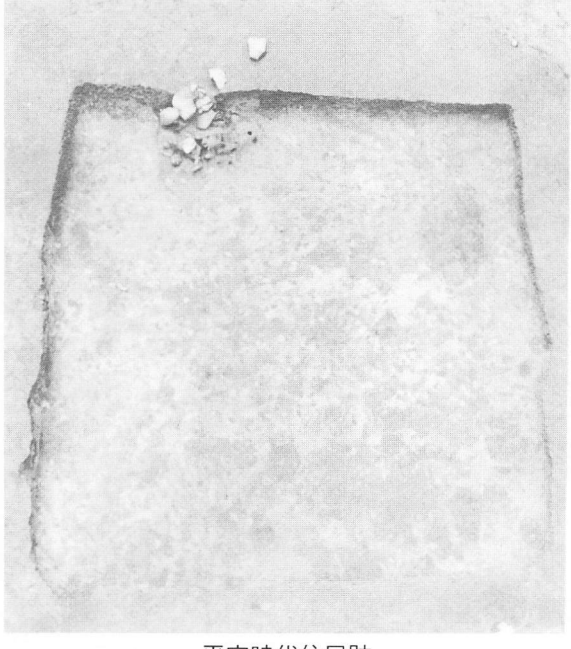
３．まとめ

断続的ではあるが、縄文時代前期より近世までの複合遺跡ととらえられる。縄文時代の住居跡と陥し穴状遺構との関係、平安時代の集落としての「場」の利用方法などを考えるうえで、隣接する桂平遺跡と合わせ有為な資料である。

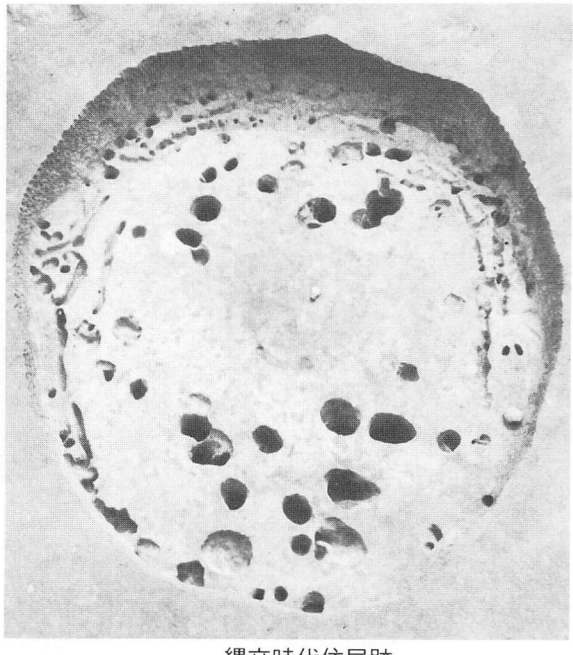


沼久保遺跡遺構配置図

調査区域空中写真



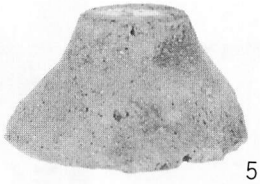
平安時代住居跡

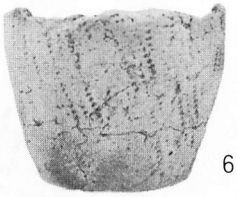


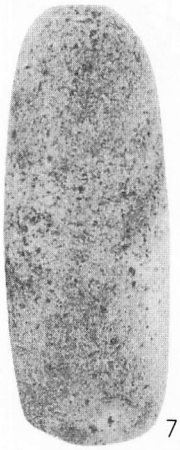
縄文時代住居跡

沼久保遺跡遺構

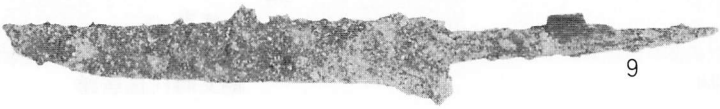
1～3・縄文時代の遺物
4～8・弥生時代の遺物







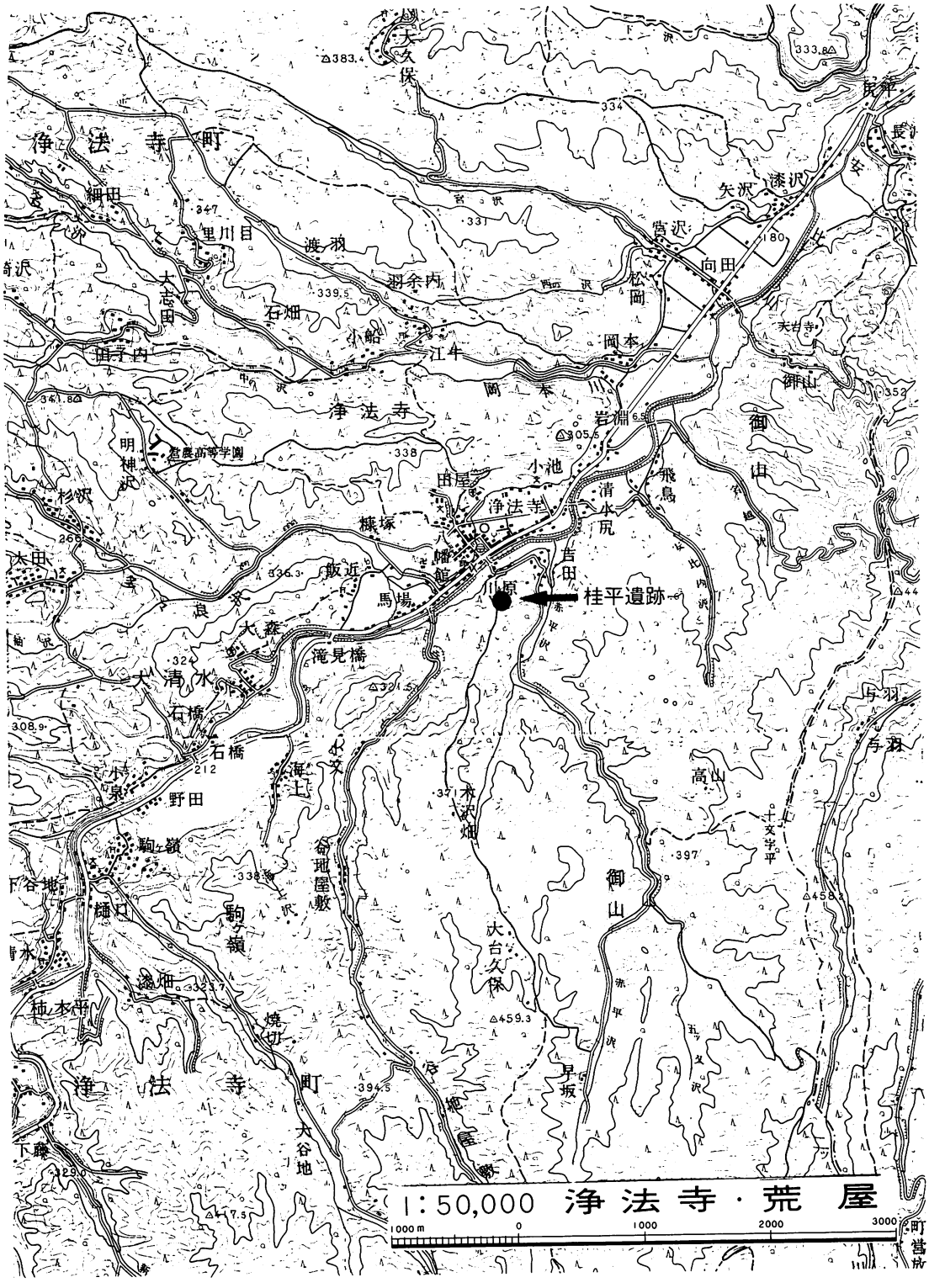
9・平安時代の遺物
（刀子）



沼久保遺跡出土遺物

（5） 桂平（かつらたい） 遺跡

所在地	二戸郡浄法寺町御山字桂平48－2ほか
委託者	日本道路公団仙台建設局（一戸工事事務所）
発掘調査期間	昭和60年6月15日～10月31日
調査対象面積	7,190㎡
発掘調査面積	7,190㎡
遺跡番号・略号	ＪＥ36－1357・ＫＴ－85
調査担当者	平井　進・酒井宗孝
協力機関	浄法寺町教育委員会


桂平遺跡
1:50,000 浄法寺・荒屋
1000m 0 1000 2000 3000
浄法寺町
浄法寺
大久保
細田
里川目
渡羽
羽余内
石畑
小船
江牛
岡本
松岡
向田
矢沢
漆沢
宮沢
御山
岩淵
小池
飛鳥
清水尻
吉田
川原
八幡館
馬場
棟塚
由屋
明神沢
杉沢
太田
良沢
大森
大清水
滝見橋
石橋
小泉
野田
海上
駒ヶ嶺
谷地
樋口
柿本平
浄法寺
焼切
谷地
谷地屋敷
木沢畑
大台久保
早坂
高山
十文字平
五ヶ久沢
赤平沢
下駒
長安
民部
与羽
天台寺
御山
宮沢
西宮沢
下沢
岡本川
赤平沢

桂平遺跡位置図

1．遺跡の立地

桂平遺跡は浄法寺町役場の南西約1.5kmに位置する。遺跡は安比川東岸の段丘縁辺に立地する。調査区域は南側の山地から大きく曲りながら東に張り出す南東の緩斜面であり、その東端はやや開析が進んだ沢となっている。標高は240mほどであり、現状は大部分が畑地である。

2．調査の概要

調査対象面積は8,380m²であるが、昨年度1,190m²の調査をし、本年度は残りの7,190m²の調査を行った。

調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡３、平安時代の竪穴住居跡11、小屋跡３、縄文時代及び平安時代のピット42、陥し穴状遺構32が検出された。

〈竪穴住居跡〉

縄文時代のものはいずれも後期後葉に属すると思われるが、うち１棟は壁が不明瞭である。平面形は円形、規模は直径約５ｍであり、共通して主柱穴４個と地床炉１基が認められる。平安時代の竪穴住居跡は若干の時期差が想定されるが、総体的には平安時代後葉に属する。平面形は隅丸方形に近く、規模は一辺が４～５ｍのものが多い。カマド方向は四方向にあるが、北・東向きが多く西向きは１基のみである。西向きにカマドをもつ１棟は微高する尾根上に位置し一辺7.5～６ｍの長方形をしており当遺跡で最大規模のものである。同住居跡は南側の床に1.5ｍ巾で敷板があり、埋土下位から刀剣（部分）が出土した。この遺跡では焼失した住居跡が多い。また炭化した木器が出土したもの１棟、鉄器が出土したもの４棟がある。

これらの住居配置は一定のスペースを持ってほぼ均等に配置されている特徴があり、重複するものは僅かに１棟のみである。また、住居跡と小屋又はピットとがセットになる可能性もある。

〈ピット〉

縄文時代のピットは尾根上の微高地に集中する傾向がみられる。検出面からの深さが1.5ｍ以上のものが３基あるが、そのうち少なくとも２基は前期と考えられる。平面形は円形と長円形のものが多いが、開口部は円形、底部形は長方形のものが３基みられる。断面形はほとんどがビーカー状又は皿状であり、フラスコ状は４基のみである。

平安時代のピットは三種類以上に分類される。①開口部径が1.2ｍ以上で断面形がビーカー状となるもの。②平面形が隅丸長方形、断面形はビーカー状となるもの。その規模によって細分が可能である。③埋土に多量の焼土を有するもの、等である。これらのピットは性格が異なるものと考えられるが、いずれも住居跡の近くに位置しており、いわゆるピット群として別個に占地するものではない。

〈陥し穴状遺構〉

32基の陥し穴状遺構は三つのタイプに分類される。一つは底部幅が20cm程度で長径が1.5m以上のいわゆる溝状（帯状）のものである。深さは概ね1～1.5mである。このタイプは連続して構築されるものと、そうでないものとがある。二つめのタイプは開口部はやや開き漏斗状を呈するものである。中位～下位は直径60～80mの円形で、底部に杭跡があるのもみられる。深さは1～1.5mである。以上の二つのタイプはその埋土に十和田a降下火山灰を含まず、縄文時代のものと思われる。三つめは底部幅が40cmと広くなる溝状タイプである。これは埋土中上位に十和田a降下火山灰を含む。底部の一方には2個の、他方には1個の杭跡が斜方向に検出されている。いずれも出土遺物はほとんどなく、明瞭な時期決定はできない。

〈焼土遺構〉

10カ所の焼土遺構が確認されたが、ほとんど薄く淡いもので、性格等は不明である。

〈出土遺物〉

縄文土器はVIC、VID区の粗掘りと、住居跡の埋土等から出土したものが大半である。大部分は前期のもので、他は後期のものである。完形品は無く、復元できるものも少ない。ほかに弥生土器若干が出土している。

土師器はロクロ不使用の長胴甕、坏、ロクロ使用の坏等が出土した。須恵器は大型の甕と坏の蓋が出土した。

石器はスクレイパーや石匙など剝片石器が多い。石皿、半円状扁平打製石器など礫石器も出土しているが、磨石、敲石類は少ない。

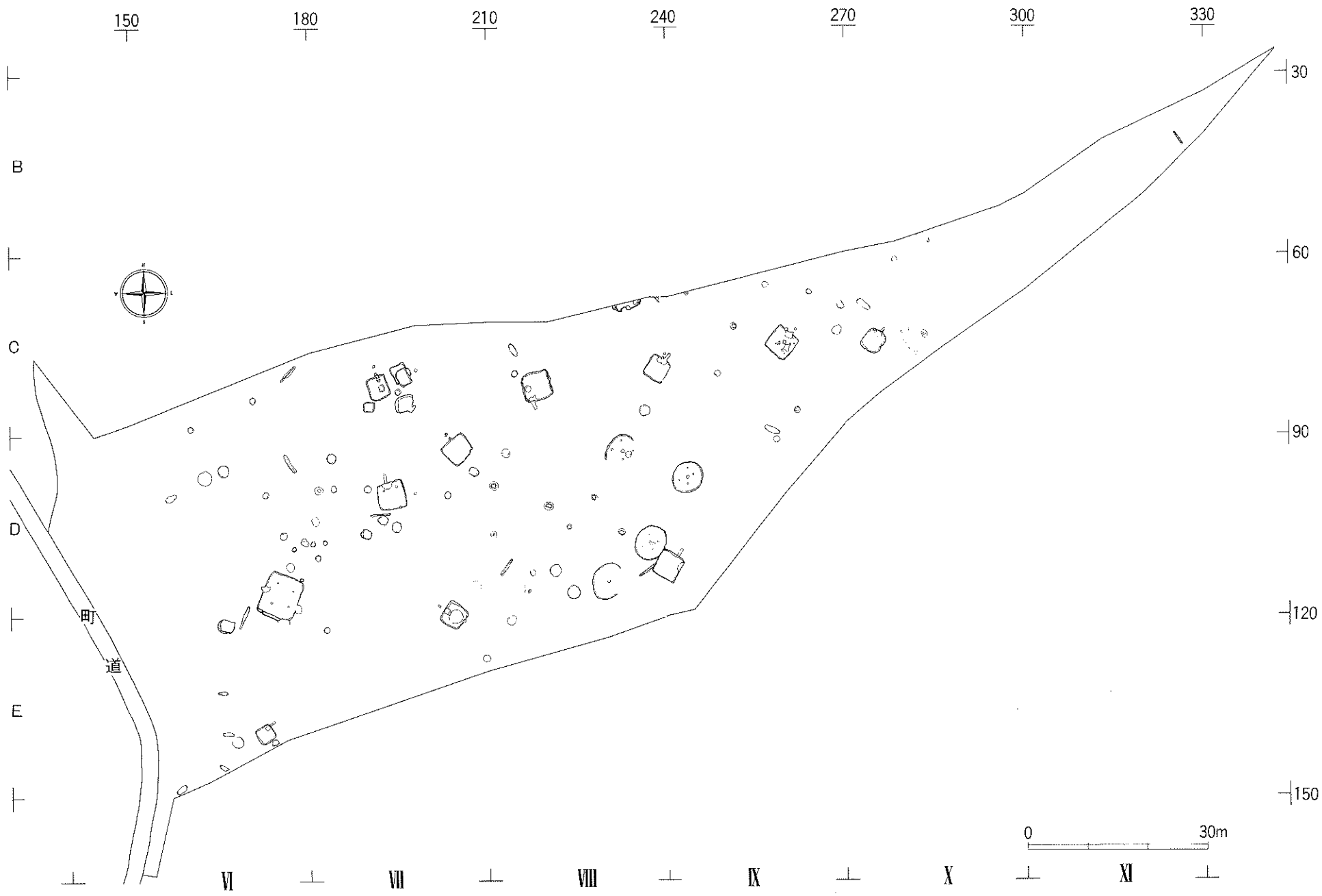
鉄器は刀剣、紡錘車、釘状のもの、及び鉄滓が出土した。いずれも住居跡からの出土である。

木器は炭化した形となって出土したものであるが、木皿と他に曲物（細片）が出土した。

その他、近現代のものと思われる陶磁器等が出土した。

3．まとめ

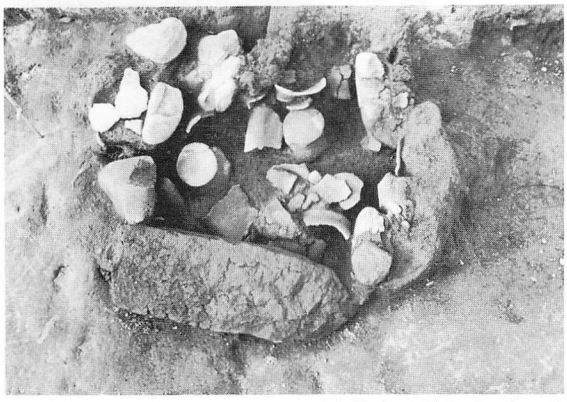
本遺跡は縄文時代と平安時代の複合遺跡である。縄文時代のものは遺物量からみれば圧倒的に前期であるが、遺構は後期で3棟の住居跡が確認された。平安時代の遺物は、大部分が住居跡から出土したもので坏と長胴甕が主である。住居跡は重複が少なく、同時存在をうかがわせるものである。


150
180
210
240
270
300
330
30
60
90
120
150
B
C
D
E
町
道
0
30m
VI
VII
VIII
IX
X
XI

桂平遺跡遺構配置図

遺跡全景

板敷の
住居跡

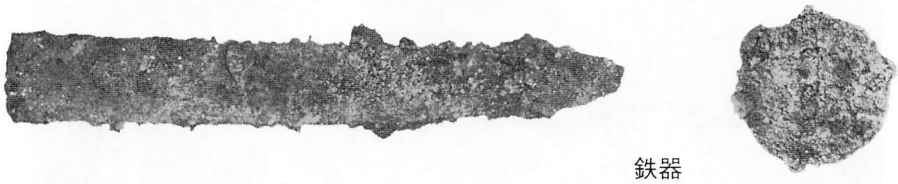


遺物出土状況（土師器）

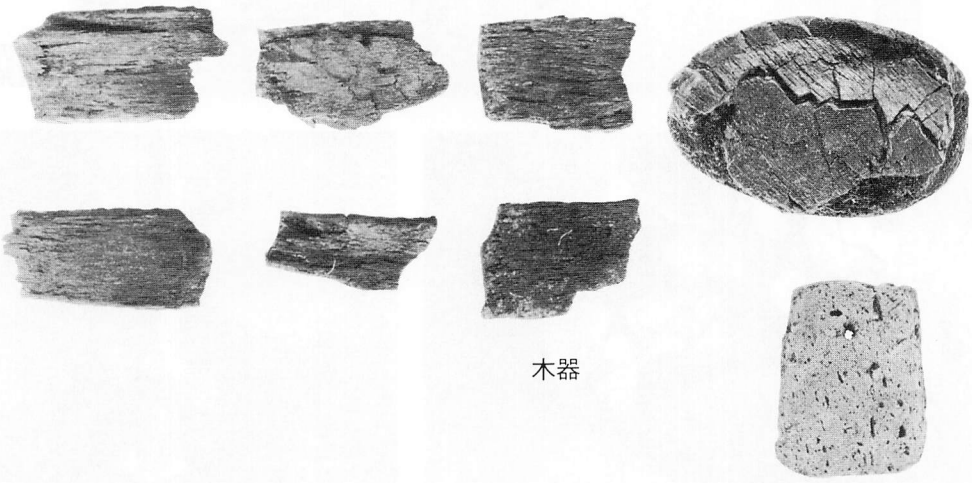
遺物出土状況（紡錘車）

桂平遺跡遺構

土器・土製品



鉄器



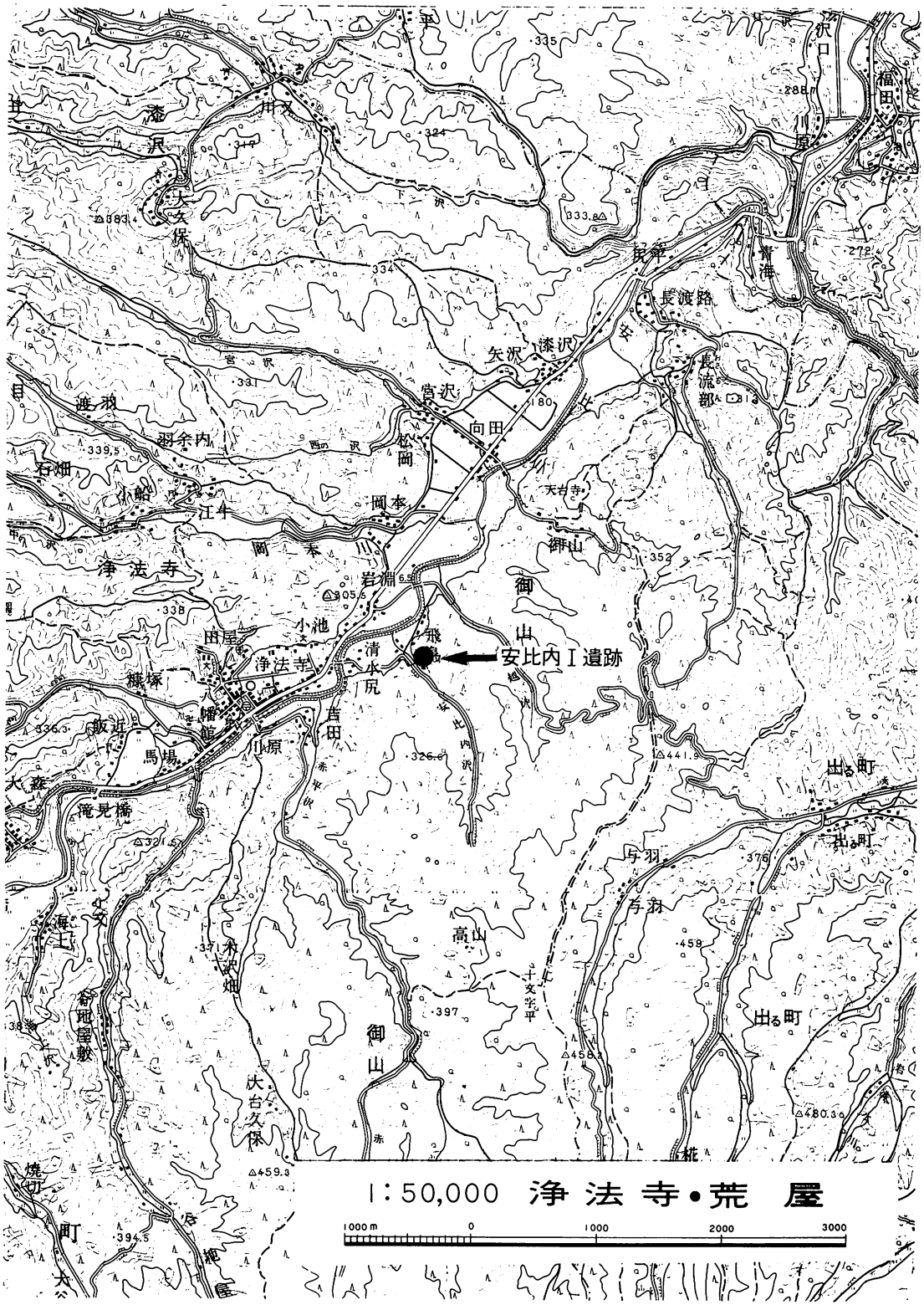
木器

石製品

桂平遺跡出土遺物

（6） 安比内（あつぴない）Ⅰ遺跡

所　　在　　地　二戸郡浄法寺町大字御山字安比内52－1ほか
委　　託　　者　日本道路公団仙台建設局（一戸工事事務所）
発掘調査期間　昭和60年6月20日～9月7日
調査対象面積　3,160㎡
発掘調査面積　3,160㎡
遺跡番号・略号　ＪＥ37－0140・ＡＰＩ－85
調査担当者　田村壮一・岩渕　久
協力機関　浄法寺町教育委員会


安比内Ⅰ遺跡
1:50,000 浄法寺・荒屋
1000m 0 1000 2000 3000
浄法寺
岩淵
清水尻
飛島
御山
高山
向田
岡本
宮沢
矢沢
漆沢
長渡路
長流部
天台寺
青海
福田
出る町
与羽
小池
田屋
馬場
小原
吉田
滝見橋
大森
海上
荒屋敷
大台久保
焼切
町
荒屋
桃

安比内Ⅰ遺跡位置図

1．遺跡の位置と立地

安比内Ⅰ遺跡は浄法寺町役場の北東約1.4kmの地点である。安比川の東岸で、沖積地(水田地帯）より一段高い段丘上に立地する。東方に連なる七時雨山麓丘陵の西側縁辺部にあたり、低位段丘に立地している。調査区域の北半部はほぼ平坦地であるが南半部は起伏のある傾斜地である。土地の現状は畑地造成のため切土や盛土がなされ、旧地形の改変が見られ、南半部で著しい。標高は216～220mを測り、西方に広がる沖積地との比高は約30mである。

2．調査の概要

調査区域の盛土は厚さ１～３mにも及ぶため、検出面までの土層の除去作業には重機を使用した。表層部は黒褐色土、灰白色火山灰(十和田ａ降下火山灰)、中掫浮石、黄褐色ローム質火山灰（地山の赤土)、シラスなどが推積し、遺構の埋土や検出面となっている。

検出された遺構は平安時代の竪穴住居跡２、陥し穴状遺構41、ピット５、焼土遺構３である。出土した遺物は縄文～平安時代の土器、石器、鉄製品などである。

〈平安時代の竪穴住居跡〉

２棟の住居跡は共に調査区北側の平坦地に検出された。ＢⅠ－１住居跡は壁が深く残存状況は良好である。平面形は５×5.5mのほぼ方形であり、確認された柱穴は３個である。床面壁際の周溝はない。東壁際に浅い貯蔵穴がある。カマドは西壁中央に位置し、くりぬき式の傾斜して深くなる煙道を持つ。埋土には細粒の褐色火山灰（苫小牧火山灰）や灰白色火山灰（十和田ａ降下火山灰）がレンズ状に厚く堆積している。その上位層から鉄滓やふいごの羽口、炉跡が発見されている。住居の廃絶後、鍛冶作業の為の遺構が構築されたと考えられる。遺物は土師器の静止糸切りの内黒坏や須恵器の甕などが出土している。BⅢ－１住居跡は５×4.5mのほぼ方形で、柱穴は５個である。床面の壁際に周溝がめぐる。カマドは北壁寄りに位置している。大きな礫を用いてつくられ、まわりに崩れた礫が多く散在する。煙道は伴わない。埋土に火山灰の堆積がなく、ＢⅠ－１住居跡とは時期が違うと考えられる。遺物は土師器の甕の破片、刀子や紡錘車などの鉄製品などが出土している。

〈陥し穴状遺溝〉

溝状に細長く、深く掘り込んだ形状をなし、本遺跡の在り方や形態により３種類に分けられる。Ａ類は長さ1.5m前後の比較的小型で、３～４m間隔に並ぶものである。Ａ類の陥し穴状遺構の配置は南北２列検出され、９～10基が連続している。北側では平坦な面を沢から沢へ横断し、南では山裾の斜面を上下に並んでいる。Ｂ類は長さ３～４m前後の比較的大型で５～６m間隔に並ぶグループである。Ｂ類の陥し穴状遺構の配置は、北側の平坦地に検出され、８基が一列に連続している。平坦な面を沢から沢へ斜めに横断し、Ａ類の並びと交差している。

C類は長さ3.5〜4.5mの大型で、開口部に比べて底部が幅10cm程度で特にせまく、深くつくられている。全域に8基あり、配列に規則性はない。そのほかA〜C類とは別に、形や規模はA類やB類と似ているが、並列配置をせず単独で検出されたものが6基存在する。これらの中には底面に杭穴状の小穴をもつものが1基ある。陥し穴状遺構の年代を決める遺物は出土していない。ただA類はBやC類より下位層で検出されたものが多いことから、比較的古い可能性がある。陥し穴状遺構の検出面はいずれも中掫浮石層以下の層であることから、ほぼ縄文時代のものと推定される。

〈ピット〉

5基検出されたが、その中の2基は平面形が方形を呈し、埋土に十和田a降下火山灰をレンズ状に含むものである。規模は一辺が2.2〜2.4m、深さ75〜90cmあり、埋土に炭化物や焼土などが含まれ、貯蔵穴または小屋跡と考えられる。その他浅いビーカー形のピットが2基、やや深いビーカー形ピットが1基である。そのうち住居跡を切ってつくられたものが2基ある。

〈焼土遺構〉

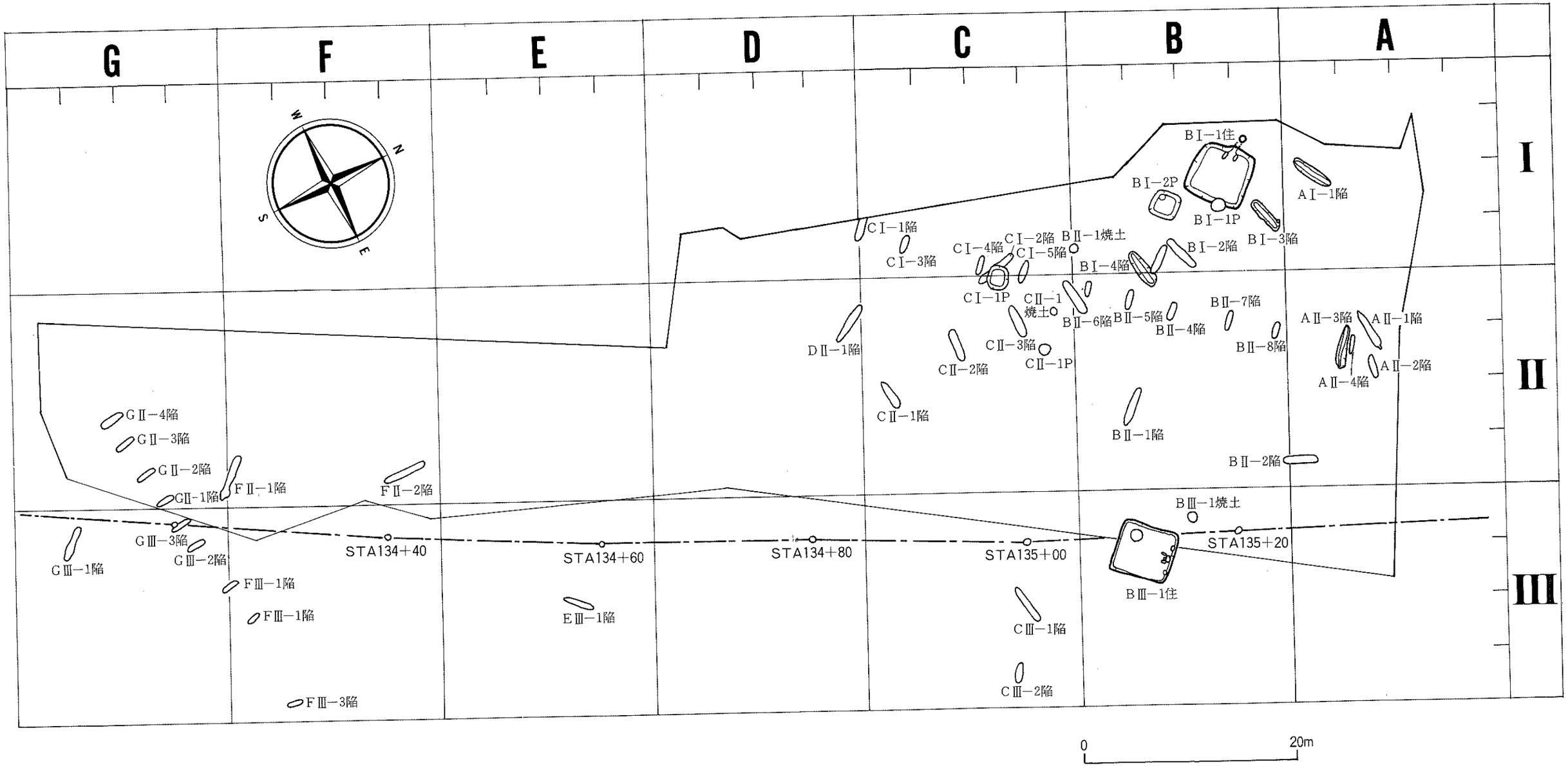
焼土が集積していた部分を3基検出している。そのうちの2基では、焼土の下に不整な円形の掘り込みを伴っている。他の1基は、混土状であり投げ捨てられたものである。

〈出土遺物〉

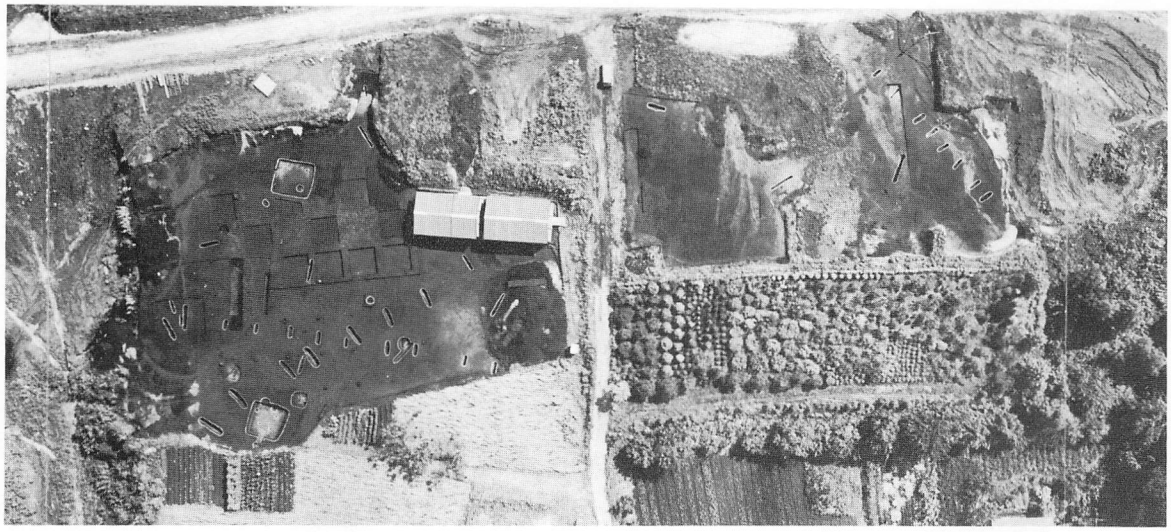
遺物は遺構内外含めて縄文土器約550点、平安時代の土器約360点、石器22点、鉄器5点、土製品一点、ふいごの羽口1点、その他鉄滓や炭化物などである。縄文土器は早期〜晩期にわたる。遺構数に比較して、全体の出土量は少ない。

3．まとめ

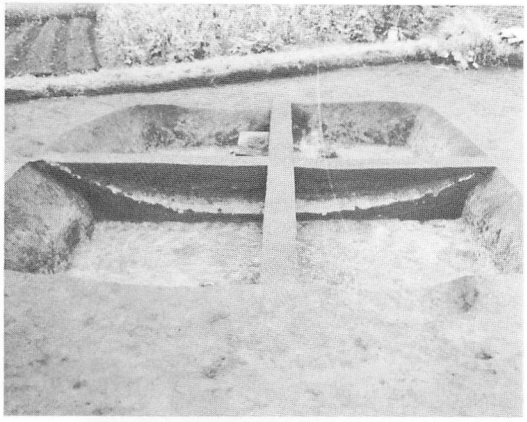
調査の結果、狩猟に関わる多数の陥し穴状遺構が、典型的な配列をもって確認され、また平安時代の住居跡やピットなど良好な資料を得ることができた。調査区外の西側には平坦地が畑地として残っており、いくつかの遺構の存在が予想される。本遺跡とともに隣接する飛島台地I遺跡の載る段丘面は、縄文時代から平安時代にかけて、居住の場、狩猟の場として利用されていたことが明らかとなった。



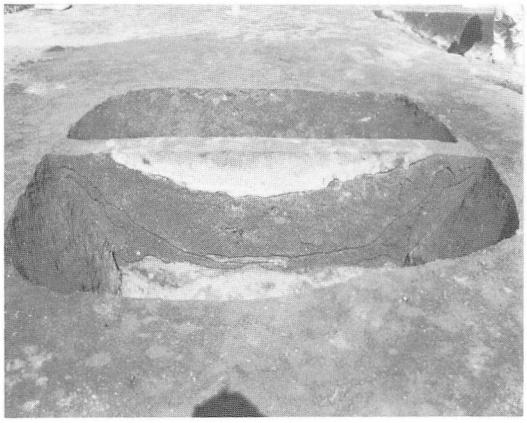
安比内Ⅰ遺跡遺構配置図



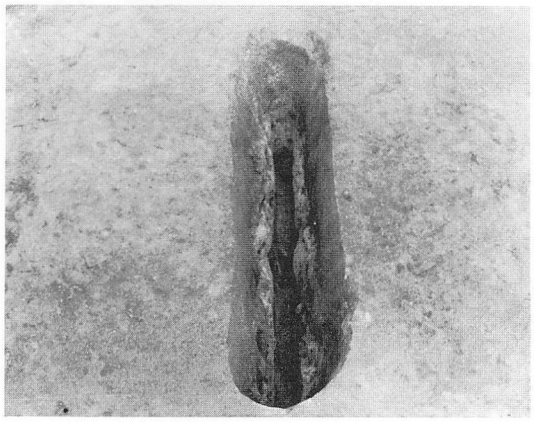
遺跡全景（航空写真）西方より



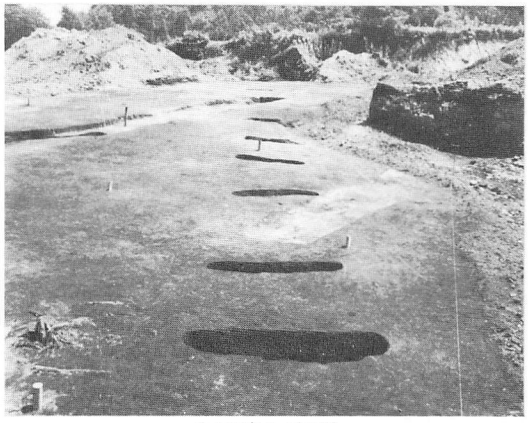
ＢＩ－１住居跡



ＢＩ－２ピット

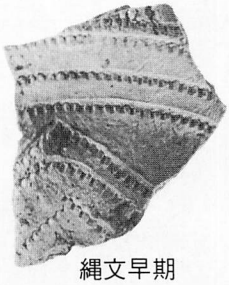


ＢＩ－１陥し穴

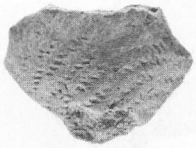


Ｇ区陥し穴列

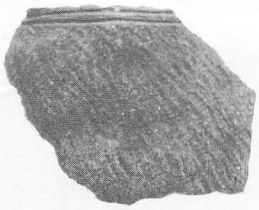
安比内Ｉ遺跡遺構



縄文早期



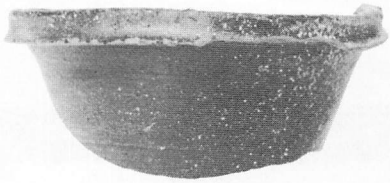
縄文早期



縄文晩期

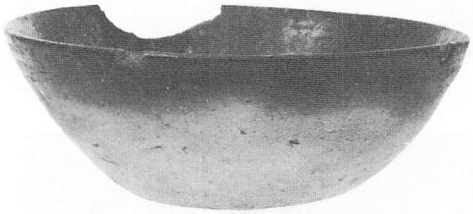
縄文後期

スクレーパー



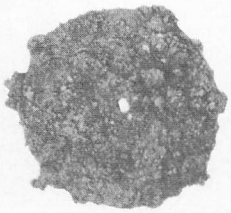
ＢⅠ－１住居跡、床面、須恵器

ＢⅢ－１住居跡、床面、土師器



ＢⅠ－１住居跡、埋土、土師器

ＢⅢ－１住居跡 刀子

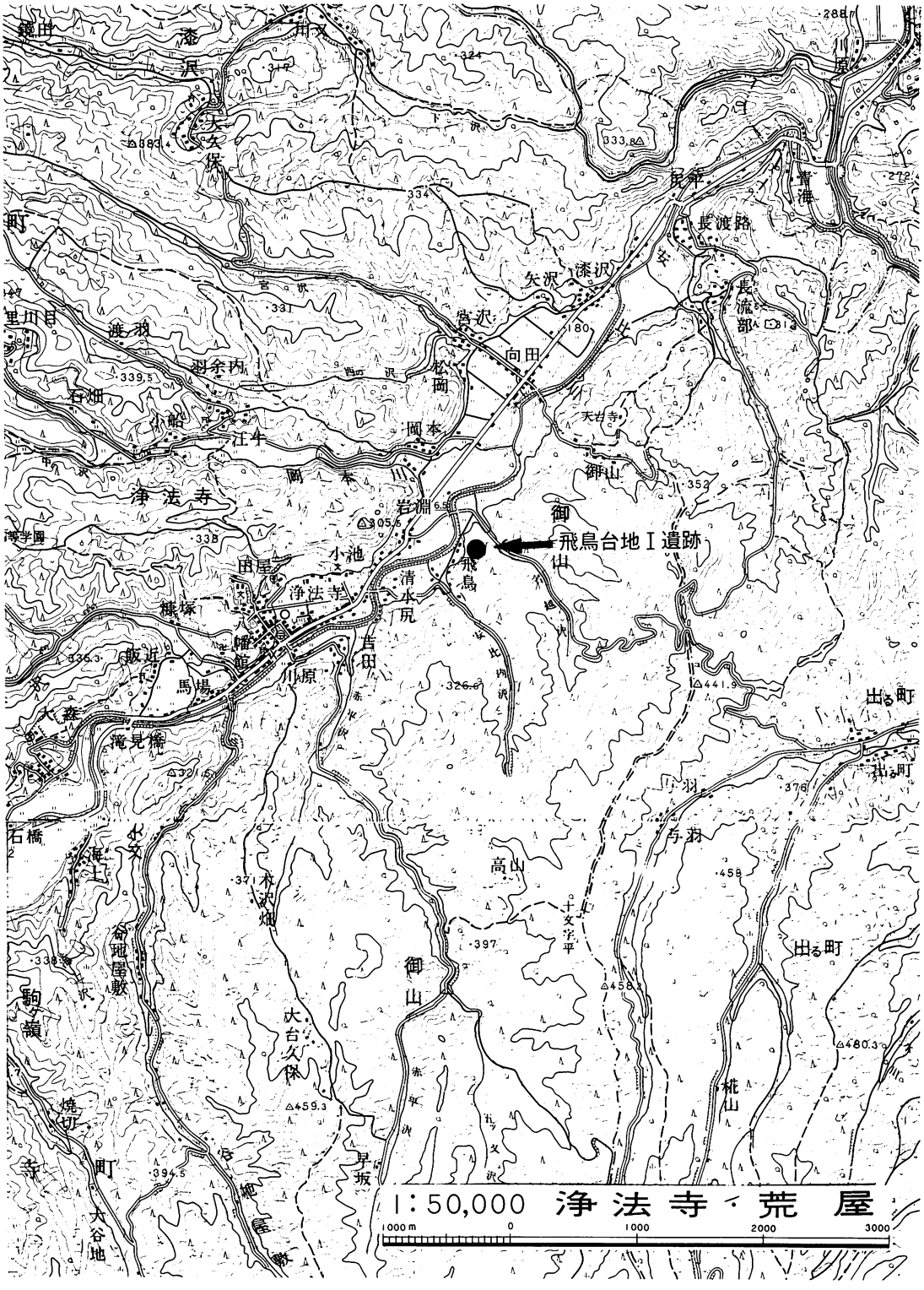


ＢⅢ－１住居跡紡錘車

安比内Ⅰ遺跡出土遺物（S＝$\frac{1}{2}$）

（7） 飛鳥台地（あすかだいち）Ⅰ遺跡

所　在　地	二戸郡浄法寺町大字御山字飛鳥谷地22－1ほか
委　託　者	日本道路公団仙台建設局（一戸工事事務所）
発掘調査期間	昭和60年4月15日～11月15日
調査対象面積	17,500㎡
発掘調査面積	17,500㎡
遺跡番号・略号	ＪＥ37－0112・ＡＳＤＩ－85
調査担当者	三浦謙一・玉川英喜・昆野　靖・佐々木嘉直・田村壮一 岩渕　久・片方宗明・長沼　彬・渡辺洋一
協力機関	浄法寺町教育委員会


飛鳥台地Ⅰ遺跡
御山
浄法寺
岡本
向田
宮沢
矢沢
漆沢
長渡路
長流部
天台寺
岩淵
清水尻
飛鳥
小池
浄法寺
吉田
川原
馬場
飯近
大森
滝見橋
高山
十文字平
桃山
出る町
1:50,000 浄法寺・荒屋
1000m 0 1000 2000 3000

飛鳥台地Ⅰ遺跡位置図

1．遺跡の立地

飛鳥台地Ⅰ遺跡は、浄法寺町役場の東北東1.7kmの位置にあり、安比川の東岸に広がる河岸段丘に立地する。北東部は名越沢、南西部は安比内Ⅰ遺跡とを境する小さな沢に開析され、安比川と段丘崖の間には小規模な沖積地が形成されている。地形の形態や堆積物からみて、遺跡が載る面は洪積段丘の低位面に相当し、北西へ緩やかに傾斜している。遺跡での標高は196～216m、安比川の現河床との比高は16m以上である。

2．調査の概要

発掘調査対象面積22,730m²のうち、工事用道路部分5,230m²は昨年度に調査を終了しており、今年度は残る17,500m²を調査した。

検出された遺構・遺物は平安時代に位置づけられるものが主であるが、縄文時代・時期不明のものもある。縄文時代の遺構の種類と数は、竪穴住居跡14、住居跡状遺構2、ピット25、焼土遺構9、埋甕2である。85基が検出された陥し穴状遺構も同時代に属するであろう。平安時代になると、竪穴住居跡69、ピット34、円形・方形周溝4、その他1が検出されている。その他としたものはフイゴ羽口の出土状況などからみて鍛冶に関連する施設かもしれない。現段階で時期不明のものには、竪穴住居跡ほか9、住居跡状遺構1、ピット31、焼土遺構27、溝8、掘立柱建物跡2、建物跡になる可能性をもつ柱穴状ピット多数、火葬墓3がある。竪穴住居跡ほかとしたなかには、住居形態から中世に位置づけられると推定されるもの1～2棟と漆製造にかかわる遺物を出土し、工房跡と推定されるもの3棟を含んでいる。

遺構の分布をみると、縄文時代の住居跡は北東崖線寄りのA～D区に主に集中する。同時代のピットは住居跡の分布に重なるほか、反対の南西端にあたるO・P区に少数が存在する。陥し穴状遺構はほぼ全域に分布するが、密集度では中央部が疎である。平安時代の住居跡は浅い埋没谷とそれに向う緩斜面が形成されたJ～N区の一部をのぞいて広範囲に分布する。密集度は段丘崖に近いB～D区に高く、E～H区がそれに次ぐ。時代不明の住居跡ほかとしておいた一群のほとんどは縄文時代住居跡に似た分布を示す。

〈竪穴住居跡ほか〉

縄文時代の住居跡14棟の時期別の内訳は、早期2棟、前期5棟、後・晩期6棟、不明1棟である。早期のうち1棟は押型文土器を共伴する。3.4×2.9mの規模を測り、平面の形状は凸辺隅丸長方形状になる。内部には炉を伴わない。前期の住居跡の平面形は不明な1棟をのぞいては長方形である。3棟は8～9個の柱穴をもち、規則的な配置を示す。また1棟は大型住居である。重複によって壁を部分的に失っているが、規模は9.0m×4.5m、床面積は38.8m²と推定できる。後・晩期のうち5棟は早期・前期と占地を異にしている。

平安時代の住居跡は、形態や規模・埋土の層相・カマドの形態と位置・共伴遺物など個別の属性や占地・重複あるいは位置関係から数時期にわたるいくつかの群に分類できる。住居跡数が多く、重複関係をもつ例・カマドの作り替えがある例などもよくみられる。ほとんどが灰白色浮石（十和田ａ降下火山灰）を埋土に含む。その入り方はいくつかに類型化でき、住居跡分類のときの鍵層になると考えられる。大きさをみると、床面積が計測できたものでは最小4.3m²から最大45.9m²である。37m²以上は少数で、大半は30m²以下、なかでも20m²以下に分布密度が濃い。そのほかには貯蔵穴様ピットを付属施設として内部に伴う例がある。平面形は長方形や円形などである。焼失住居ではその上にわたされた板材がおちこんでいる例をみることができる。また、占地や位置関係の検討から、住居とはわずかに離れた場所に大型のピットを共伴する例がいくつか知られている。

漆製造にかかわる工房跡と推定される竪穴３棟からは漆を濾すときにもちいられた撚りのかかった和紙が出土した。竪穴の平面形は方形で、壁際ほかに多くの柱穴がある。四隅に小ピットをもつ方形の炉を内部に伴うものが２棟ある。

〈ピット〉

縄文時代のピットはフラスコ形・ビーカー形など典型的な例のほかに浅皿状ピットなどがある。平安時代のピットにはいくつかの型がある。そのうちのひとつは貯蔵にかかわる機能をもつことが考えられるものである。平面形は隅丸方形・隅丸台形・不整楕円形で、一辺あるいは直径が1.7m前後のものと3.0m前後のものとがある。例外として直径4.0m、深さ1.4mの不整円形の大型ピットがある。貼り床や壁溝をもつ例がある。別なひとつである浅い不整形のピットは内部に現地性の焼土・木炭を伴う。

〈陥し穴状遺構〉

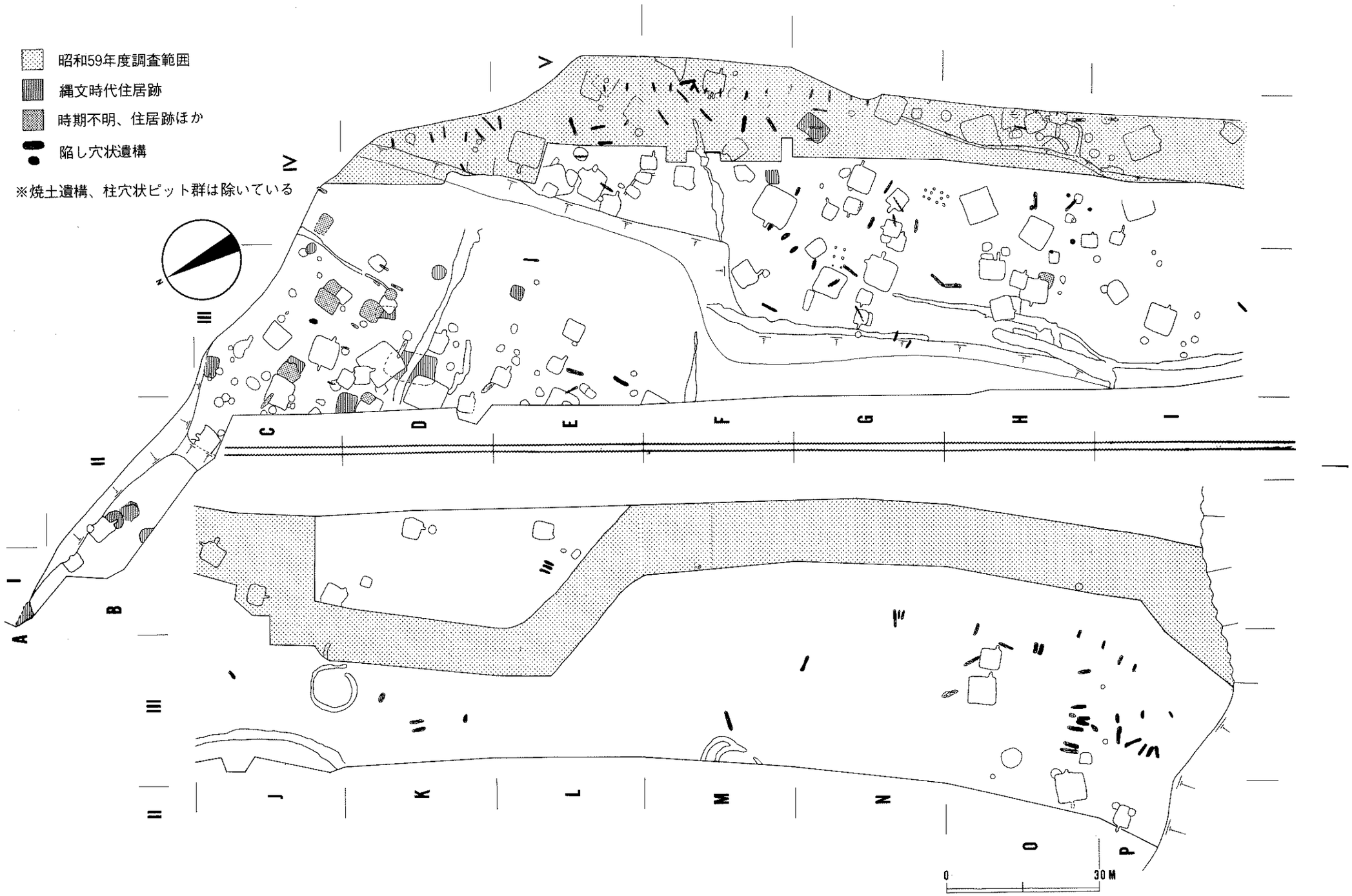
大多数は溝状の細長い形態をしたものである。長さが３m前後の一群と２m前後の一群がある。底面に小ピットを伴う例は短かい一群のものにみられる。そのほか、円筒形で底面に１～２個の小ピットをもつものと開口部が長楕円形をし、底面が長方形になるものが少数ある。

〈出土遺物〉

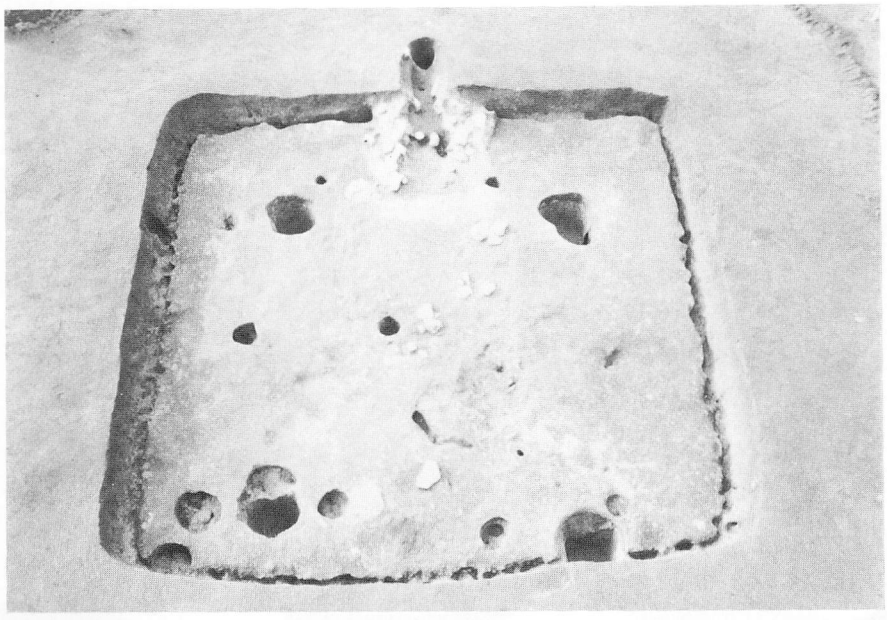
平安時代の遺物が卓越する。主体を占める土師器のほかに須恵器・鉄製品・鉄滓ほかがある。土師器坏形土器には静止糸切りの技法をもつものがあり、共伴する住居跡も数棟ある。縄文土器は早期～晩期に属するもので、前期のものが多い。

３．まとめ

２カ年にわたる調査で検出された遺構は平安時代住居跡90棟をはじめ種類・数量とも多い。時間的には縄文時代からおそらくは近世にまでおよぶ複合遺跡である。縄文時代早期前葉の押型文の時期や前期初めと推定される住居跡の存在、平安時代の遺構群など良好な資料を得ている。

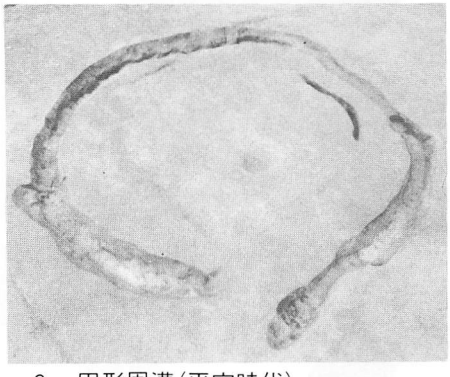


飛鳥台地Ⅰ遺跡遺構配置図



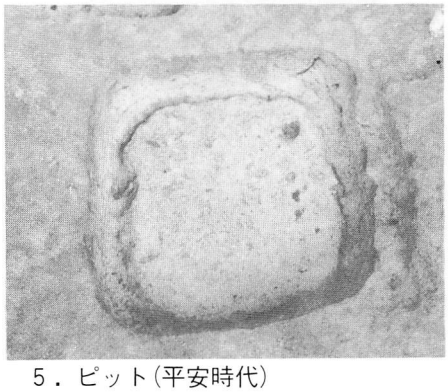
1．住居跡(平安時代)

2．住居跡(縄文時代早期)



3．円形周溝(平安時代)

4．大型住居跡(縄文時代前期)



5．ピット(平安時代)

飛鳥台地Ⅰ遺跡遺構

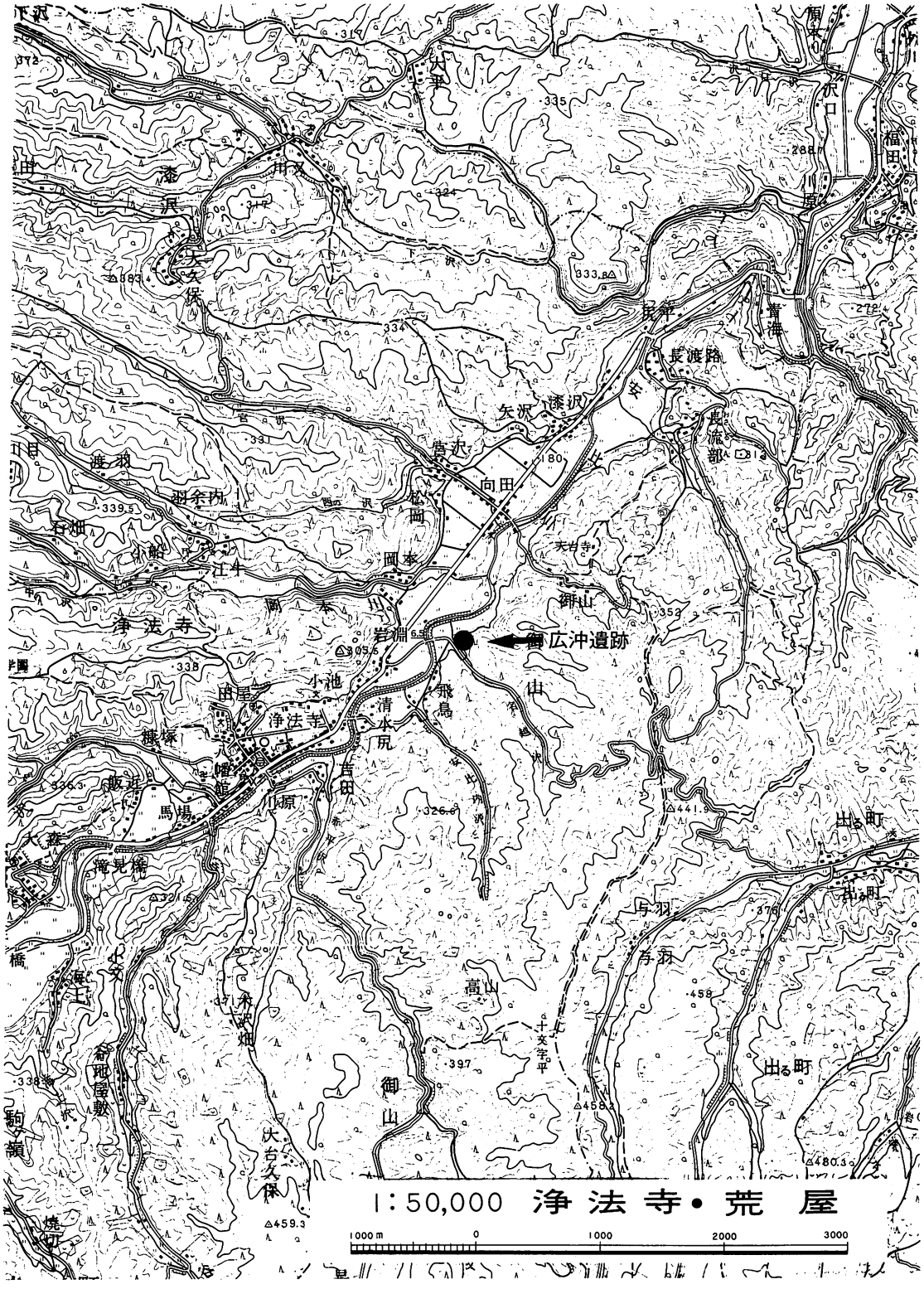
土師器

鉄製品

飛鳥台地Ⅰ遺跡出土遺物

（8）広沖（ひろおき）遺跡

所　　在　　地　二戸郡浄法寺町大字御山字広沖43－2
委　　託　　者　日本道路公団仙台建設局（一戸工事事務所）
発掘調査期間　昭和60年4月15日～6月19日
調査対象面積　1,590㎡
発掘調査面積　1,590㎡
遺跡番号・略号　ＪＥ27－2192・ＨＯ－85
調査担当者　田村壮一・岩渕　久
協力機関　浄法寺町教育委員会


広沖遺跡
1:50,000 浄法寺・荒屋
1000m 0 1000 2000 3000
浄法寺
荒屋
向田
岡本
御山
高山
出る町
長渡路
長流部
矢沢
漆沢
宮沢
清水尻
飛島
小池
馬場
川原
大久保
火台久保
十文字平
天台寺

広沖遺跡位置図

1．遺跡の立地

広沖遺跡は、浄法寺町役場から東北東1.8km、県道一戸・浄法寺線を安比川から250mほど東進した北東側に位置する。遺跡は、西北西に張り出した丘陵縁辺部の緩斜面に立地する。遺跡の北西側崖下には沖積地（水田）が形成され、南西側は名越沢に開析されている。遺跡の標高は、198～204mであり、沖積地との比高は20m前後である。

遺跡の現状は山林となっているが、それ以前は北東端を除き畑地として利用されている。そのため、東端山際と西端部が削平を受けているが、遺跡の大半は当時の状況をそのまま残していると思われる。

名越沢を挟んで対面する南西部には飛鳥台地Ⅰ遺跡がある。

2．調査の概要

調査面積は当初1,390㎡であったが、北部崖側４～５ｍ幅分増加し、長さ約60ｍ、幅約30ｍの範囲で、緩斜面全域を調査したものである。

検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡２、平安時代の竪穴住居跡４、縄文時代のピット46、平安時代のピット４、時代不明ピット１、陥し穴状遺構７、その他、炭窯１、土取り穴３である。

遺物は、縄文時代の土器や石器が主体である。

〈竪穴住居跡〉

縄文時代の住居跡は、１棟が遺跡のほぼ中央に位置し、長方形で炉をもたない。柱穴が西壁に３個検出されている。所属時期は前期と推定される。他の１棟は石囲い炉をもち、柱穴２個と床面の一部が検出されたものである。後、晩期と推定される。

平安時代の住居跡は、埋土に黄褐色火山灰ないしは灰白色火山灰が混入し、２棟がほぼ正方形、２棟が長方形状である。正方形の２棟はカマドが検出され、うち１棟は、規模が4.5ｍ×4.3ｍで、北東壁側から南東壁側にカマドがつくり替えられている。しかも、煙道がくりぬき式から掘り込み式へと変化しているものである。他の１棟は、2.7ｍ×2.7ｍの規模で、床面から砂鉄と鉄滓の付着した土師器の底部が出土し、鉄製品生産の工房跡とも考えられる。いずれも内部施設として隅にピットを１基もつものである。長方形状の２棟は、カマドが消失あるいは形状不明である。１棟からは鉄製紡錘車が出土している。

〈ピット〉

縄文時代のピットは、平面形が円形をなすものが多く、他に楕円形を呈するものがあり、その割合は３対１である。また、断面形はビーカー形３に対しフラスコ形１の割合である。最大規模をもつピットは、開口部で2.2×1.9ｍあり、この埋土の上位に中掫浮石が厚く堆積してい

る。埋土の上位に中掫浮石が載るピットは他に数基ある。最も深いもので0.9mである。円形でビーカー形の1基からは、石錘7点がまとまって出土している。時期は、後期もあるが検出状況から前期が半数以上を占めると推定される。

平安時代のピットは住居跡の周辺にあり、平面形が長方形を主体とし、埋土には灰白色火山灰が混入する。

〈陥し穴状遺構〉

溝状型が5基、長方形型が2基である。これらの配置方向には規則性がみられ、溝状型のものは等高線とほぼ直交し、長方形型のものは平行する。

長方形型のものには、埋土の上位に灰白色火山灰の堆積が認められる。そのうち1基の底面両端隅には計3個の杭穴状ピットが検出されている。この遺構の規模は、開口部で2.2×0.9m、深さ1.3m、壁は短軸方向が下部で直立し、長軸方向がやや内傾する。

溝状型で最も長いのは3.6m、最も深いのは1.5mである。

〈その他〉

遺跡の中央部に小型の炭窯が1基検出されている。5～6俵程度焼ける規模のもので、炭化材は残存していない。土製の煙突が使用されている。近代のものである。

南端斜面部に土取り穴が3カ所検出されている。出土遺物が雑多で、土蔵築造に結びつくと考えられるもので、近世以降のものである。

〈出土遺物〉

遺構では、平安時代の住居跡から墨書土器や土玉が出土しているが、遺構数の割合に比して土師器の量は多くない。

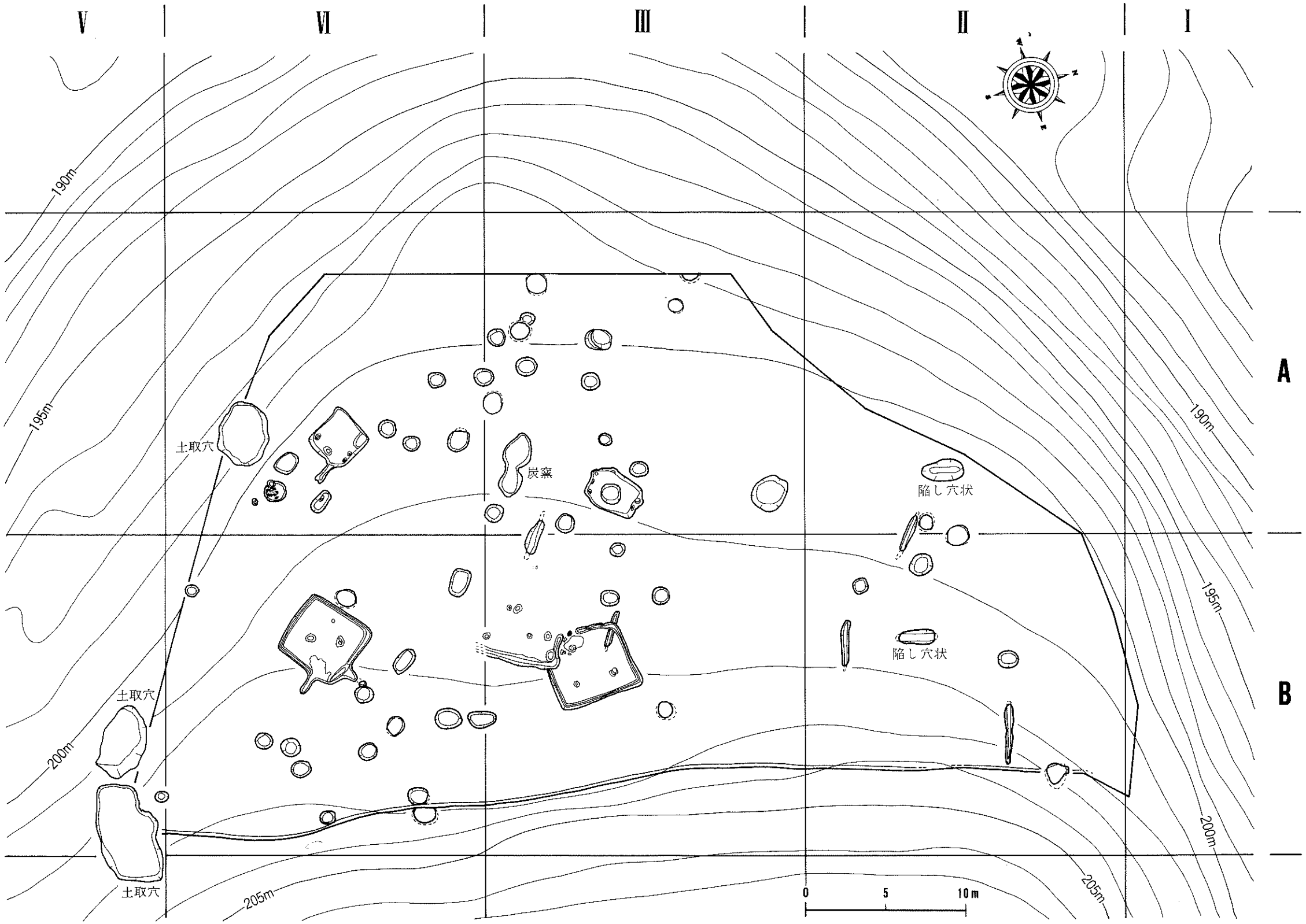
遺構内外から縄文時代の遺物が多く出土している。早期・前期・後期・晩期の土器、石鏃、石錐、石匙、スクレイパー、石箆、石棒、石錘、磨石、敲石、凹石、柱状磨石などの石器・石製品が出土している。中でも石錘と柱状磨石が多く、また剝片も多数出土している。

その他、砥石、フイゴの羽口、鉄滓、古銭、陶磁器等が少量出土している。

3．まとめ

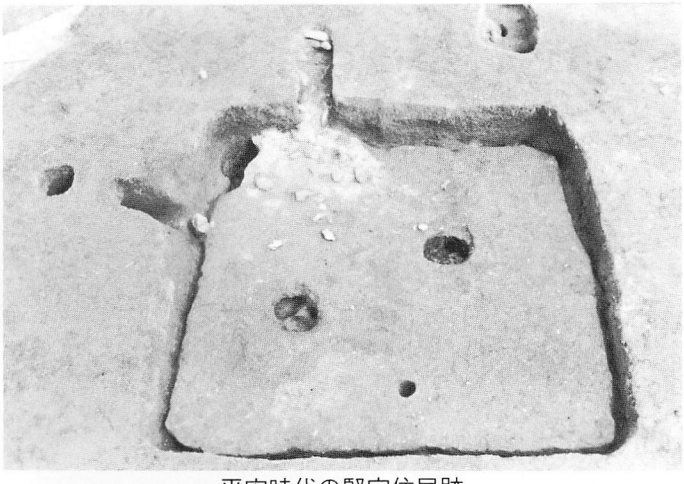
本遺跡は、地形的にみると、北側は崖で限られているが、西部先端部、さらには南部沢沿いに遺跡が続いていくものと考えられる。また、沢を挟んで隣接する飛鳥台地Ⅰ遺跡とほぼ同じ標高にあり、同時期の遺構もあることから、同時代に生業を営んでいたものと思われる。

縄文時代には、集落として、また狩猟の場として利用され、長い空白期間を経て、平安時代に至って鉄製品生産をも含む集落として再び活用されたものといえよう。

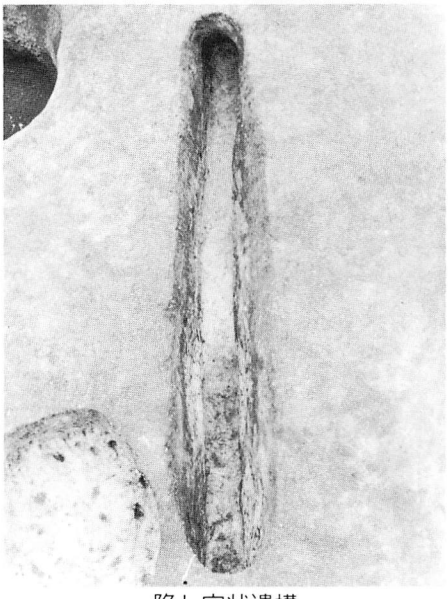

V
VI
III
II
I
A
B
190m
195m
200m
205m
土取穴
土取穴
土取穴
炭窯
陥し穴状
陥し穴状
0
5
10m

広沖遺跡遺構配置図

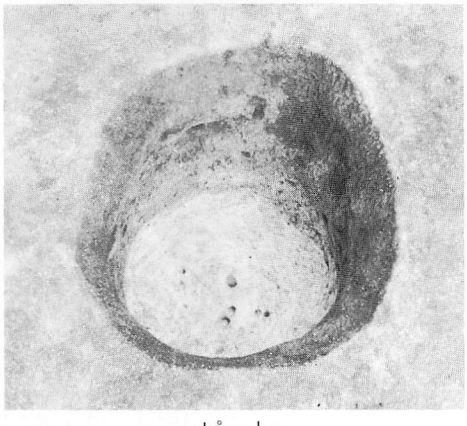
遺跡全景



平安時代の竪穴住居跡



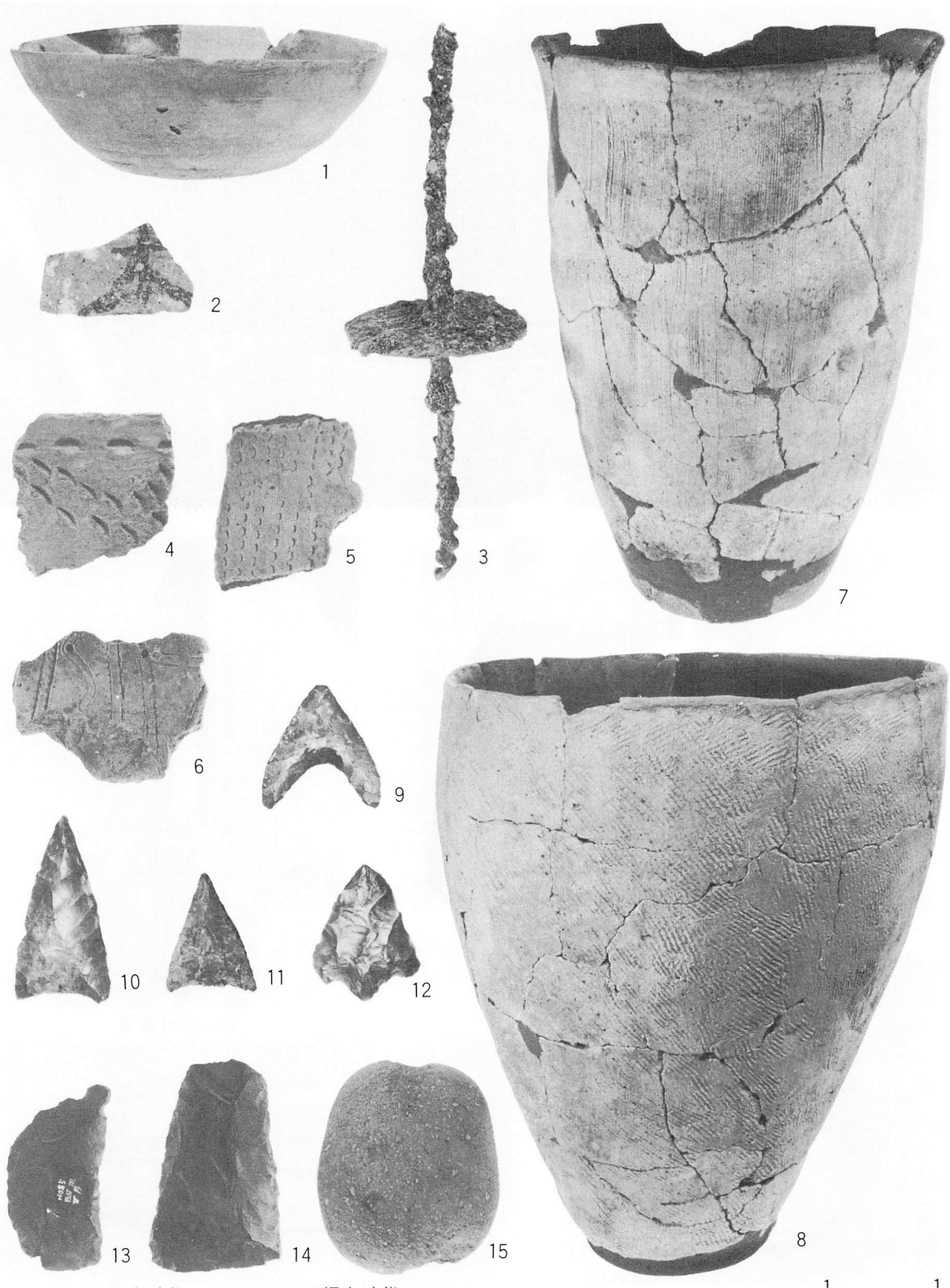
陷し穴状遺構



ピット

杭穴のある陷し穴状遺構

広沖遺跡遺構

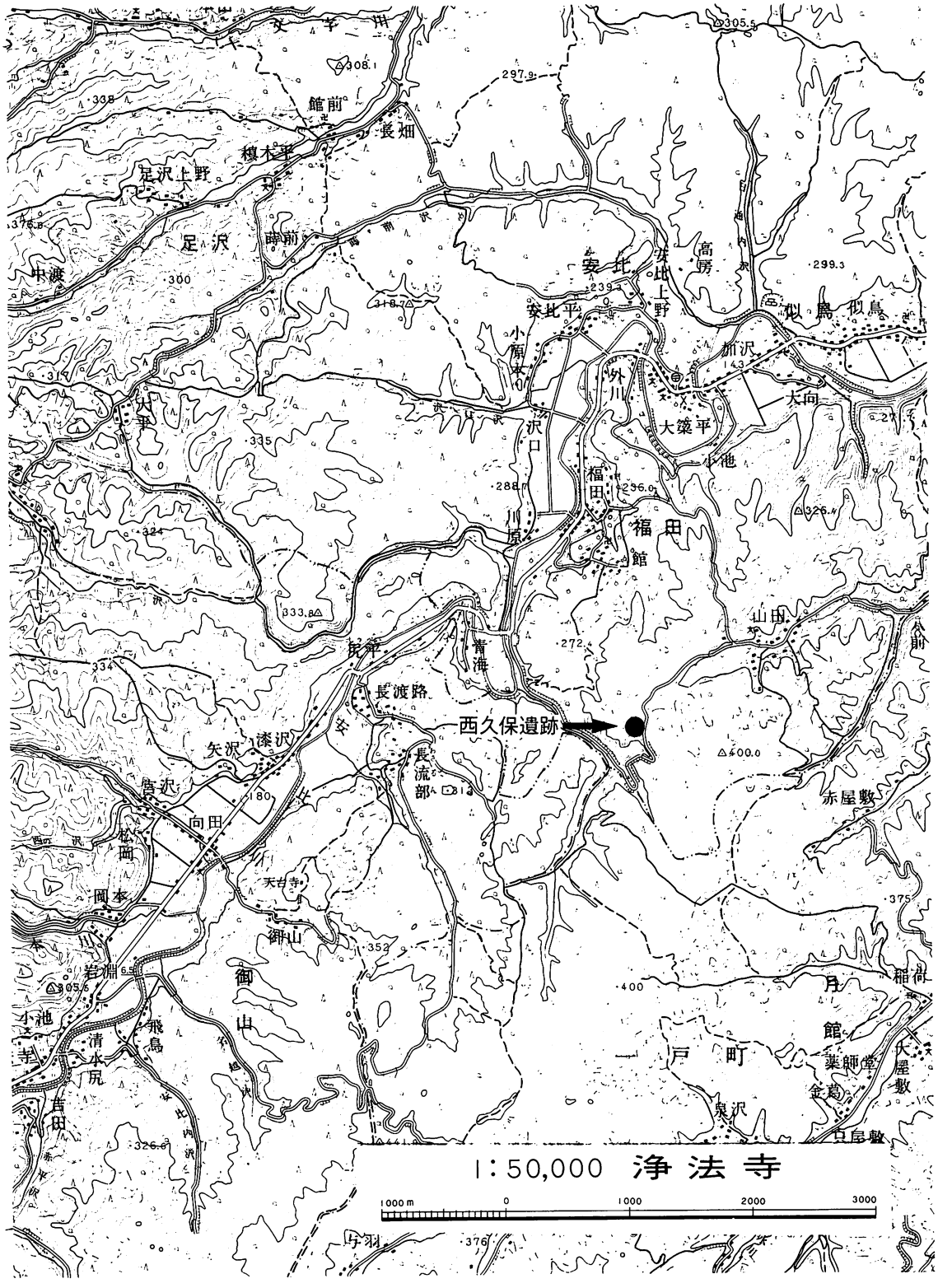


1～3 平安時代　　4～15縄文時代　　縮尺 9～12:原寸，1～6、13～15:$\frac{1}{2}$　7・8:$\frac{1}{3}$

広沖遺跡出土遺物

（9） 西久保遺跡

所在地	二戸市福田字西久保７－７ほか
委託者	日本道路公団仙台建設局（一戸工事事務所）
発掘調査期間	昭和60年６月１日～７月11日
調査対象面積	1,900㎡
発掘調査面積	1,900㎡
遺跡番号・略号	ＪＥ28－0180・ＮＫ－85
調査担当者	中村良一・高橋義介
協力機関	二戸市教育委員会


館前
長畑
榎木平
足沢上野
足沢
神前
中渡
安比
安比平
安比上野
高房
似鳥
加沢
外川
大向
大築平
小池
小原本
沢口
福田
福田館
川原
山田
民平
青海
長渡路
西久保遺跡
漆沢
矢沢
長流部
向田
松岡
岡本
天台寺
御山
岩淵
清水尻
飛鳥
小池寺
吉田
赤屋敷
月館
稲荷
戸町
薬師堂
金鶏
大屋敷
泉沢
1:50,000 浄法寺
1000m 0 1000 2000 3000

西久保遺跡位置図

1．遺跡の立地

西久保遺跡は、二戸市の南西端に位置し、県道二戸・安代線の御返地小学校山田分校入口から南方約3.8㎞に所在する。

遺跡は、安比川右岸に発達した七時雨山山麓丘陵地縁辺部の緩斜面上に立地している。標高は300m～315mで、現状は農道と土塁（放牧の区画）である。周辺の遺跡は、北側に隣接して大久保遺跡がある。

2．調査の概要

調査は、東北自動車道本線工事に伴う工事用道路部分、長さ約250m、幅７m～12mを対象として実施したものである。

調査の結果、陥し穴状遺構５基、炭窯跡１基が検出された。

〈陥し穴状遺構〉

５基の平面形態は溝状を呈し、長さ3.20m～4.90m、幅0.30m～0.58m、深さ0.75m～1.15mの規模である。底面に小穴（杭穴）がないタイプのものである。短軸の断面形態は、Y字形とV字形の２種類がある。２基並列する以外の規則性は見られない。埋土の堆積状況は、開口部から流れ込みの自然堆積の様相を示している。

〈炭窯跡〉

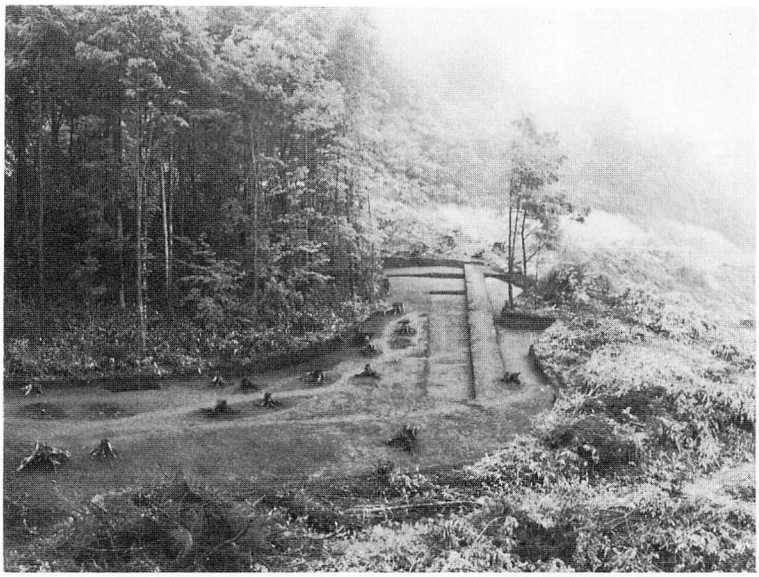
炭窯跡は、調査区の中央部から検出されている。昭和30年代の木炭生産最盛期に周辺で構築された炭窯の１基で、特徴として底面の両側と中央に幅８㎝～14㎝の溝が３条巡ぐるタイプのものである。

〈出土遺物〉

遺物は、主に調査区南端から土器破片と石器が少量出土している。土器は縄文土器（早期・前期・後期）と土師器、石器は石匙、磨製石斧、凹石、磨石、敲石、台石等である。

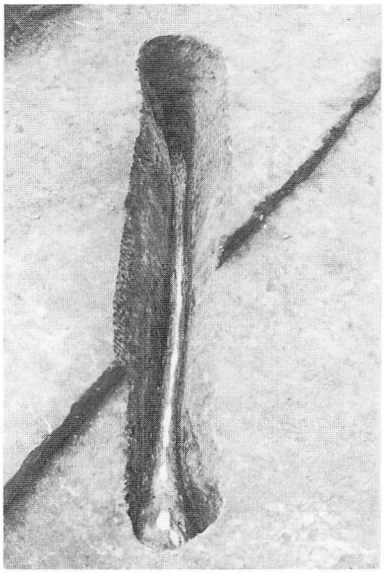
3．まとめ

本遺跡の調査は狭い範囲であったが、陥し穴状遺構が２基並列する規則性も見られ、この周辺が縄文時代の狩猟の場として利用されていたことがうかがわれる。また、北側に接する大久保遺跡の陥し穴状遺構群との関連も十分に考えられる。

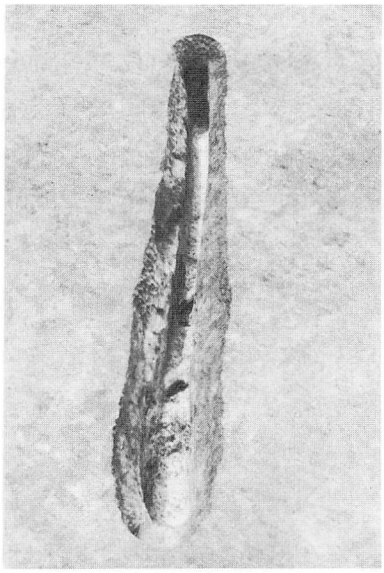


遺跡近景

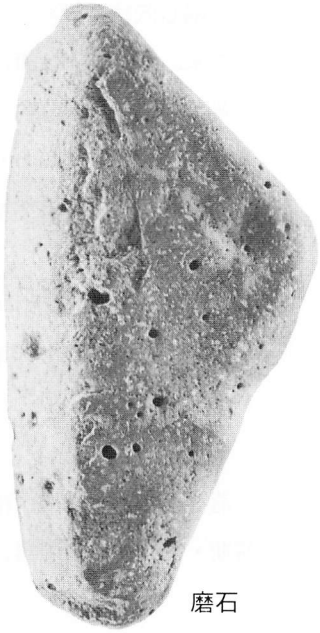
C－1炭窯



A－2陥し穴状遺構

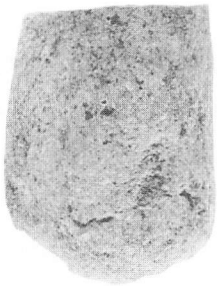


C－1陥し穴状遺構



磨石

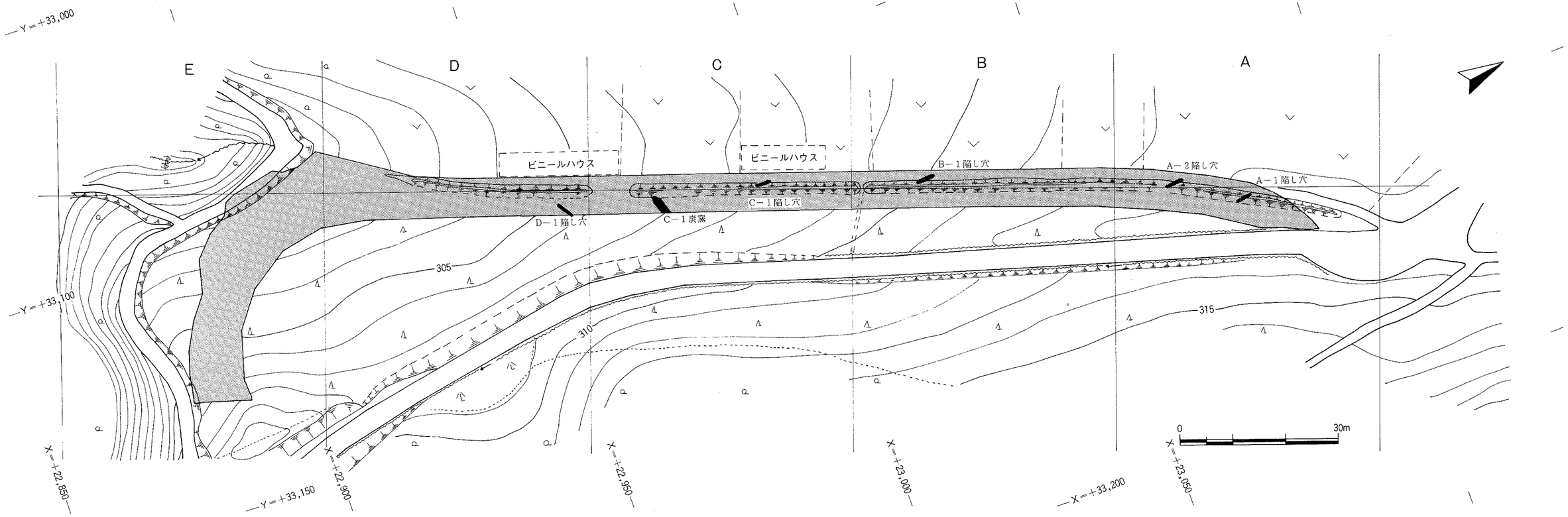
凹石



磨製石斧

縄文土器

西久保遺跡遺構・出土遺物


E
D
C
B
A
ビニールハウス
ビニールハウス
B－1陥し穴
A－2陥し穴
A－1陥し穴
C－1陥し穴
D－1陥し穴
C－1炭窯
305
310
315
0
30m
Y＝＋33,000
Y＝＋33,100
Y＝＋33,150
X＝＋22,850
X＝＋22,900
X＝＋22,950
X＝＋23,000
X＝＋33,200
X＝＋23,050

西久保遺跡遺構配置図

(10) 大久保遺跡

所在地	二戸市福田字大久保31ほか
委託者	日本道路公団仙台建設局（一戸工事事務所）
発掘調査期間	昭和60年4月16日～10月31日
調査対象面積	36,990㎡
発掘調査面積	26,910㎡
遺跡番号・略号	ＪＥ28－0154・ＯＫ－85
調査担当者	佐々木嘉直・工藤利幸・中村良一・高橋義介
協力機関	二戸市教育委員会

大久保遺跡位置図

1．遺跡の立地

大久保遺跡は、国鉄東北本線北福岡駅の南西約7.5kmに位置し、県道二戸～安代線の外川地区御返地小学校山田分校入口から安比川右岸の南約3.5kmで山田集落があり、その集落西端から西南西へ0.6～1.0kmの区域に所在する。

遺跡は、標高350m前後の山並に挟まれた谷地形の谷頭付近（標高304～322m）に広がっており、山田集落を貫流する小沢の源泉もこの区域に存在する。遺跡周辺は、山地の張り出し部やそれらに狭まれて小規模な扇状地形が見られるものの段丘地形の発達は不明瞭である。また、遺跡付近の表層地質、特に各時代の遺構形成と直接関連する火山灰は八戸火山灰・南部浮石・中掫浮石・十和田b・a降下火山灰が認められ、基本的に馬淵川流域や軽米地区と同様である。

2．調査の概要

調査対象区域は、路線中心線に沿って最長400m、パーキングエリア部等で最大幅180mの範囲にあり、その面積は36,990m²である。

検出された遺構は、住居跡3棟、陥し穴遺構・フラスコ形などの貯蔵穴を含めた土坑類88、土器埋設遺構1、炭窯跡1であり、炭窯跡を除いた住居跡・土坑類・土器埋設遺構は何れも縄文時代に属するものである。

遺物は、縄文時代早期の沈線貝ガラ文系土器群、同早期末～前期初頭の繊維土器群、同後期の土器群、そして赤色顔料塗布や突瘤文をもつ土師器等が出土している。縄文時代の各土器群は、礫塊石器・数種の剝片石器を伴っており、なかでも繊維土器群は多量の擦石・敲石類を伴っている。

〈竪穴住居跡〉

住居跡3棟のうち1棟は早期の沈線貝ガラ文系土器を伴うもので、他の2棟は後期に属するものである。しかし、1棟は石囲炉しか確認できず柱配置・平面形等は不明のものである。

早期の住居跡は、南部浮石層とその下位層を除去した段階で検出したものである。規模形状は、軸長2.8m前後・壁高45cmほどで南東側が直線的な不整円形で、柱穴・炉・周溝などは確認できなかった（写真1）。床面出土の遺物は写真25の沈線文土器と巨礫、そして埋土中から写真20などの土器片が出土している。

後期の住居跡は、中掫浮石層上位層で検出したが耕地造成の関係から一部を欠いている。規模形状は、長軸4.4m・短軸3.6m・最大壁高43cmほどで住居中心から南東の位置が内部に張り出したハート形の平面形を呈する。炉は、住居中心付近に地面を浅く掘りくぼめており、石組・石囲等の痕跡は確認できなかった。主柱穴はL字形に3本が、また壁際に沿って大小の柱穴様小穴列がめぐっている。石囲炉だけのものは、付近から写真13の小型壺形土器が出土しただけ

で他に規模構造を示すものは確認できなかった。

〈土坑類〉

土坑類は、フラスコ形の貯蔵穴他19基、溝状陥し穴53基、円筒形・小判形・長方形の陥し穴16基である。溝状を呈する陥し穴は、底部形状に若干の差異が見られるものの長さ３m～５m・深さ1.2m前後で、全体的配置を見ると山裾に沿う群と谷を横断する群、そして沢筋に並行する群がある。これらは更に２基並列、３～５基が直列・並列するものなどに細分される。円筒形の陥し穴は大別２種があり、基本土層・埋土の関係から早期と前期とに区別できる。これらもまた、山裾に沿う群と沢筋に群をなすものとがある。なお、円筒形陥し穴のほとんどから逆杭跡を確認している（写真５ａ・６・７）。

〈土器埋設遺構〉

本遺構は、平面・断面共に不明瞭な土坑に波状口縁をもつ深鉢形土器を正立埋設したもので、内外からは何らその性格を示す遺物等は発見できなかった（写真14）。

〈炭窯跡〉

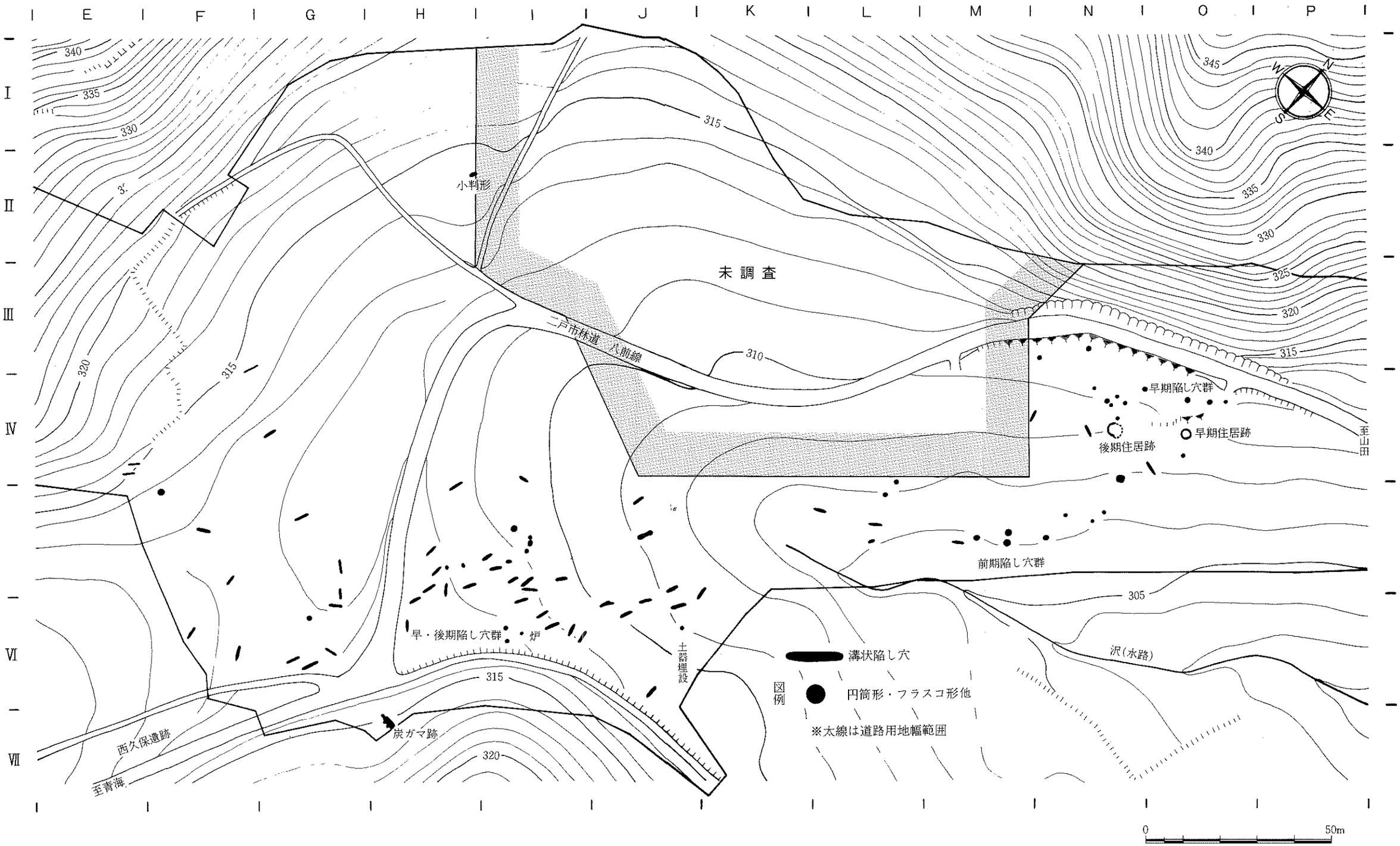
炭窯跡は昭和30年代のものと考えられるが、聞きとり調査不十分のため構築使用年代を特定できない。窯構造は、平面形が羽子板状のものの右側に補助炊き口・空気導入口を２カ所設けており、地域的かあるいは個人的な改良工夫がなされたものと思われる。

〈出土遺物〉

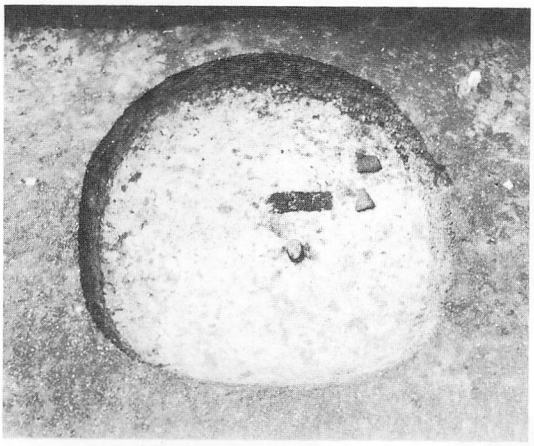
調査区域全域からは出土しておらず、時代・時期ごとに偏在している。早期沈線貝ガラ文系土器群は、早期住居跡周辺の南部浮石層下から“物見台式土器群”が、“吹切沢式土器群”および繊維土器群が配置図中央よりやや右下の区域の南部浮石層上位から出土している。また後期の土器群は数地点で、土師器は１地点で各々集中して出土している。

３．まとめ

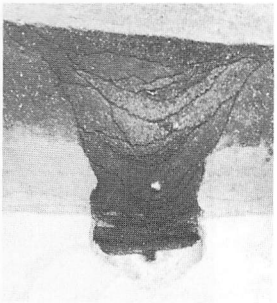
調査を来年度に残しているが、本年度の調査成果として注目すべき点は次の２点である。第１点は、昭和20年代以降、江坂輝弥・林謙作・石岡憲雄・杉山武・三宅徹也・名久井文明他によって論議されて来た縄文時代早期の土器編年の一部“物見台式土器(旧)”と“吹切沢式土器(新)”との関係が南部浮石層を鍵層とする層位学的把握によって明確となったこと。この「物見台式(旧)→吹切沢式(新)」の関係を確定させたことは、他の関連土器の編年位置についても見なおしを必要とするが、概ね三宅（蛍沢遺跡1979）の編年観を逆にすることで解決されるものと考える。第２点は、近年岩手県北部で調査例が増加している“円筒形陥し穴”が単に形態分類されるだけではなく、その形態の差異が時期差をも示す可能性が高いこと、が挙げられる。


I E I F I G I H I I I J I K I L I M I N I O I P I
I
II
III
IV
VI
VII
340
335
330
325
320
315
310
305
345
小判形
未調査
二戸市林道 八前線
早期陥し穴群
早期住居跡
後期住居跡
至山田
前期陥し穴群
沢(水路)
早・後期陥し穴群
炉
土器埋設
炭ガマ跡
西久保遺跡
至青海
溝状陥し穴
図例
円筒形・フラスコ形他
※太線は道路用地幅範囲
N
W
E
S
0
50m

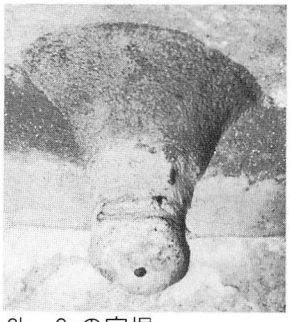
大久保遺跡遺構配置図



1．縄文時代早期の住居跡（写真25の土器が床面）

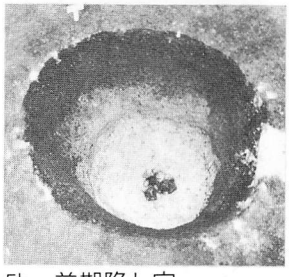


2a．早期陥し穴（半截）



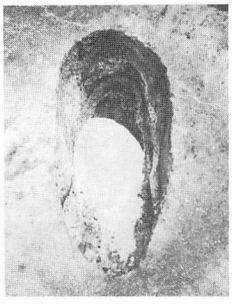
2b．2aの完掘

5a．5b陥し穴の逆杭部

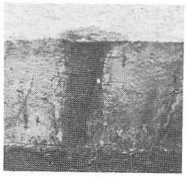


5b．前期陥し穴

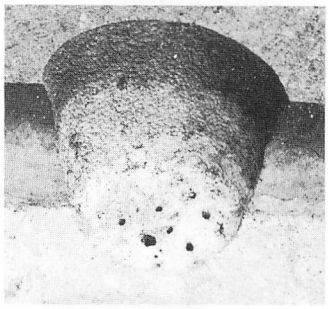
3．早期陥し穴（半截）



4．小判形陥し穴

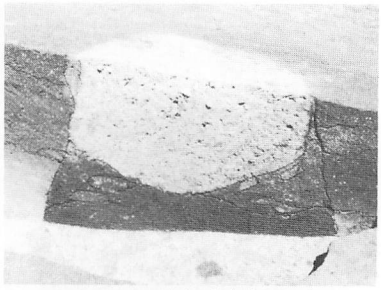


6．陥し穴逆杭

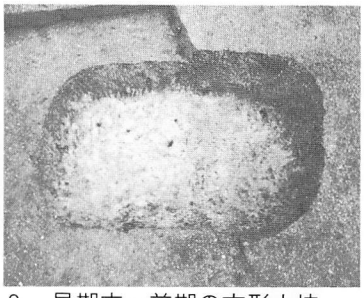


7．陥し穴（前期？）

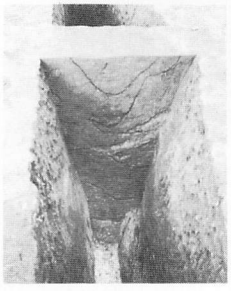
※写真２～４の陥し穴は、土層の水平移動によってズレと変形を生じている
写真４の時期は不明
※各写真の縮尺率不定



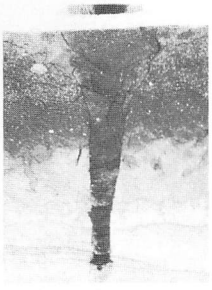
8．フラスコ形土坑（後期？）



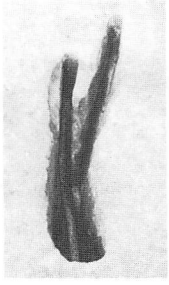
9．早期末～前期の方形土坑



9．横断面形状

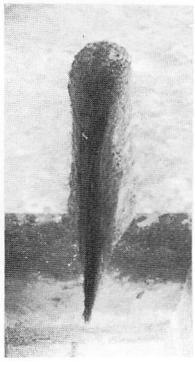


10．横断面形状



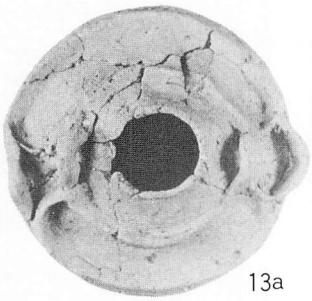
11．重複状態

12a．横断面形状

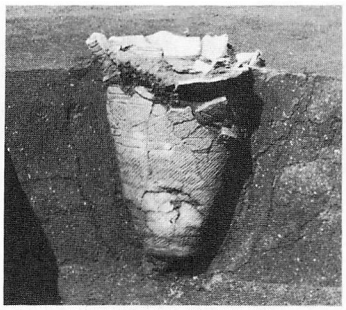


12b．完掘

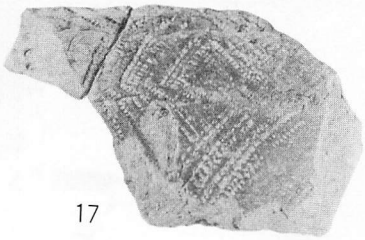
大久保遺跡遺構



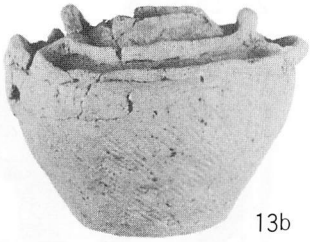
13a



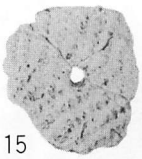
14．土器埋設遺構（後期）



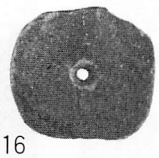
17



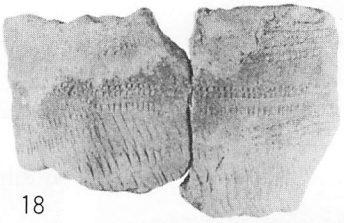
13b



15

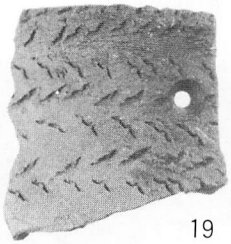


16

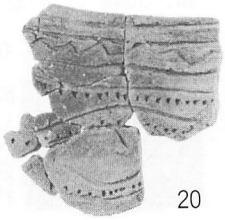


18

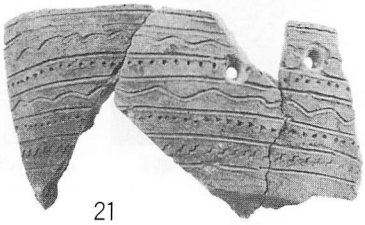
本線を境として上は、南部浮石層の上、下は同層の下



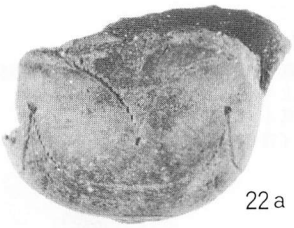
19



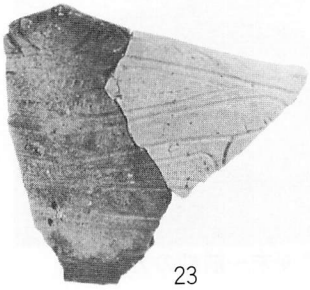
20



21

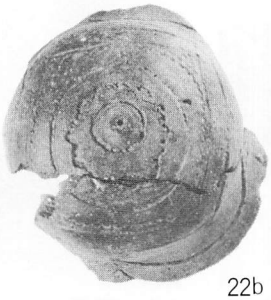


22a

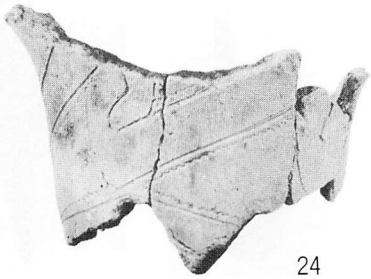


23

25



22b



24

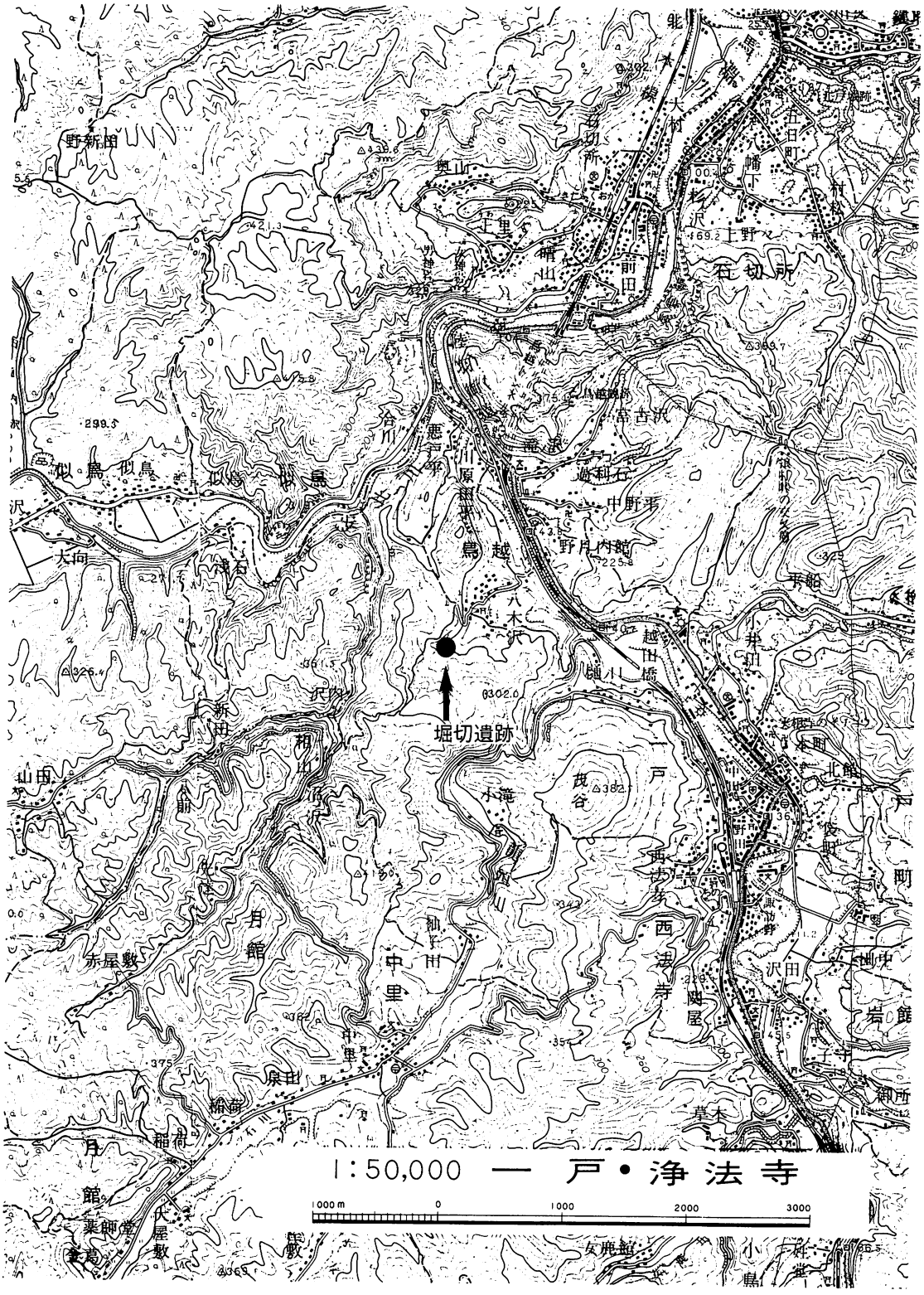
※写真13・14は、中振浮石層上位からの出土、および掘りこみ形成の遺物と遺構。写真15～18は、中振浮石層と南部浮石層との間から出土。写真19～25は、南部浮石層の下位からの出土で、25は早期住居跡床面から、20は埋土から出土している。

※各写真とも縮尺率不定。

大久保遺跡出土遺物

(11) 堀切（ほりきり）遺跡

所　在　地　二戸郡一戸町鳥越字堀切17ほか
委　託　者　日本道路公団仙台建設局（一戸工事事務所）
発掘調査期間　昭和60年6月3日～9月10日
調査対象面積　8,590㎡
発掘調査面積　8,590㎡
遺跡番号・略号　ＪＥ19―1185・ＨＫ―85
調査担当者　長沼　彬・高橋与右エ門
協力機関　一戸町教育委員会


堀切遺跡
1:50,000 — 戸・浄法寺
1000 m
0
1000
2000
3000
石切所
前田
上野
似鳥
中野平
野月内館
越田橋
小井田
北館
戸
西法寺
月館
中里
赤屋敷
泉田
稲荷
薬師堂
女鹿館
小島

堀切遺跡位置図

1．遺跡の立地

堀切遺跡は、一戸町役場の北西約2.8km、一般国道4号の西方約1.1kmに位置する。遺跡の東方1kmを馬淵川が北に流れ、北東に流れる安比川と遺跡の約1.9km北方で合流する。

遺跡は、馬淵川の西方1～2kmに連なる標高300m～400mの丘陵地東側斜面を開析する、馬淵川左岸の支流八木沢の左岸に立地する。遺跡の西方には標高300m前後の低い丘陵があり、それから東方に張り出す尾根が遺跡の北側に延びており、遺跡はその尾根の東面や南東面する裾部斜面にある。八木沢を挟んだ南側も標高300m位の丘陵地が続いている。標高は205m～227m、馬淵川の河床とは最高位で約100mの比高差がある。

2．調査の概要

調査範囲は東西150m、南北90mの広さがあり、北東隅から南西隅に向って蛇行する農道が通り、全体が東面や南東面する傾斜地で畑地として利用されている。

発掘調査の結果、竪穴住居跡5、土坑14、焼土遺構1の遺構と、土器・石器・陶磁器・金属製品等の遺物が発見された。

〈竪穴住居跡〉

検出された5棟はすべて竪穴住居跡であるが、傾斜地に立地するため斜面下位部分の壁や床面が全体のかなりを流失し、全体が把握できるのは1棟のみである。遺跡内での位置関係をみると、3棟は斜面下位の崖縁から10m～30m離れており、他の2棟は40m～60m離れ、それぞれが20m～40mの距離をもって散在している。

平面形は1棟が方形か長方形と考えられるが、ほかの4棟は径3.4m～4m位の円形か楕円形を示すと推定される。炉は円形住居跡3棟から検出されているが、2棟は土器埋設石囲い炉で、もう1棟はL字形に角礫を2個配置した変形の石囲い炉である。土器埋設石囲い炉の2棟のうち、1棟は中心に口径11cm、器高12cmの小型鉢を埋設し、その周囲に3個の円礫を北が開口する「コ」字状に配置する構造と、他の1棟は、中央に体部下端～底部を残存する底径11.5cm、器高10cm位の大型深鉢を埋設し、その周囲に角礫や亜角礫を22個使用し二重に配置するものである。柱穴や壁溝は検出されていない。

出土遺物は少ないが、斜面下位の3棟は縄文時代に属し、他の2棟は不明である。縄文時代の3棟は炉の埋設土器から2棟は晩期、残る1棟は床面出土の土器片から後期ごろと推定される。

〈土　坑〉

検出された14基は調査範囲全域に散在するが、南側の崖縁に8基が位置し、他の6基は調査範囲の北半に立地している。平面形は円形11基、隅丸長方形か楕円形2基、不整形1基に分け

られ、断面形はフラスコ形3基、ビーカー形6基、ボール形2基、浅皿形3基に細分される。円形のものは径80cm～1.5m、楕円形は長軸1.3m～1.5m・短軸1m～1.2mである。深さは10cmから1mと差が大きく、その中でも50cm以下が10基である。これはいずれも斜面に立地するため、上部が削平を受けていることに起因すると考えられる。

時期が明らかなのは1基のみである。それは、開口部径70cm、頸部径40cm、底部径1m、深さ1mの規模をもつ断面フラスコ形の土坑で、底面直上から縄文晩期後半に位置づけられる器高9cm、口径21.5cmの浅鉢（写真図版①の土器）が伏せられて出土したことによる。

〈焼土遺構〉

遺跡の北東端に位置し、不整形な60cm×40cmの広がりをもつ焼土である。遺物の共伴がないので時期が明確でないが、検出された土層が縄文時代に相当するので、縄文時代に属する遺構と推定される。

〈出土遺物〉

遺物には縄文土器、弥生土器、土師器、陶磁器、石器・石製品、金属製品等の種類がある。検出遺構も少ないことから遺物も少なく、主体は縄文土器と石器が占める。

縄文土器には早期の貝殻文系と条線文系、中期前葉の円筒上層a式、中期後葉の大木9式、後期前葉の十腰内Ⅰ式、晩期中・後葉の大洞C_1～A式の土器が含まれるが、主体を占めるのは晩期に属する土器である。

弥生土器は調査範囲北西の東向き斜面から集中して出土している。時期的には後葉の田舎館式に近いものと末葉の天王山式や赤穴式に近いものが含まれている。

土師器は遺跡ほぼ中央で検出された埋没谷から、ロクロ不使用成形の甕が数点出土している。時期的には平安時代に属すると思われる。

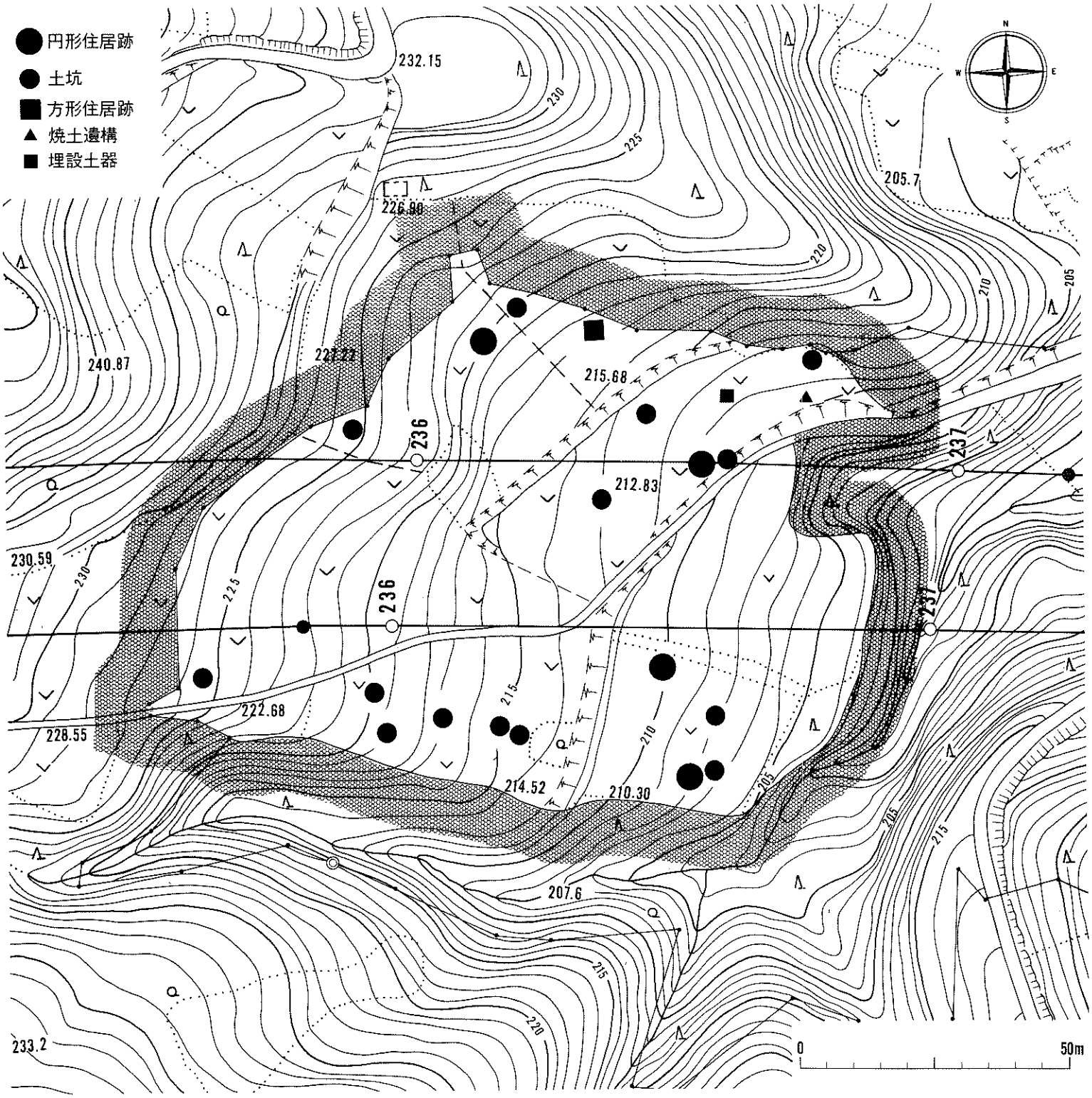
陶磁器には、陶器として大型甕の体部破片が、磁器として赤絵の碗破片がある。時期は近世以降であろう。

石器・石製品は48点の出土である。器種には石鏃・石槍・石箆・掻器・磨製石斧・凹み石・磨石・敲き石・石錘・石皿・独鈷石・石刀・石棒・石板等がある。

金属製品には古銭（寛永通寶）4枚と煙管1組がある。

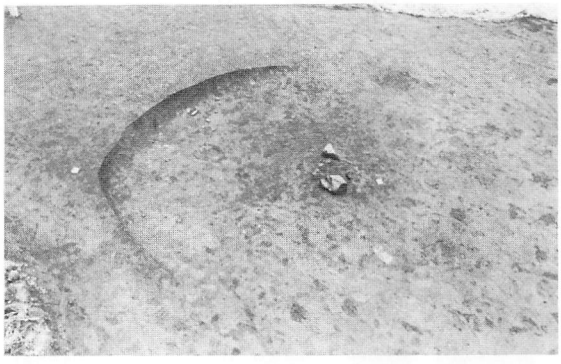
3．まとめ

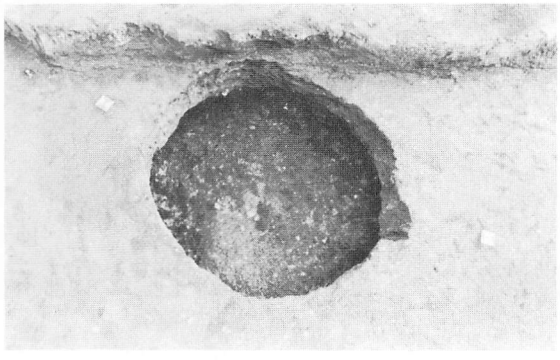
本遺跡は南・西・北を丘陵に囲まれた沢沿いの緩斜面に立地するが、調査の結果、縄文時代晩期を中心とする集落遺跡であることが明らかとなった。さらに、弥生時代や平安時代に属する遺物も出土していることから、これらの時代の遺構は調査区域外に広がっている可能性を示している。

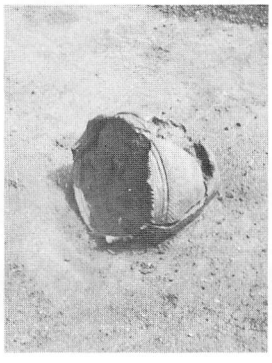

円形住居跡
土坑
方形住居跡
焼土遺構
埋設土器
232.15
226.90
205.7
240.87
227.22
215.68
236
237
212.83
230.59
222.68
228.55
214.52
210.30
207.6
233.2
0
50m

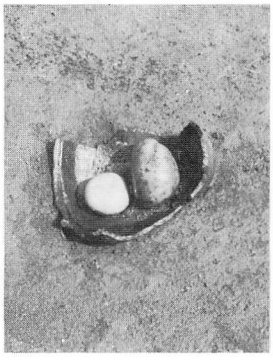
堀切遺跡遺構配置図

空中写真



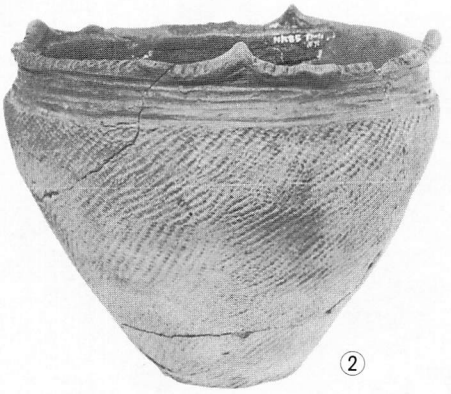




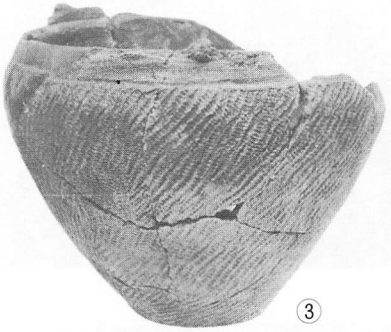


堀切遺跡遺構

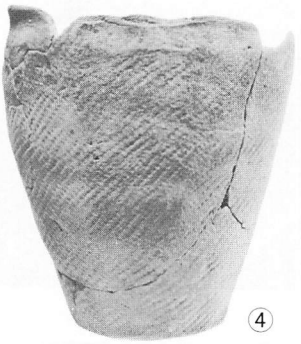
①



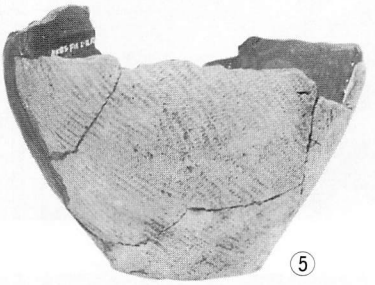
②



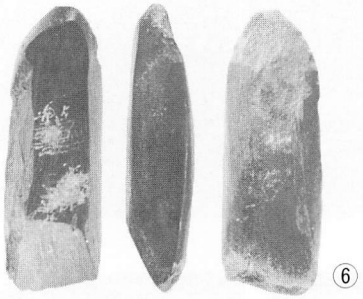
③



④

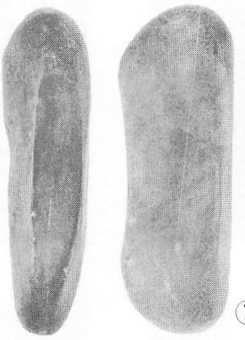


⑤



⑥

（弥生・柱状片刃石斧）

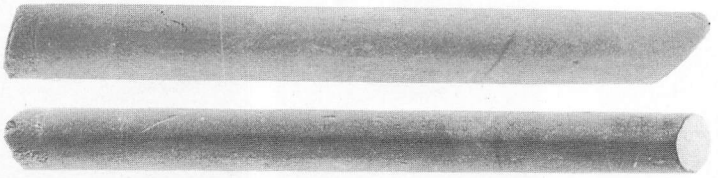


⑦

⑨

⑩

⑨・⑩は土器②の内部から出土した。



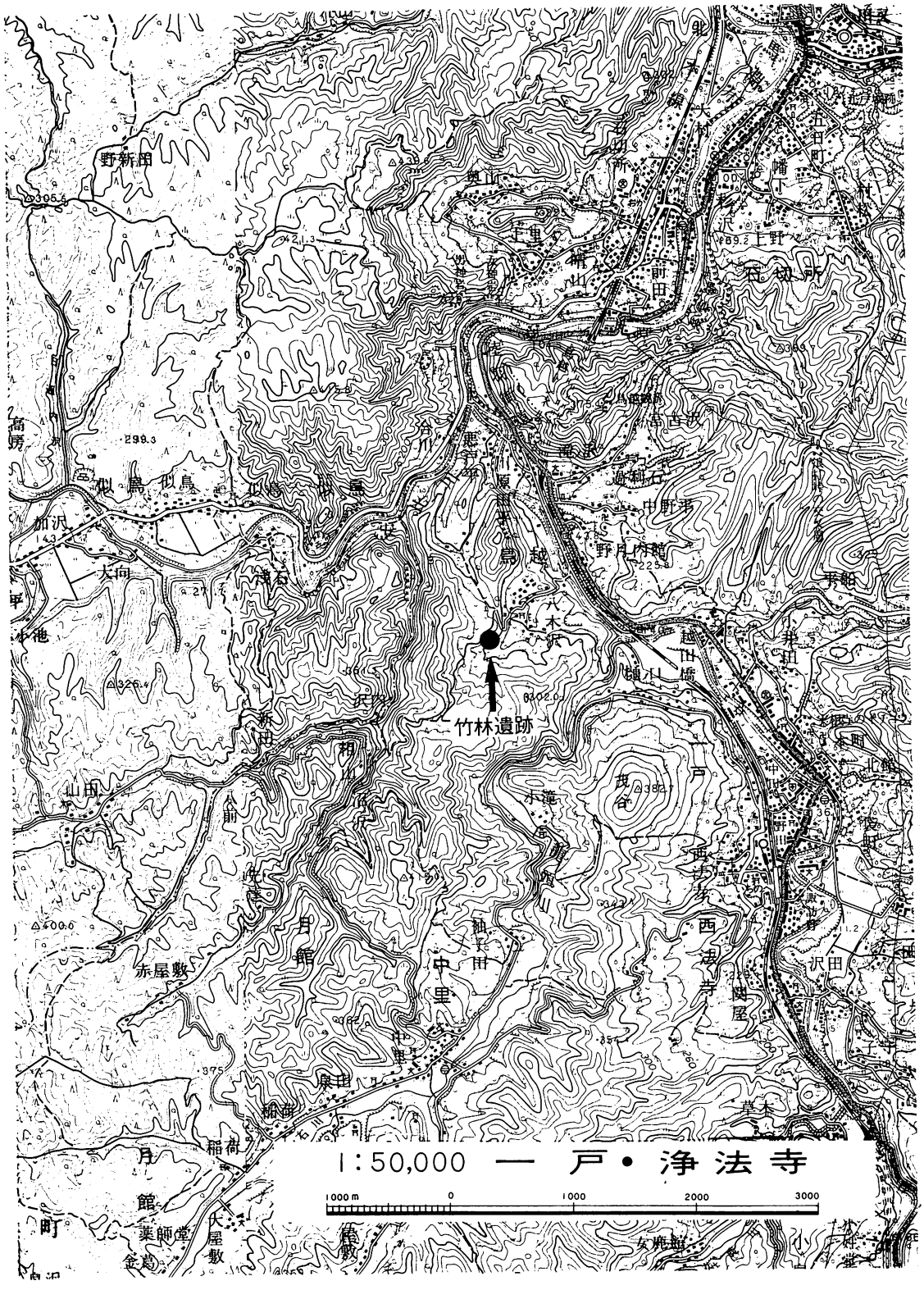
⑧

（石　　棒）

堀切遺跡出土遺物

(12) 竹林（たけばやし）遺跡

所　　在　　地　二戸郡一戸町鳥越字竹林２－１ほか
委　　託　　者　日本道路公団仙台建設局（一戸工事事務所）
発掘調査期間　昭和60年９月11日～９月27日
調査対象面積　960㎡
発掘調査面積　960㎡
遺跡番号・略号　ＪＥ19―1177・ＴＢ―85
調査担当者　長沼　彬・高橋与右エ門
協力機関　一戸町教育委員会


竹林遺跡
1:50,000 — 戸・浄法寺
1000 m 0 1000 2000 3000
野新田
似鳥
加沢
大向
赤屋敷
月館
中里
泉田
稲荷
薬師堂
金鶏
犬屋敷
鹿敷
安鹿越
小岸堂
沢田
西
戸
上野
石切所
五日町
中野平
野月
越
木沢
小滝
前田
上里
奥山
高房
299.3
△305.5
△326.4
△400.0
975

竹林遺跡位置図

1．遺跡の立地

竹林遺跡は、一戸町役場から北西2.7㎞に位置する。遺跡は、北流する馬淵川支流の八木沢西岸にあたり、馬淵川の西約1㎞に連なる標高およそ300mの丘陵地の東側斜面下位に立地している。遺跡の北側には八木沢に含まれる小さな沢がある。遺跡の標高は185m～191mで馬淵川との比高は約70mである。現状は畑地である。

2．調査の概要

遺構は調査範囲の西寄りに縄文時代の住居跡1、それより南西方向8mに平安時代の住居跡1を検出した。遺跡の北東隅には埋没谷があった。

〈竪穴住居跡〉

縄文時代の竪穴住居跡は、傾斜地に立地するため斜面下位部分は削平をうけて不明であるが、ほぼ円形を呈するものと推定される。ほぼ中央に地床炉があるが柱穴は判明していない。遺物は床面直上から復元可能な土器と、磨石各1点が出土した。

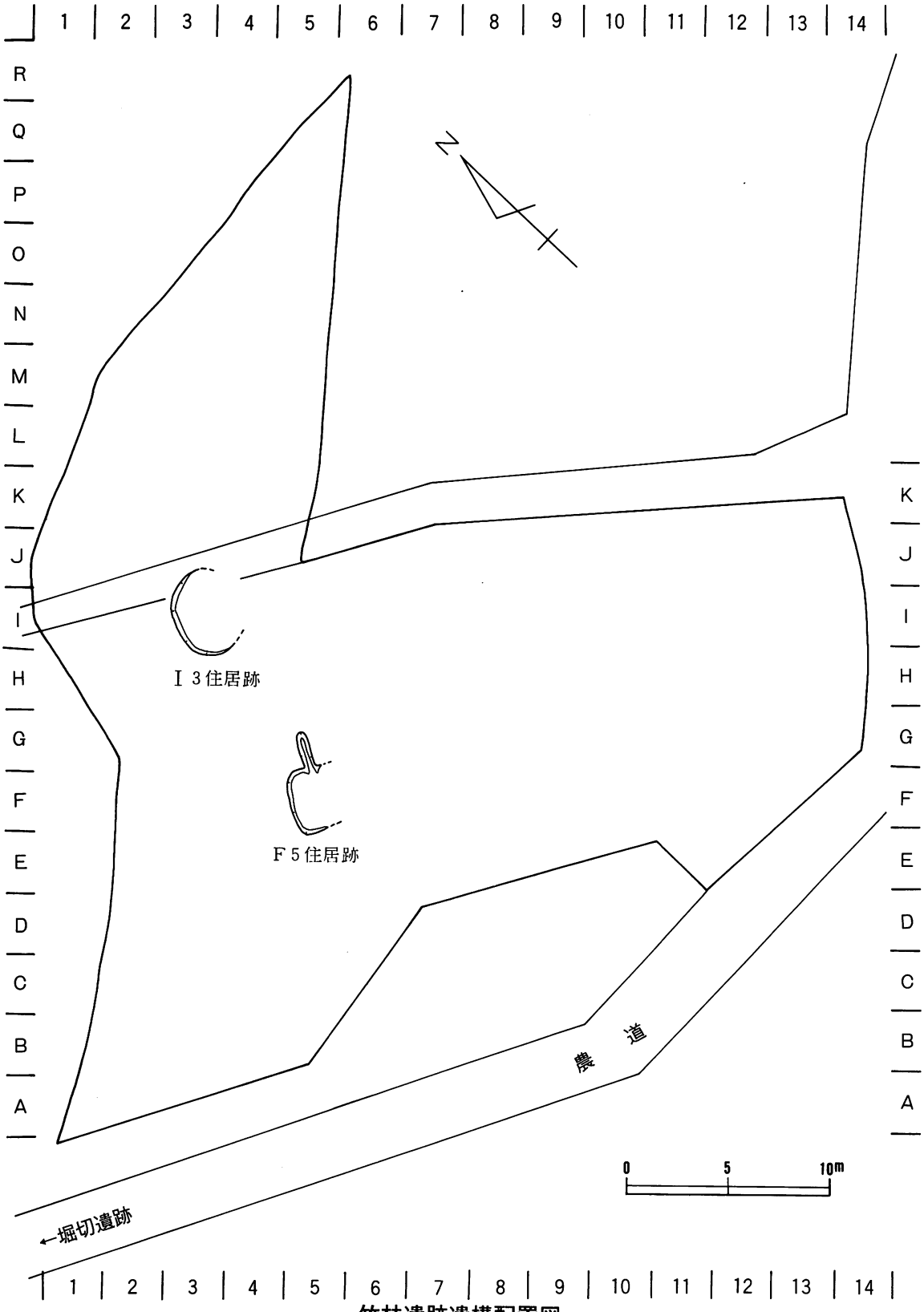
平安時代の住居跡は、斜面下位部分が撹乱をうけて検出できないが、平面形は方形と推測される。カマドは、北東壁の西寄りに構築されている。カマドの袖は礫を芯にして粘土で固めて構築している。煙道の長さはおよそ1.6mある。

〈出土遺物〉

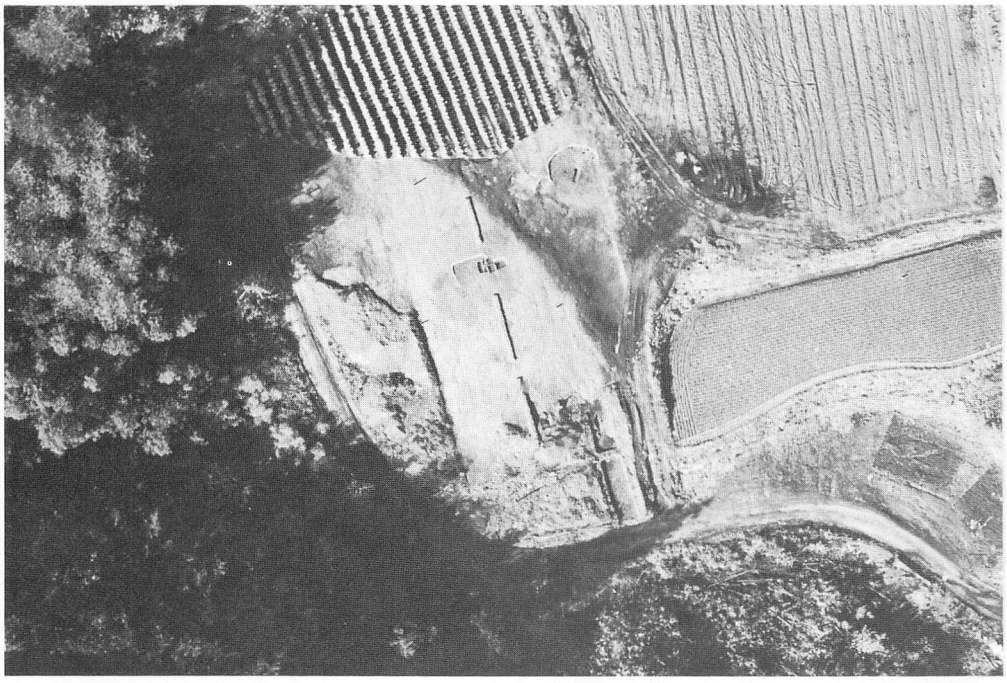
遺構内外からの出土遺物は、大部分が、縄文土器の破片、土製品、石器であるが、弥生土器や平安時代の土師器も若干含まれる。

3．まとめ

検出遺構は調査範囲の西寄りに限定され、埋没谷の出土遺物と合せて推定すると、遺跡の中心は調査区外に続く西の緩斜面にあると思われる。

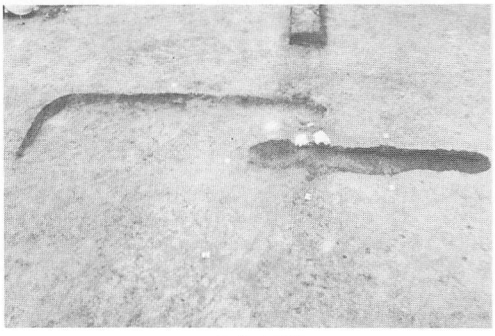

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14
R Q P O N M L K J I H G F E D C B A
N
Ⅰ3住居跡
F5住居跡
農道
0 5 10m
←堀切遺跡

竹林遺跡遺構配置図

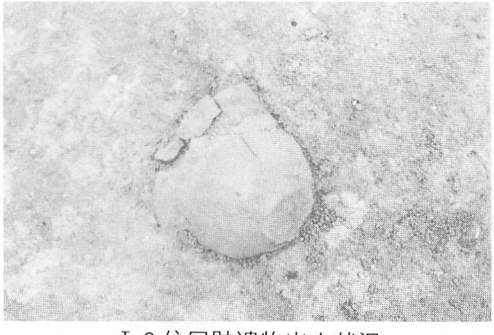


調査区全景空中写真

Ⅰ３住居跡



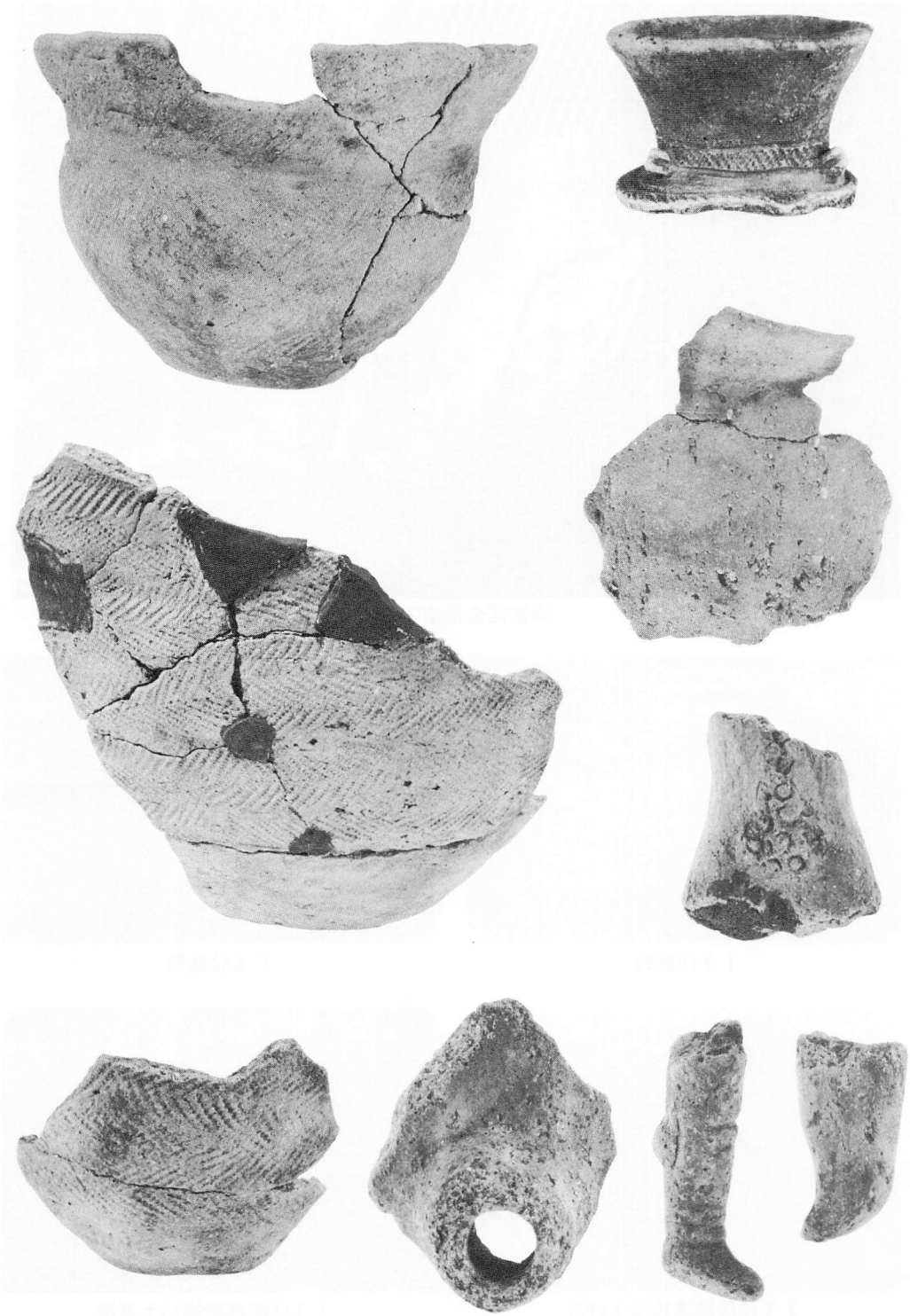
Ｆ５住居跡



Ⅰ３住居跡遺物出土状況

Ⅰ３住居跡遺物出土状況

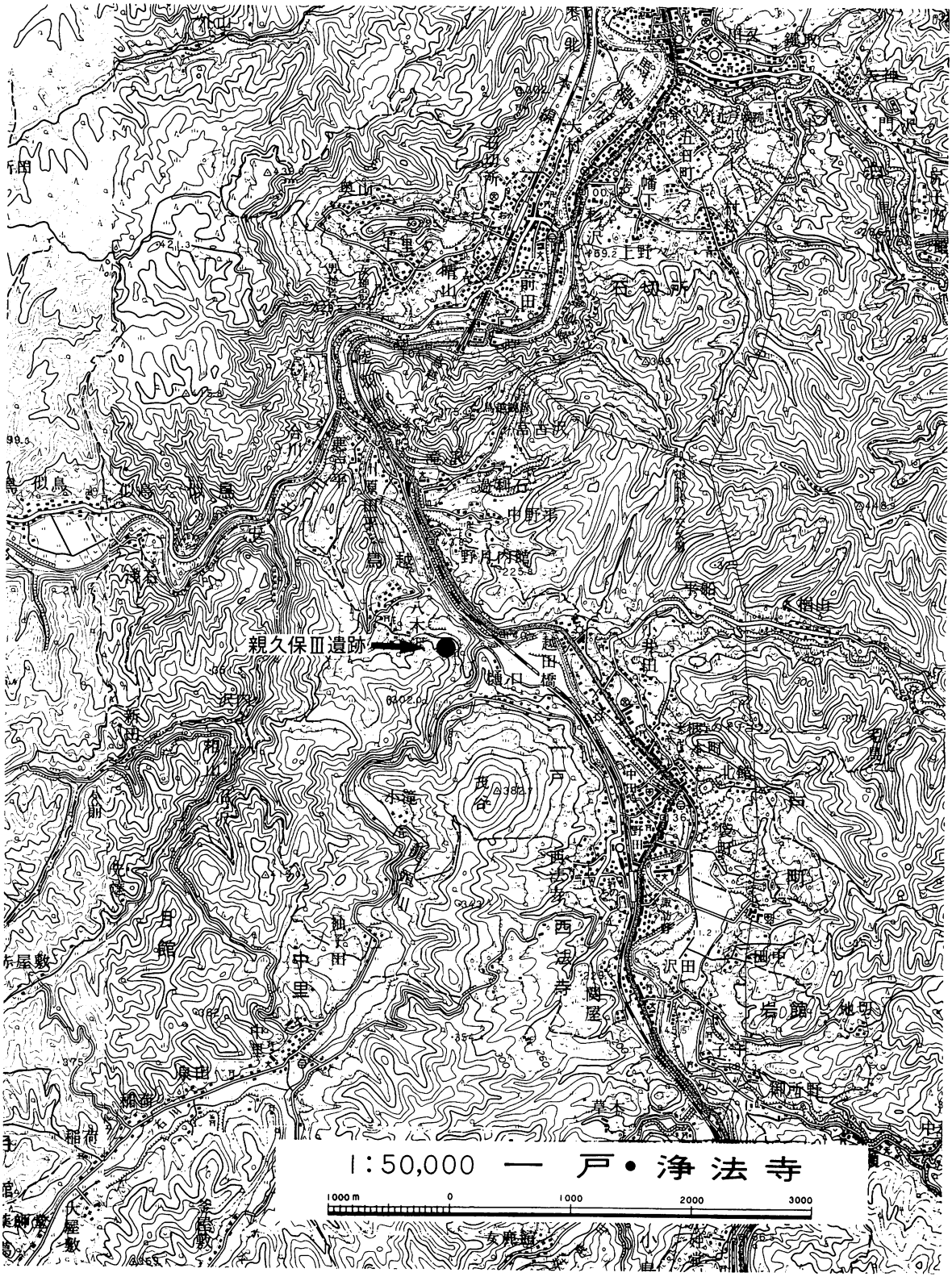
竹林遺跡遺構



竹林遺跡出土遺物

(13) 親久保(おやくぼ)III遺跡

所　　在　　地　二戸郡一戸町一戸字親久保149ほか
委　　託　　者　日本道路公団仙台建設局（一戸工事事務所）
発掘調査期間　昭和60年7月16日～9月13日
調査対象面積　7,560㎡
発掘調査面積　7,560㎡
遺跡番号・略号　ＪＥ19―1198・ＯＫＢIII―85
調査担当者　片方宗明・中川重紀
協力機関　一戸町教育委員会



親久保Ⅲ遺跡位置図

1．遺跡の立地

親久保III遺跡は、東北本線一戸駅の北西2.5km、国道4号線から500m南西側に所在し、北流する馬淵川左岸の上位段丘上に位置している。

この地域は、七時雨山山麓丘陵の北東端部にあたり、遺跡の北東側はわずかの田畑を挟んで馬淵川に面して急峻な崖となり、直下に馬淵川・東北本線と国道4号線が並んでいる。西側は埋没谷を挟んで山地が続き、南側は緩やかな山地へと連なる。

遺跡の地形は、南端中央部の尾根を頂点としてほぼ同心円状に等高線をもつ緩斜面地で、現状は畑地である。遺跡の標高は192m～206m、馬淵川との比高は遺跡の北東端部で75mほどである。

周辺の遺跡には、竹林遺跡、堀切遺跡、親久保Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ遺跡等がある。

2．調査の概要

調査区域は、東西140m、南北75mおよび、本年度は全面粗掘りのみを実施した。精査は来年度実施のため詳細については不明であるが、検出された遺構は土坑34、陥し穴状遺構13、住居跡状遺構3である。

〈出土遺物〉

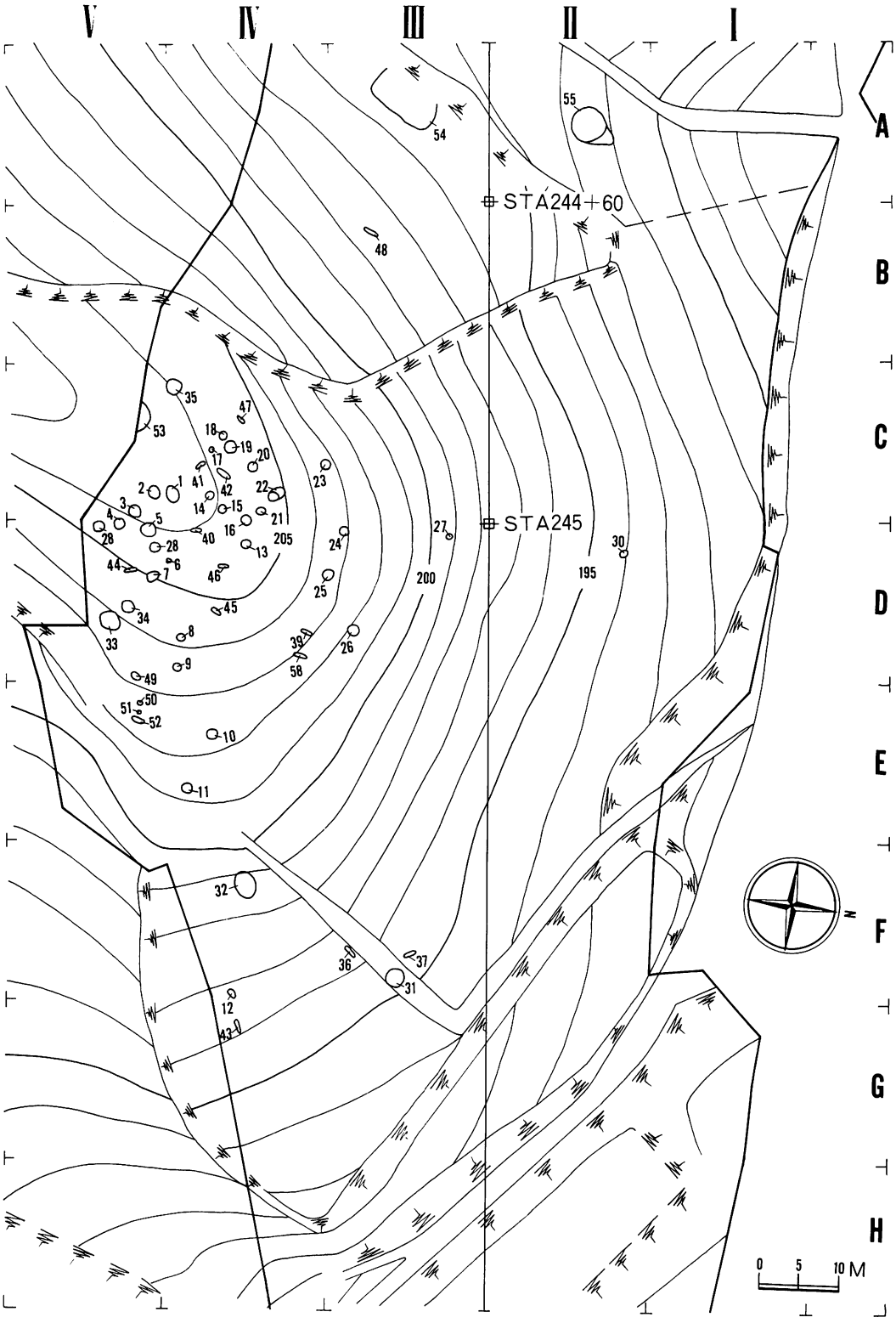
土器と石器があるが出土量は少ない。出土地点は頂上部及びその周辺に限られる。

土器は殆どが破片で、縄文時代前期～後期のものと弥生時代のものが出土している。

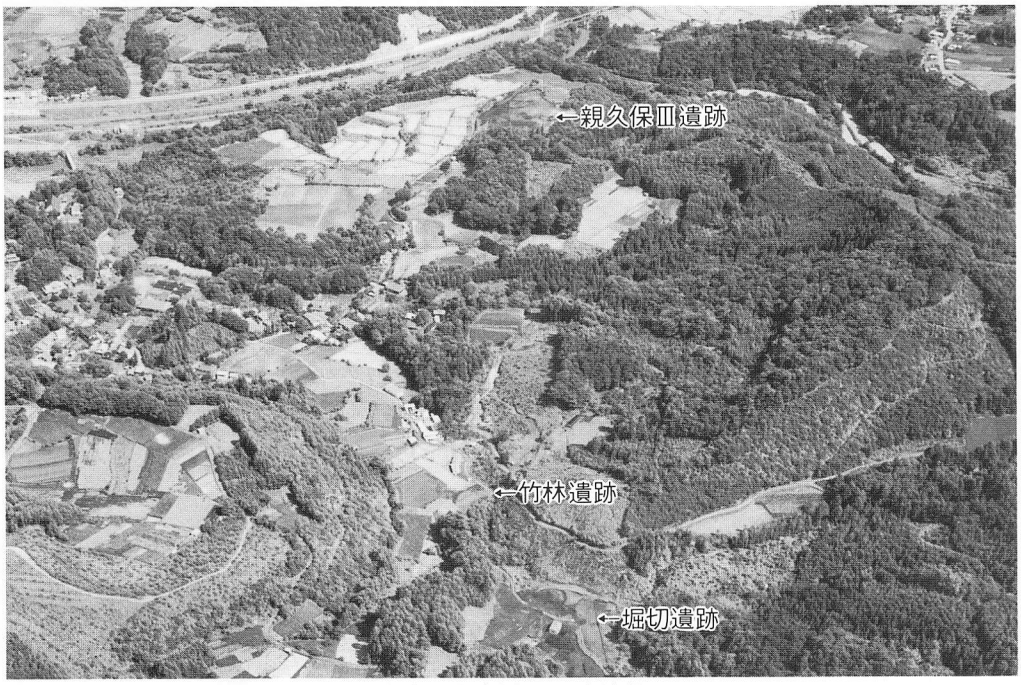
石器では、磨石、凹石、石鏃、剝片などが出土している。

3．まとめ

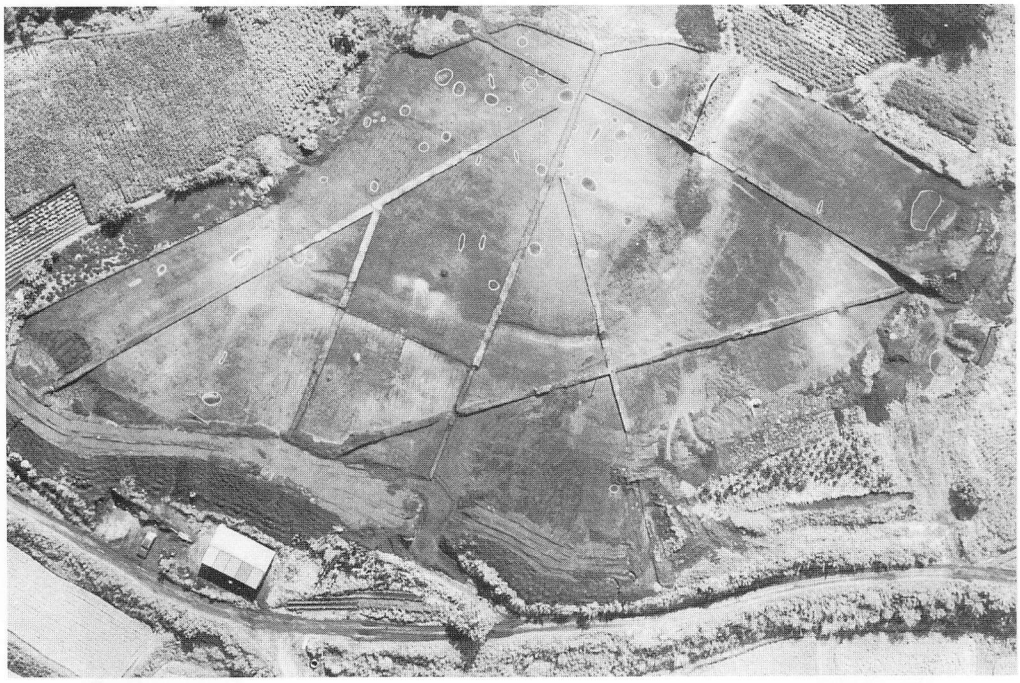
検出された遺構の精査は来年度に実施のため、詳細については不明であるが、陥し穴状遺構、土坑など遺構の大半は遺跡尾根部に集中していると思われる。



親久保Ⅲ遺跡遺構配置図

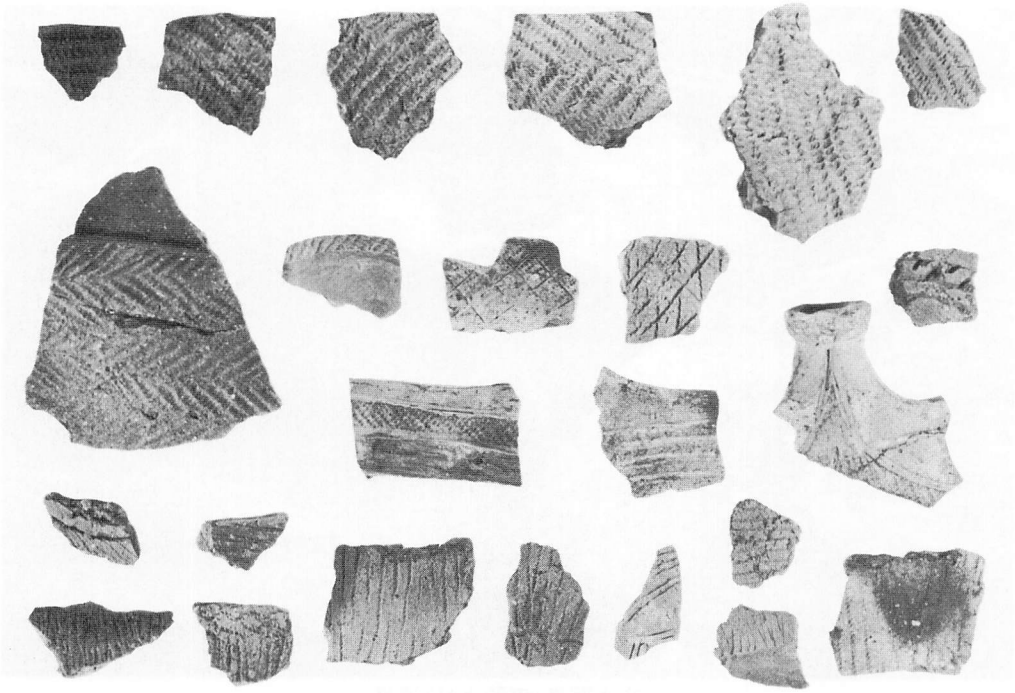


空中写真（南西より）遠景

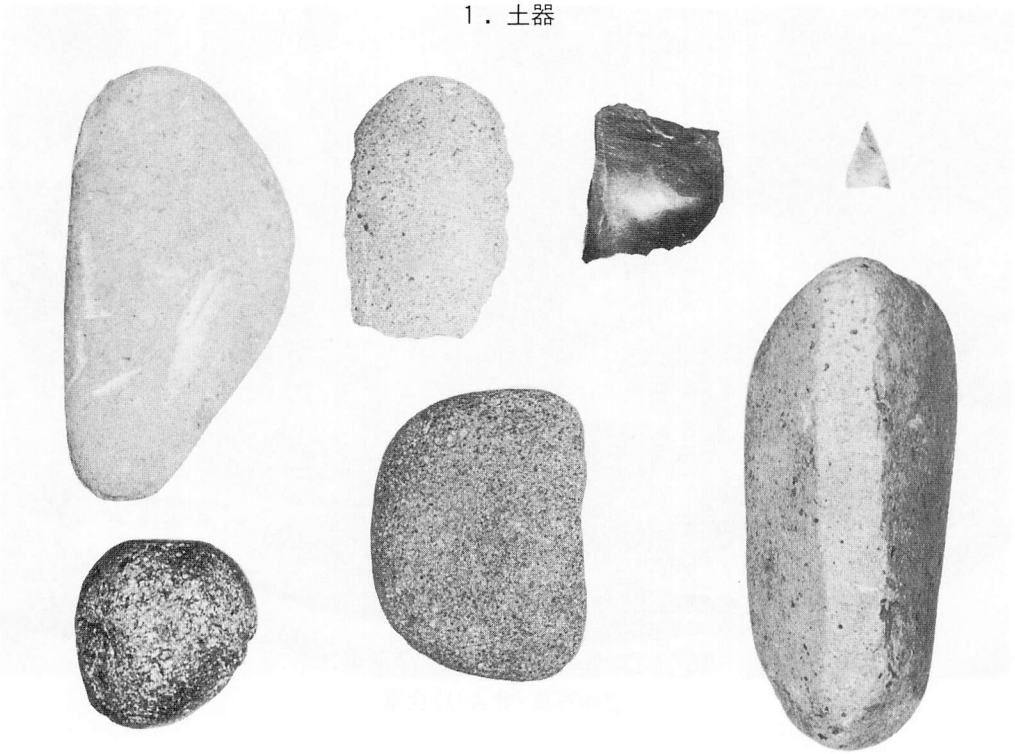


空中写真（北より）全景

親久保Ⅲ遺跡遺構



1．土器



2．石器

親久保Ⅲ遺跡出土遺物

財団法人　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所　長	及川昌二
副所長	宮　英一

〔管理課〕

課　長	千葉久夫
課長補佐	阿部詔夫
主　事	立花多加志
技能員	佐藤春男

〔調査課〕

課　長	近藤宗光		
主任文化財専門調査員	昆野　靖		
文化財専門調査員	片方宗明	文化財専門調査員	光井文行
〃	長沼　彬	〃	玉川英喜
〃	菊池利和	〃	石川長喜
〃	渡辺洋一	〃	三浦謙一
〃	佐々木嘉直	〃	工藤利幸
〃	平井　進	〃	中川重紀
〃	中村良一	〃	高橋与右エ門
〃	田村壮一	〃	高橋義介
〃	岩渕　久	〃	酒井宗孝

〔資料課〕

課　長	名須川溢男
文化財専門調査員	田鎖寿夫
〃	佐々木清文

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書第101集

岩手県埋蔵文化財発掘調査略報

（昭和60年度分）

昭和61年 2月25日 印刷
昭和61年 2月28日 発行

発行 （財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020 紫波郡都南村大字下飯岡11字高屋敷185
電話（0196）38－9001～2

印刷 株式会社 吉 田 印 刷
〒020 盛岡市名須川町23番27号
電話（0196）25－2323

©岩手県埋文センター 1986